# 星の歌舞伎

作　泉鏡花

## 一

夜に入つて未だ間もない。乗合の立籠むだ新宿から九段兩國行の電車の中に、前途へ向つて右側の中程に、一人、品の可い、二十四五の美しい夫人が乗つて居る。

近來天下具眼の士は、われ等日本人が電車に乗つて、入口に立つのを、島國の了簡也と、大に大陸がつて嘲るが、前後に煽られ、左右に揉まれ、眞中の鮨に壓されて、人間の鰭と鰓ばかり喘ぐほど可厭な心持な事はない。凡て乗りものは、乗人が降りることの自由を意識し得る時にのみ快い・・・・・とまでは行かないでも氣安いのである。恁う何も煩かしく云ふほどの事はない。氣の弱い、健康でない、分けて婦人は、同じ詰込まれた電車でも、底へ沈むほど早く暈ふ。

此の夫人とても、敢て現代の大義名分を重んじて、覺醒した模範と成つて、好んで眞中へ席を取つた次第ではあるまい。

願はくは片隅に潜んで人いきれに胸苦しく堪へられなく成つた時は、するりと拔けて降りたかつたのであらう。

華奢な姿は、彌が上に撫肩の細く成るまで左右から押着けられて、棹に掛けた細布と云ふ、手繰られたやうに萎々と、紺と濃い茶の、細りした絹縮の一枚小袖の薄い胸を、帶をせめて、がつくりと俯向状に、翻翔と燕の飛んだ縮緬の扱帶で、きりゝと緊めた、其の水色なのが、しつとりと一降り春雨の絹絲で、姿の柳を結へたやうで、そして惱ましげに癪を壓した風情がある。半襟は、薄紫、藤の刺繍。

靈ある池に影を沈めた、一枚金色の魚の背の如く、鼈甲の櫛が照々と鬢の艶に照映ゆる前髪を、白い手に・・・・・涼傘の長い柄に密と當てゝ額をつけた、上品な圓髷で、手絡の色は藤紫。みどりを洩るゝ其

紫に、白魚の指の紅寶玉の色は、胡蝶の緋の瞳に似て、藤の花の咲く中に、紫の香に醉うて、うつとり夢を見るやうである。

時は四月のはじめであつた。

空は朧の雲蒸して、雨催ひの、日は暮れながら暖か過ぎる春闌な宵の氣勢の漲るばかり流れ込む。紅、白粉が漂つて、髯も、帽子も泳ぐ中に、然うした夫人の装は、椅子の緑の苔滑かに、涼しい岸に花一房、水に影を宿した趣がある・・・・・乗合が動揺むにつけ、車の揺るゝにつけ、奥深く成つて、浮世を離れて、乗合の底深く、スツと消さうな姿に見える。

昔から言傳へて、九段で怪我をすると危いと云ふ・・・・・一寸轉んで擦剥いても、肉を裂き骨を開く。鎌鼬の巣だなぞと云ふ。あの、賑かな中に、もの凄いやうな、たよりない廣い坂を、恁うした姿が鳥居から高く一人で降りたら、白晝と雖も尋常ごとではあるまい。ーー　電車は、但し何事もなく、徐行しつゝ彼處を降りた。

一度、九段下の停留場で留まる、其の間も、涼傘の柄に俯向いたまゝで居た。

藤は面影である。襟脚の一際白い、黒縮緬の紋着羽織を、しなやかに着て居るのである。

其處でも、下りるものは二三人で、十四五人が乘込んだ。いや乘込む處か、攀上り、ぶら下る・・・・・頭を振立て、手足を■いて、すぢりもぢりに、胴を綟つて揉む工合は、傳へ聞く、須磨の浦の蜑ケ家へ、鮹の搦んだ體がある。月の渚の眺めがある。

とは言つて置くものゝ、其の實、・・・・・離れ藝、輕業である。酒落なのではない。各自生命がけなのである。串戯ではない。親の死目に急ぐのではない。産婆でもあるまいに、次の電車は遲くて五分と待たせぬのを、熟惟るまでもない、事を好んだものである。

却説、電燭の燃ゆる中に、大煉瓦の建物沿を、眞黒な溝が通つて、灯のない幽靈船が、音も立てない

で漕ぐ處は、天文學者が狙つて居る火星の裡から、赤い髯の小父さんが、却つて望遠鏡で、逆に覗いて居さうな、掘割の俎橋を、どろ／＼と抜けた時、がたん、と一つ車が軋んで、鼈甲の櫛が揺れると、夫人は顔を上げた。

清い目も霞むまで、鮮麗な眉が、惱ましげに顰んで、身の周圍を〓したが、其の象牙のやうな、つゝと通つた鼻筋さへ拳固で打たれさうな人間の黒煙。

で、あはれみを乞ひ、助けを求めたさうに見えたけれども、人に蒸せたか、口を結んで、遣瀬なげに微笑むのが、何故か、覺悟して、惡怯れず、投遣りに斷念めたらしく見えて又俯向く。

電車が、軒を並ぶる名物の書籍屋の店へ、文明の響を投げつゝ、神保町の停留場に近く進んだ時であつた。

ぷら下つたか、潜つて居たか、其の時、乘合の肩と、胸を、水掻の有るやうな皺だらけの手で掻込ん

で、水を泳ぐ如く一氣に押分け、運轉手臺から降りるつもりか、前面へ、ぬつと、白髪が天邊へ拔け上つた、くな／＼の黄色い顔を出した老媼がある。

七十有餘、髪は祖母子に結つて居た。

尼ではない。が、腰法衣を着けないばかり。鼠の無地の布子を着て、紋のない、變な樺色の小紋の羽織を襲ねた。いづれも手織とは見えないけれども、洗さらしで、へな／＼と心が拔けたのに、木綿か、羽二重か、白が赤樺に成るまで薄汚れた卷つけ帶、萌葱ともつかない、黒ずんだ鬱金の　ー　猫を三疋袋にしたほどな　ー　風呂敷包を膏女背負に引括つたのが何を又何うして狼狽へたやら・・・・・

町場を三つも乘違へたやうな、けたゝましさで、遮二無に押分け、揉拔け、摺拔け、前へ人を衝いて出ようとした、が、電車は停まつて居るのでない。

腰も撓まず、よろ／＼、皺だらけの口を開いて、あつぷ／＼と喘いだと思ふと、ひよろりと、足が浮いて、倒れかゝる前のめりに、辷つた手が、何と、

丁ど其の爪の下だつた夫人の黒髪に掛つたではないか。

はずみであらうが、引しやなぐるやうに、髷を掴んで、のめる重量で、ぐい、と引くと、千筋を力に體は留つて、鼠色の老媼は轉ばずに立ち直つたが。

花藻を潜つた草鞋の如く、件の水掻でも有りさうな老媼の掌が、夫人の黒髪を離れた時、がつくり圓髷の根が拔けて、おくれ毛が、はら／／と、水が垂りさうに頬に落ちて、美しさは、其の老媼の手に緑の影が映すやうで。

櫛は拔けて、其處に月影が颯と折れる。

驚駭の聲を立てたのは乘合の唯三人五人でなかつた。車掌も吃驚して、あつと云ふ。

「御免なされませい。」

黒髪を、いま掴壞した手の甲を、仰向けに己が口

へ當てたは、聲繕ひでもしたらしく、落着いた野太の聲で、然う云つたのが、やかて出口で。ーー　其處で振返つて熟と夫人を見て、動搖みながら下りる人に、のそ／＼と續いて、大路の地に吸込まれるやうに鼠色に成つて、ぼやけて消えたのが、交叉點を白山行の方角であつた。

「酷い婆々だ。」　車掌が呟く。

「引捉へて遣れば可い。」　と、腹立たしげに釣革にぶら下つた乘客の一人は云つた。

車掌が鋏で乘換切符の小口を敲いて、

「粗相だと言はれりや其れまでゝありますからなあ。」

然う云つて、ぐいと踞んで、其處に落ちて二つに折れた鼈甲の櫛を、節くれ立つた武骨な指で撮んで拾ふ。

ために、靴を引込めた腰辨らしい背廣があつて、

「年寄と云ふのを笠に着て、然も／＼己は世間から保護さるべきものだと云ふ面をするのが流行りま

すな。あれは憎いですよ。」

車掌は其の櫛の折を手に据ゑたが、貴女とも、夫人とも、率爾に聲を掛け兼ねた。

美しい夫人は、老媼が、（御免なされませい。）

ー　通一遍、詫びるとよりは、圖横柄に棄臺辭を殘した時、掻亂された、前髪の艶やかな蔭に、凛とした眸で一目見たばかり。其のまゝ靜と、より深く涼傘の柄に額を着けた、と呼吸の絶えたものゝ如く、身動きもしないで居る。

麗なのと、靜なので、車掌は夢の裡で名の知れぬ花を見たやうに、如何とも疾には手の付けられない樣子がある。

時に、乘客の肩を分けて、一人、絣の羽織に、鳥打を被つた、脊の高い、青年が衝と寄つた。

目は清しいが、眉のあたりの暗いのは、額を蔽ひ後腦を掛けて、新しい繃帶をして居るためで　ー

これは赤坂田町邊に借家を持つ、前原辰馬と云ふ、まだ餘り世には聞えない畫工である。

衣服の縞は大名ながら、懷中の薄寒さうな、肩ばかり屹と成つて杖一本、他に何にも持たない手を車掌に向けて、ずいと出して、

「私が預る。」

と一一息に云つた。

何の蟠りもない、あけすけな態度が、一言にして、其の夫人の連である事を納得さす。

車掌は默つて、櫛を渡して、

「飛んだ事でございました。」

却つて前原にくやみを云ふ。ーー　監督が窓を覗いて居た。

「お下りに成りますか。」

と、畫工の云つた時、女も交る夕刊賣の聲の中を、鈴音高く、電車は動く。紫陽花の如き電光の閃くのも、美しい人を乘せた夜の車の花であらう。

## 二

「今川橋の處だつたよ。何、こんなに混雜して居たんぢやない。腰を掛ける處も澤山あつた。・・・・・止しや可いのに、婆の癖に、人さきに引搔分けて飛乘り同然に駈上つた、阿彌陀の背中へ背負でもする氣だらう、馬鹿な。

おまけに日和下駄を穿いて居たらうぢやないか。

矢張、荷物を擔いで居たつけ。何うして、今の奴ぐらゐなんぢやない、もつと一抱、二嵩もある重さうな荷だ。

重荷は氣の毒だ。けれども、其の重量まで身體ぐるみ一所に成つて、僕に倒れかゝつたんだ、堪るものかい。

そら、乘る拍子によろ／＼と成ると、何うだ、鬼の化けた伯母さんが、渡邊の綱の破風から、どしんと落ちたやうに、僕の膝へ荷ぐるみだと思ひ給へ。

婆が、がんと手を支いた僕の此の股の附際。俗に辨慶の泣處とか云ふのを、奴め、つんのめつて轉ぶまいとする一生懸命の力でな、親鸞上人の許可が出て、嫁を拷問するほど、ぎりゝと抓つた。・・・・・服を着て居た、筒服の上だから助かつたのよ。

單衣や袷で見給へ。肉も捻切れたらうと思ふ。痛いの痛くないの、骨髄に牙が徹つた。僕は、うつかり腰を掛けて居た。・・・・大袈裟ぢやない、鎌鼬が舞下つて啖付いたと思つたよ。痛い、と喚くと目が眩んで、其奴の手と胸を壓へて、夢中で引携るやうに突飛ばした。一捻ねぢて刎倒したのよ。荷は重し、肥つて居やがる。奴も離れまいと噛着いて居たんだからな。

押退ける勢で、奴はどしんと怪飛ぶ、と其でもよくしたものよ、仰向けにも轉ばないで、のけぞりながら、向う側の腰掛へ叩きつけられたやうに、ぐしやんと大跨で腰を落した。

脊骨ぐらゐは打つたらう。

爾時の言種を聞け。頬骨の尖つた、面の四角な、口の大きな婆だつけ。眞黒な齒莖を潤と剥くと、汚點のある額で睨んで　ーー　（何さらす！　年寄を手暴な事を。邪険な、薄情な、蛇よ鬼よ、阿奢世。・・・・・・）

阿奢世・・・・・は脱線さね。　（年寄ぢや思うたら、手を取り、腰を抱いてこそくれまいけれ、投飛ばすとは、親不孝の、不忠不義な餓鬼め。汝、腰の骨を挫いた、あゝ痛い、おゝ疼い。ーー・・・・・お天道さまは可恐くないか、覺えて居さらせ　ーー）

忘れもしない、大聲で、然う喚いた。怒鳴りやがる。歯茎で噛んだ澤庵を吐出すやうに雑言する。僕はむら／＼とした、嚇と成つて拳を握つて立たうとした。が、顧みて、可いか、ボギイ車の中をずらりと〓すと・・・・・餘所目には何うだ、蹌踉けて倒れかゝつた年寄の、しかも重い荷を背負つたものを、可哀相に、抱きとめ、労りでもすることか、がむしやらに突飛ばして腰骨を惱ませる、と婆の罵る、其

の通りに思つて、じろ／＼と此方の顔を見て居るのが、歴々色に顯れて居ようぢやないか。

少い娘も乘つて居た、・・・・・母親らしい品の可いのと並んで掛けて　ーー

僕は口惜いが居たゝまらないで電車を下りた。

何うだい、君、人道も車道も何もあつたものか。そんな婆は、ぐわんと撲り倒して遣るが可いんだ。・・・・・彦左衛門め、御前體、杖御免と成ると増長をして不可んのだ！」

見て居た、手帖を半ば閉ぢたのを、やがて衣兜に突込んで、なにがし大學の制帽を着た青年が奮然として早口に談じた。

おなじ制服の伴侶が、夫人に並んだ、其の、一人おいた隣から、話したのである。

畫工は此の話を、ーー　それも連と覺つて、混合ふ中に通勤氏が半ば分ち與へた、同じ釣革に縋りな

がら、夫人の前にふら／＼と立つて耳を澄ました。

電車が駿河臺下で留まつた時。

此を待構へて居たやうに、やゝ蒼白んだ、が、尚ほ凄いほど美い顔を上げて、

「下りませうか。」

前原は猶像はず、

「兎に・・・・・角。」

藤の姿はすらりと立つた。

端麗なる夫人の、思ひも掛けず鼠色の嵐に惱まされたのに同情して、言合せたやうに、場席を開いた中を、畫工に續いて、然まで蹌踉めくともなくすら／＼と車を出た時、はじめから着ないで、膝にのせた、墨繪の羽衣を疊んだやうなお召縮緬の半コオトの、先刻から事の煩はしさに、恰も忘れたやうに、柔かな袖の折目に掛つたのが、長く裳を曳いたやうに、脊もすらりとして、何故か、それが解けかゝる圓髷を支ふる、疊紙に備はつたらしく見えたのである。

「一旦、旅宿へお歸りに成つては何うです。」

丁ど東明館前で、怪しい乘物から放たれた體に、揃つて一呼吸、彳んだ時、先づ畫工の言つたのは此の事で。

電車は俄然として空に成つたと思ふほど、きやつと狂人の如き叫喚を揚げて、すとんきやうに駛り出す。

夫人は其を正面に　ーー　街燈の蒼味を浴びて、頬も白々と見送りながら、

「否。」

「其でも。」

「えゝ、何うせ行く處へは行かなけりや濟みますまい。」

と横顔で微笑んで、

「大層、意味の有るやうに聞えますわね。・・・・・平つたく言つて了へば、最う、やがて、彼方では　ーー　あゝ、お茶屋は何とか言ひましたつけね。」

「兩國の松岸です・・・・・」
「松岸　ーー　次手に其方の岸へ行きませうか。」
線路を渡つて、此から歩行きながら　ーー
「自分が御馳走に成りに行く先を・・・・・途中まで送つて頂く貴下に聞いて思出すわけなんですもの。お察しなさいまし。」

「照樹さん。」
夫人の名は照樹である。ーー　其だと、關西某縣、某大學の教頭、博士清川扶道氏の夫人。

とすると、主人扶道も全國の教授會議に、目下上京中。で、畫工が、繃帶も未だ生々〳〵しい額の傷は、仔細あつて、ものゝ行違ひから夫人のために、つい、二三日前、紀尾井町あたり煉瓦造の或邸で、傷つけられたものである。

或邸と云ふ、其の邸の主人公こそ、老博士松澤嘉行。狼髯虎腰の大家で、若き博士清川扶道には、學

問は違ふが、先輩にして且つ恩人に當る。

其が、今宵、他客とゝもに、清川夫妻を招待して、隅田川の松岸に、一席の宴を催す・・・・・照樹は、其處に行かうとする途中なのであつた。

## 三

「奥さん　ーー」

「まあ、貴方大層あらたまつて、」　と褄を留める。

「何とも申上げやうはありません。」

畫工は歎息した。

「御免なさい。」

故と輕く詫言して、

「恁うして送つて頂きながら、言はゞ貴方の仇見たやうな人の處へ御馳走に成りに行くんですもの、私こそ何とも申上げやうはありません。」

畫工は杖を力なく支いて、

「否、飛んでもない、そんな事ぢやありません、貴女の其の御髪ですが。」

「あら、御覽なすつちや・・・・・極が惡い。」

「實際、見て居ても危なつかしい・・・・・ぐら／＼して、壓へて居たいやうです。する／＼解けてよす。」

「では、壓へて歩行いて下さいましな。でも、然

うすると、一寸、長屋で夫婦喧嘩をして、髻を引摺られて行くやうですわね。・・・・・・」

「串戯ぢやありません。」

「何しろ、餘り明くつて、」

夫人は鬢を壓へた。

「裏通を行きませう。」

で、横町へ。

「眞個に怪しからん婆だ。」

少時言の途絶えた時、畫工は溝端の石を、杖で一つ當てつゝ、思出したやうに、

「全然、故としたやうにしか思へない。」

「まさか、そんな事は無いでせう。」

「貴女は、あの婆を見ましたか。」

「えゝ、見ました。可厭な風體ねえ、氣味の惡い・・・・・」

「先刻の學生ぢや無いけれど、眞個打捉へて、あの、ぶよんとした頬邊を撲曲めて遣りたかつた。河豚が中風症に成りました、と云ふ、あの圖體は何う

です。」

「何でせうか知ら。あんな風體をして。」

「巫女ですな、先づ。」

「巫女。」

「知つては居ませんが、まあ樣子が。産婆でもなし・・・・・祈祷者、飯綱つかひ、然う云つた心持がします。」

「可厭ですわね、氣味の惡い。風呂敷包を背負つて居ましたツけね、薄汚い。」

「然うですよ。」

「一人置いて隣に居た學生の方が話して居なすつた、今川橋で倒れかゝつたと云ふのも、確・・・・・」

「矢張り然うです。・・・・・しかし私が聞いて居ました處でも、同じ婆ぢやありません。そんな事は些とも氣になさるには當らない、が、何しろ私が不行屈きだつたんです。

晩方、内へ來て下すつた時、此方は御邸でなくつても確な帳場は近所にあります。宿車でお送り申すと可かつたのに、ーー　明日は最う御出發だと云ふし、又貴女に、御心配を掛けようぢや無いけれど、いづれ多勢見送り人があるんでせう。その中へ、此の繃帶は持出せません。

其處等まで一所に出ないか、御意は可しで、連立ちました。ーー　溜池の通りの、あの晩方混雜な中で、一寸した呉服屋の店で、半襟を一掛お買ひなすつたでせう。・・・・・内の女中に手土産が無かつたから遣るんだつて、・・・・・」

唯見る、碁會所の柱掛の、歌川の錦繪に、夫人の俤が通ふのである。

「・・・・・あの時です、貴女が其の帶の下のーー　妙な癖だけれども以前から　ーー　其のお端折の中・・・・・又目立ちますね、細りして居なすつて、何處に身體が有るんだか分らないから。胸にも腰にも、部のあらうと云ふのは衣服のお端折り

に成つた合目ばかりだ。」

「知らない。」　と、細腰を涼傘に撓める、と又痩せる。

「・・・・・例に依つて其のお端折の中から、二折の紙入をお出しなすつた、勘定をするつて。ーー

それには仔細は無かつたんだけれど、亂暴にお扱ひなさるから、二折がぶらりと下つて、紙幣の大分、部の厚い、折重ねて揃つたのが、店頭へばたりと落ちたでせう。　（細いのがあつたつけ。）　と、横に振つた醉ソばらつた奴の中に、金貨さへ交つたぢやありませんか。」

「えゝ／＼、大金持。」

「話すも、卑しいやうだけれど、私は酷く氣に成りました。・・・・・と云ふものは、隣の道具屋の雨落の處に一人、それから店飾の硝子窓を覗いて一人、どツちも風體のよくない半纏着の若いものが。

もう一人、向う側の寄席の看板の下に、此陽氣だ

のに、毛皮の襟の着いた外套を着て、茶の中山高を被つた頤鬚の濃いのが居て、三人一齊に御所持の束に目を着けた。向う側のなんさ、間を可なり隔つて居ながら、表町から電車の光りの飛沫が來たやうに、目球がピカリと紙入へ輝きましたよ。串戲ぢやない。貴女、金子の、貴女、あんな扱方をするつて事がありますか。」

「濟みません。」と頭を下げる時、一寸圓髷を壓へたが、煩さうに頭を掉つた。

畫工は不意を食つた體で、ふと立停つて、これを見て、

「いや、お詫びでは恐れ入ります。」

「然も／＼田舍ものと言はないばかりですね。」

「否、大名藝だと言ふことです。」

「澤山よ。」

「私はぎよツとしたんです、實は。・・・・・最う日が暮れて居るんでせう。で、（見附から夜櫻を見ながら一所に行きたいが先は急ぐし、もう車に

乘らう。）　と何心なくお言ひなすつたけれど、一件の三人六ツの目が、貴女の身體にくつゝいて居さうで成らない。・・・・・田螺のやうに。」

「氣味が惡い。」

「然う思ふと、見附の人が、どの顏も、掬摸、剽盜に見えて成らない。言へば氣味をお惡がんなさるだらうし、困つた、と思つて、こりや電車の方が安全だ、そして一所に乘つて氣をつけてれば、大丈夫、と考へたものなんです。」

畫工は帽の廂を直して、

「お車になさい、と此方から申上げる、それが相當。貴女の方で乘る、と言ふのを、否、電車になさいまし、一所にお送り申したい。・・・・・」

今度は打つやうに帽子を壓へた。

「餘程發心をしないぢや、御婦人に對して、可厭な事を　ーー　然うは言へないものだ、と御承知下

さい。」

「畏まりました。」　と、きつぱり言ふ。

「・・・・・・・・・・・・」

「然も輕蔑なすつたやうね。」

「え。」

「婦人如ぎに深切をと・・・・・・」

そんな意味ぢやないのです。」　と笑を交ぜて少し慌てる。

「眞個に御恩に被ますわ。」

「又、然うまでは・・・・・・」

「でも、嘸ぞ御迷惑。」

摺違ふ書生を避けて、夫人の袖の寄つた時、何處のか軒に咲いたやうな、花の香がぱつと薫つた。

書生は口笛を吹いて行つた。

「それだのに、却つて、飛んだ災難にお逢はせ申して・・・・・・恁う成ると電車を勧めた私がお被せ申したやうなものだ。・・・・・・貴女は故と心配を

させまいと、平氣で串戯口なぞを言つて下さいます、が、それだけ尚ほ心苦しい。

此れから晴々しい、人目の多い、宴會の席へおいでなさるんぢやありませんか。

こりや事によると、貴女に取つては、・・・・・御婦人としては、分けて奥さんと云ふお身體ちや、紙入をお掏られなすつたぐらゐの御迷惑ぢや濟まなくはないか知らん。と實は案じられて成らないんですがね。」

路地の片蔭、手絡の色の、鳥羽玉の黒き中に夢のやうに白かつたのは、亂れて色の褪せたのではない、照樹の手が其の黒髪にかゝつたので。・・・・・もう散りさうな手絡の切を、心着いて、もつれた中から抜いたのである。

「前原さん。・・・・今通つた書生さんで思出したんですがね、先刻の學生の方が言つてなすつた、あれは何うしたツて言ふのでした？・・・・・私、

頭がふら／＼するので、電車の中ぢやよく聞取れなかつたんですけれど、貴方は覺えて在らつしやらない事。」

「何です。」

「婆さんが、又何うとかしたツて？」

「今川橋で、」

「そのあとで、又愛宕の山で何うとかツて？・・・・・」

あゝ、夫人は聞いて居た。

「三田の人らしい、あの學生が、その後、愛宕の塔の上へ昇つた事があつたんですツて、晩方ださうです、一人で・・・・・よく／＼小遣がなかつたんだツて、苦笑ひをして、伴侶の學生に然う言つて居ましたがね。

塔の中にや誰も居ない。おまけに晩方でしたとさ。・・・・・がらん堂の彼方此方、幾階か壇を上つて、頂上へふい、と出て、根の生えた風船に乗つたと思ふ、東京中の森の黒いのが、颯と波のやうに成つて雲が近いと見ると、柱の蔭から、ぬいと顔を

出した婆さんがある。宙に住つてたのか、思ひも掛けない、又其の婆さんの面が、今川橋で見た奴とよく似て居たので、棒すくみに足が窘んだ。お茶を上れ、と茶盆を出したのを振向きもしないで、奈落へ飛込む氣で遁げて下りた。ーー　然う云つて居たんですよ。」

「まあ。」

つゝと寄添ふ、紫の襟の影が、前原の頬に映つて、

「私、何うしませう、此の髪を。」

「・・・・・・・・・・・・・」

暗の空から生るゝやうに、白い櫻が二片三片。何處のか便りない軒燈にちら／＼こぼれて、貝を一枚鏤めたやうに、黒髪に留つた時、又夫人が云つた。

「此處はお杜ね。」

前原はうつかりと、

「えゝ然うですよ。」

「五十稲荷様。」

「よく御存じです。」

「まさか・・・・・そんなに地方ものにしなくつても可ござんす。此の邊から學校へ通つた事もあるんですよ。」
「成程。」

「水がありますわね、境内に。」
「何うですか、池は分りませんよ。」
「あら。」

耳許清らに、横に見返す瞳が涼しく、
「知つてますよ、池が有るか無いか、そんな事・・・・・手水鉢の事ですわ。」
「それは有りませうとも？　何うなさいます。」
「えゝ、有るのは、・・・・・分つてるんですけれども、一寸ご相談をして見ました。」

「參詣をなさるんですか。」
「えゝ。」
「では御一所に　ーー　あゝ、それで手をお洗ひなさるんですな。」
「そして髪を。」

「髪を？」
前原が驚いた。

縺れかゝる鬢の毛の、耳のあたりを細い指で壓へて、夫人は直き其處の杜の裏門を、姿が浮く風情に、然も薄暗くスツと潛る。褄捌ぎは猶豫はず、すら／＼と通つたが、何故か悄然とした肩が細い。

前原は膝の處へ、兩手で杖を横に握つて、其を夫人と隔ての垣、妙に魂の据らない、ふら／＼とした形で續く。

あの境内は廣くない。

トンと背を凭たすやうに、御手洗の柱に脊筋の撓やかな蔦を投げて、背後向に彳んだ時、輕い息を吻と吐く。照樹の姿が寂しいので、納手拭が二三枚、はらりと落掛る桐の葉のあはれが見えた。其の癖、其の桐が咲いて、中空に面影に立つか、と見える。

「奥さん。」

「・・・・・・・・・・・・」
「貴女、お考へなさらなくつても可いでせうか。これから兩國へ行らしつて、宴會の席へお出なさるまでに、綺驢に乾きますでせうか何うでせう。」
「それは乾きますまいよ。」
と、きつぱり云ふ。
「えゝ。」
「濡れたまゝでせうよ。」
前原は向側へ。御手洗の角を隔てながら、心は摺寄るかと思ふ咳込んだ調子で、
「ぢやあ、あの濡衣をお着なさらうと云ふお覺悟で？」
「濡衣ですつて、・・・・・まあ何ですか、私の柄では無いやうね。」

唯顔を見合す。夫人の瞳が上へそれると、御手洗の屋根はづれに影さすばかり、一本の櫻がこゝに咲亂るゝ。

思掛けない雲が來て、優しく袖を包んだやうに、照樹は胸を抱いて恍惚と見上げながら、

「私ぢや破蓑が相當ですね。」

花の雫が、しと／／・・・・・

春の夜が描いた、此の怪しい筒井筒の一枚繪は、正面の社の、閉した狐格子を漏れる寶珠形の蝋燭立の眞中に、灯して半ば消えた唯一本の蝋燭に映出さるゝ。

堂の棟に續き、又玉垣を隔てた處に、家々の窓の燈は、恁うした宵の障子を染めて、濃く薄く山吹の花の咲いたやうに見える。其が眞晝の如き表通りを一側外に控へたゞけに、宛然田舍家のもの寂びた風情で、燃ゆる灯が唯一つ、櫻が一樹咲亂れた寂寞した境内は、奥山の祠に似て、都に遠く、里を離れたやうである。

「破蓑だなんて、そんな亂暴なことを言つちや不可ません。」

と畫工は御手洗の水を凝視めながら云つた。

夫人は胸を擦るやうに、衣紋に淺く片手を挿したが、落着いたもの云ひで、

「では・・・・・矢張り濡衣にして置きませうか。其の方が色氣があつてせめてもですから。」

「冗談を、私は眞面目に心配をして居るんです。」

と、色を緊めて屹と成る。

「御免なさい、種々〳〵氣を揉んで下さるのに、暢氣らしい事を云つて。」

一寸俯目で、

「済みません。」

「すむも済まないもありませんけれども、眞個お氣味が惡いんですか。・・・・・そりや御心時の惡いのは知れてますがね、髪をお洗ひなさらないぢや不可ませんか。」

「えゝ、そりや私だつて、此から晴の場所へ行くんです。其處には主人も居ますし、窮屈で氣の置ける人たちも來て居ます。第一　ーー　今年までは、頑固に御自分の田舎に居て、主人が仕送つて居たん

ですけれど、今度は都合上、私たちと一所に住まうと言ふ、奥州黒澤尻と申すね、むづかしい處のお姑さんが今夜の席へ呼ばれて居るんでせう。大方五十年以來の御紋着、白襟で上座に開直つておいででせうよ。・・・・・旅籠屋で、そんな裝束のやうに云つてゞしたから。

外に親類も三四人、雜と婚禮の御披露を仕直しと言つた席なの・・・・・實は。ーー　ですから更つて圓髷になんぞ結つて、來たんでせう。

電車の中で、可厭な婆さんに髪を壞されたわね櫛・・・・・が折れました。」　とハタと落したやうに云つた。

前原は今其の前髪を抜けて辷つたのを見るやうに、ハツと思はず袂を壓さへた。車掌が拾つて渡したのを、其のまゝ受取つて此處にある。

「さいさきの可い事はないのです。むかうへ行けば屹と凄い目で見られるか、気障な事を聞かされる、

仕方がありません。私つた事をありのまゝに云ふまでゝがす、それからは先方のお考へにまかせよう、とそれは最うちやんと覺悟をしたんです。がね、尚ほ此の上に、途中で髪を洗ふのは、些と自分でも定規がはづれると思はないぢやありません。けれども、・・・・・聞いて頂戴。

電車の中で髪を壊されたとして、急にね、思出して我慢の出來ない事が起りました。圓髷を重なしにされたと云ふより、あの婆さんの手が毛に觸つたと思ふ・・・・・毛に觸つた！其の事なんです。

あの先刻の學生　の方は、一度今川橋の電車で見た婆さんに、よく肖た顔を愛宕の塔の上で見たと云ふぢやありませんか。

私はね、矢張り先刻のに、そつくりな婆さんを

ー　今夜これから行く兩國の、・・・・・家は違ひますが、柳光亭で、川開きの花火の中で、・・・・・それは、變な、不思議な事をするのを見ました。」

夫人は御手洗の石に兩を掛けて、うつむけに水を覗くやうにして居る。低聲ながら其れが珊々として流るゝ音の如く向合つた畫工の胸に響いて、而して却つて、深き淵に臨むが如く聞取られた。

「忘れもしません。箱根ではじめて、貴方にお目に掛つた、あの、夏　ーー」

こゝで、はじめて逢つたと云ふ、當時の事を一寸言ひたい。

## 四

「失禮ですが」

一人の青年が、腰掛けて居た谿河の磧の石から衝と立つて、其處の丸木橋を半ば渡つた、二十ばかりの世にも氣高い婦に聲を掛けた。

場所は箱根の堂ケ島の、あの大石小石に常夏の花が咲き、巖には青芒の生えた中を、眞青な龍の走るが如き流に臨む・・・・・明星ケ嶽の眉に迫る處である。

此の青年が畫工前原辰馬であつた。

現在から數へて、まだ然までには年を經ぬ、一夏、或學校の卒業試驗の休暇を此處に遊んで、底倉に宿つた時の事であつた。

七月盂蘭盆過ぎた頃で、湯治場には、そんなに客が込まぬ。心静に朝寝をしたので、順に後れて、三時過ぎに成つた午飯の時、麥酒を抜かしたのに獨り

で醉つて、備付の机の上に、汽車の時間表や財布などゝ一所に置いた、持馴れた扇子を、山氣の爽さに、使ふともなしに手弄りながら、高縁に足をぷら下げて、何の氣遣もない白い雲を見て居たのが、其のまゝ、庭下駄を突掛けて、金魚が藍の化粧をする、紫陽花が時を盛の、池の周圍を巡りつゝ、其のまゝ、ふら／＼と門の青葉を山路へ出て、殊さらに志すともなく宮の下を通つて、奈良屋の裏から崖の石疊を、大水車、五段の瀧。其處で、堂ケ島へ下りて、然うして丸木橋の袂に憩つた。

畫工が此の體を後で考へると、何うやら目に見えない、何ものかに誘はれ出たとも言へる。帽子も被らないで、且つ　ー　そんな覺えのない　ー　煙草を忘れて出た。財布も持たなかつた。が、試みに宮の下の小店で掛合ふと、貸浴衣に蔦の葉を染めたのを見て、快く貸した。

敷島の煙が淡く、水の清さに、白いほどな指の尖、吸ふ其の火がぽつりと紅い。まだ茂らない芒も、葉末にほんのりと霧を吐く穂の氣勢。大な巖も、高い

峰も寂として、射かける流の白羽の箭は、緑の石に降りそゝぎ、丸木を渡した細い橋は、水の響きで揺々〳〵と動く黄昏時。

唯、其處へ渡掛けたのは、堂ケ島の温泉宿の方から、すら／＼と、裳に常夏の露を分けて、雪よりも白い素足で、石の中を辿つて來た。

あたりに湯治する麗なる人の、温泉に玉を洗つて、筧の清水に黒髪を解いたと見える、滴るばかりの洗髪。髻を一扱颯と肩に捌いたが、白地の羅が膚に透くか、膚の白さの羅に透るのを紅の夕日に染めたか、袖も裾も色は常夏の花に紛ふ。其の肩を包むばかり片手に一束、淺黄に、藍に、紫に、花を重ねた一つを十ウづゝ六七十輪、三枝、四枝、紫陽花を手に揚げて居る。

それが、裳から胸を埋めて、恰も大なる車輪の如く、紫の雲に乗つたやうに、すつと通つて、藍に翻つて、橋に乗ると、水をうけて、霧を拂つて、颯と淺く淺黄に浮いて、そして艶かに碧白く燃えた。

「失禮ですが　ーー」

發奮むばかり呼吸を續けて、

「お綺麗ですな！」

片褄を、橋ずれの撓なる花に埋んで、其處へ婦が立停つて振向いた。

衣の氣勢か、山風か、其の身動ぎに、はら／／と音のしたのは、男に拗ねた帶腰ではない、花に響いた流らしい。

顏の氣高さ、優しい事。

但、其の手にした紫陽花は、こゝに山姫が從へた一千の魔女の、媚びて笑める顏の如く、五百の羅漢の憤つて顰めたる面に肖て居る。

麓は卯の花。風祭のあたりから、背戸、垣根、今年竹の中にさへ、湯本、塔の澤、崕も、渚も、雪を散らしたやうに咲く。其の丈の高いのは、峰に降積るかと誤たるゝ。温泉の宿の窓、床の間、谷川を引く手水鉢にも折添へて、眞白な雫を漲らす。

中腹なる大平臺、宮の下、底倉のあたり、宮城野かけては、紫陽花の山である。滑かな紫の雲に、崖の茅屋の、半ば埋れて見えるさへある。瀧を包み、簾を染め、軒に掛けた燈籠は晝も浅黄の灯を點す。

臺ケ嶽、冠ケ嶽、峰は遍く緑である。そして山々〳〵が頂く中空の寶冠は白百合の花を鏤むる。

麓の雪、中の紫、峰の緑。この装は、やがて一山を往來する雲の色とも見られよう。飜り、煽り、渦巻き、鳥の羽搏くが如く巖を打つて谷間を流るゝ、早川の水の面影にも擬ふ、箱根の夏は美しい。

其の中に、堂ケ島の淺瀬に架けに丸木橋、明星ケ嶽の暮れかゝる青く白い流に臨んで、水紅色が膚を透く、羅の袖に涼傘の如き紫陽花を提げた姿は、較へむ方なく美しかつた。

「失禮ですが。」

畫工は最う一度、振向いて婦に云つた。

此は失禮でない事はない。一面の識もない婦に、唐突に聲を掛けたのである。が、たゞ夢を見るやうな心地で・・・・・

「實にお綺麗です。」

同じことを言つた。

最う言出すべきやうはない。

續きさうな二の句も無いのに、婦は一度振返つて、二度目の歎賞を聞きながら、橋の半ばを向うへ渡つて、其のまゝ岨徑に裾を消さうとはしないで、裳を此方状に返して、半身を紫陽花に、斜めに見越して更めて立停つた。

褄はづれを激する流れは、巖に躍つて・・・・・しかし其處ばかり音も立てず、花の影を揺り据ゑたやうである。

「何になさいます。」　ーー

思つても見るが可い。龍宮の松明ならば知らぬことと、玉を炊ぐものと雖も、未だ嘗て紫陽花を焚くと

言ふ驗を聞かぬ。花を提げたを　ーー　「何になさいます。」　ーー

が、不作法に、ものを言つて、聞棄てにでも、フイと去らるゝ事か、故と足を停めて、來て言繼ぐのを待たれるものを。

畫工はだらしのない事を云つて、

「何とも失禮ですが。」　と、更めて會釋した。

「蟲を拂ひます。」

と、玉を轉ばすやうな聲。谿は暗く、聲は朗に、水は白くむせび、青く歌ふ。

「蟲除になさいます？・・・・・其の花を。」

「蠅が煩いので。」

「あゝ、蠅がお煩い。」

「何よりか。」

黒髪の其の丈なす一條が、もしそよとも動かば、其處に一匹の蠅があつて、それを拂退けるためでな

ければ成るまい。・・・・・不淨を許さぬ端麗さよ。名工の手に刻まれた女神の姿は、蟲が自然に避けるか、彫像が自ら拂ふか、いづれかで無ければならぬ、と見取らるゝまで清らかであつた。

「洵に御道理と存じます。」

言を正しく、

「屹と、お嫌ひに違ひありません。ーー　私のやうな、こんなものでも、蠅は實に我慢が出來ないのです。あの何ですか・・・・・」

前原は一寸俯目に、

「・・・・・甚だ恐入つた事ですが、唯今も少々酩酊をして居ります。其の狂水のために調子を狂はして、飛んだ事をお耳にも入れました、煙草も飲みます・・・・・

此の毒が、身體に廻つて、幾分か心にも染むやうに成りましてからは、毒を以て毒を制すとか申すんでせう。そんな事はなく成りましたが、心も清く、身も潔白な小兒の時分は、蚤にも蚊にも、然うした

事は有りませんのに、蠅が集ると、集つたあとが疱瘡のやうに成りましたんです。

刀で斬らうと思ひました。天井を、障子襖を、火で焼かうと思ひました。然うでないと此方が殺されると思つたんです。

こゝに、火焔のやうに不淨を除き、白衣のやうに汚穢を拂ふ不思議な佳い物を持つて居ます。」

畫工は俯向いて手の扇子を見た。そして親骨をきり／＼と左右に開いた。兩面紺青の地に、銀粉を以て北斗の七星を描いたが、白百合の影の屈折して碧潭に落ちた趣がある。これを開いた時、酒に煙草に、恐らくは、色に欲に、自ら濁れり、汚れたりと言ふ彼が頭にも、明星ケ嶽の星が輝く。

面を上げつゝ、

「其の餘りに蠅に惱むのを見兼ねて、ーー　私が幼少の折にです。故郷の家の隣家に住んで、扇子を折るのと、そして金銀の箔を移すのを職にしました、

美しい婦人が、自分で整へてくれました、此の扇子です。

蟲も避けます。就中呪詛ふべぎ蠅は、身の邊に近づきません。

私のやうなものゝ手に有つたのをお厭ひさへなくば、貴女、お持ちなさいませんか。」

要を其方へ、端を取ると、白い流に眞蒼に影が澄む、仰ぐと二つ三つ星が白銀の光を射た。

「何うぞ。」

女性は温淑に會釋した。が、畫工が、岸を踏んで、其のまゝ飛石の如ぎ流の岩を渡らうとするのを見て、紫陽花の片隅青く、周圍淺黄に——〜核の碧の輪の中に、雪のやうな手を上げて、

「それはお危い、此方へ。」

と言ふと、もとの丸木橋を渡返す處を、逸疾く此方も進んで、流の響く眞中で行逢ふ、

其の面影は目前。姿は山の裾を、向うへ遠い。

差出す手が達くか、　と危んで腕を伸すと、扇が抜けたやうに輕く成つた。ト女性の手が要に添つたに違ひない。星が颯と流れたやうに、爾時瞳がちらついた。

足も踏留らないで、逆に水に落ちさうなので、橋に堪らず飛ぶやうに身を退いた。

「お嬉しう存じます、明日お返し申しますよ。」

と、流に身をかはすやうに、姿が向かはると思ふと、水も、谷も、蜂も、足下の石も、紫陽花の色を映した。月が白銀の如く出たのであつた。

## 五

「ーー　賓は虚言を申しました、なんとも申譯がありません。・・・・・其の扇子は私が自分で描めましたのです。唯紺青に塗潰して、北斗をうつしましたばかりですと、そんなでも有りません。裏に紫陽花が描いてあります。自分でいたづらをしました。それが如何にも不出來なだけに、お恥かしい、何とも申しやうのない次第なんです。」

夢、現、一夜を惱苦んで寝なかつた、翌日の同じ時分、畫工は、紺絣に麥藁帽でも、自分だけ謹んだ態度で、宮の下から、青葉の谷を、崖の緑の五百尺、堂ケ島へ恐々る／＼降りて、魔所か、はた神仙境、傳説のある洞穴の奥へ入るやうに、谿川へ出て見ると・・・・・背後に凭掛る椅子のやうな巖が高く、前に頃合の石がある。昨日・・・・・渠自身が居た處に、品の可い美しい婦人が居て、こぼれ咲の常夏に柔かに棲を投掛けた。芒の青い巖を、滑つた夕陽が陰つて、天然の椅子に腰掛けた端麗なる面の色は蒼白いまでに見えて、流の飛沫は、裳の小草に、玉

の夕露置添へつ。

正しく其の人、姿も風采も、しかし、昨日のを櫛巻に上げて居た。それが華奢な身と、白い頸によく肖合つて、思つた姿よりも婀娜であつた。

そして紫陽花のかはりに、やゝ白の勝つた涼傘を、背後の巌の根に立掛けたが、無雑作に置いたらしく、傾いて今にも倒れさうなのが、常夏の一本に輕く留つて居た。

時に、虹が掛つたやうに、女性の膝に、紫と緋と萌葱と緑と青と、五色に染めたものがある。ーー此が清川夫人、照樹であつた。そして、膝にしたのは、眞綿を繪具で彩つた、細長い、お手玉のやうなもので。夫人の生れ故郷では、女の兒たちが、袂に入れ、懐に持つて、細く指で引斷つては、唇でフツと吹いて遊ぶ。幼い時から夫人は此を背負上の中に藏した。今も其のすさみが留まない、で紙入も其虞に入れるのが癖なのである、と後で知れたーー

彩に目を引かるゝ、虹の錦の下に、如何に、其の七星の扇子があつたではないか。

畫工は電の如く瞳を射られた。

其の婦人は、扇の錦を取つて、唇に當て、眉を開く。あれ／＼口紅が翻々と抜けて出る、常夏が散る、花が飛ぶ、水の上を、山の腰を、萩のやうな蝶が舞ふ、翡翠の影が燦めき、紫陽花の影を刻む。

目も綾に、ちら／＼と色を交へつゝ、眞綿を齒に織る雪の手は、白魚の指をかゞつて、五色の梭を投げるのである。

此の風情を、見るともなく見ないともなく、流に臨んで、あの丸木橋の半ばなる處に、輕い洋裝して、兩手を衣兜に入れたまゝ、熟と水を視めた紳士がある。日は一面に流に當つて、涼しい光線は赫燿として、白い。パナマ帽を射た。が、痩せた頰に髯の濃い、眉の迫つた、金縁の眼鏡の煌々と輝く一人、それが博士であつた。

思切つて、畫工が衝と出た時、虹の錦の幼稚幼稚遊戯に餘念のなかつた夫人は、ものに驚いた目で、屹と見て忽ち面に色を染めた。が、嬌瞋ではない、初々しい物恥をしたのである。唯、茅花のやうに細く揃つて掌にすつと入ると、虹の錦は帶の下にハツと消えた、胡蝶が夢を覺ましたやうに

「昨日・・・・・」　とばかりで、畫工は一寸口籠つた。

夫人は袖を合せた。が、扇面の星は隱れず、燦として、手弱やかな膝に重さうである。

「昨夕は失禮を・・・・・」　と、正的に面も向けられず、手にした麥藁の遣場も覺えぬ。

眉は優しく、目には情があつた。が、それは、年紀の若いものゝ氣が違つたのを隣むやうに見えて、夫人はまだものも言言はぬ。

「薄暗がりで、お見忘れと承知します、私は其の扇を差上げました心得違な男なんです。」

熟と視た夫人の目が、其の扇面に注いだので、あゝ、漸く狂人でないのを認められた、と吻とすると一所に、橋に立つたまゝ、歩行寄りもしないで居た、紳士の目金が、其の星を射て輝くのに心付いた。

「昨夕の事を考へますと全然夢です。が、現のやうに、一晩苦み抜きました。唯一夜ですが、幾日、何月、悩んだか知れない氣がしますんです。

私は、此の炎天を、山中轉がつて歩行いたんです。一刻も早く、其の扇を返して頂きたい。然うしないと、箱根の山のあらむ限り、蛇の蛻のやうな、虚偽の罪が消えません。

私は、あの後で、眞蒼な月の出に、目が明るくなつて心付きました時には、貴女を、たゝ人とは思はなく成つたんです。・・・・今日こそ恁うして不思議にお目に掛れますけれども、昨夕の處ちや、空か、雲へ歸つてお了ひなすつた方だらうと思ひましたものですから・・・・實は、神か、美しい魔かと思ひました。

お目に掛つた處が、此處なんですから、又此處へ來て探しました　ーー　夢の中で　ーー　幾日も幾日も、へと／＼に成つて、大地獄も駒ケ嶽も這つて歩行いたあげく、とゞの詰り此の磧へ來て倒れました。夜露が掛つて、我に返ると、一面の月の姿見に、雪の簾を捌く瀧の前に寝て居ました。紫陽花が燐火のやうに四邊を照す・・・・・それが昨日來がけに見ました、其處の白絲の瀧なんです。・・・・・夢心地にも、確こ。・・・・・

すら／＼すら／＼、恁う魂を眞綿で撫でられる瀧の面を、ふと蘇つた氣で恍惚と見て居ますと、其の水晶の簾の影へ、薄くお映んなすつたのが、其の面影ーー　貴女の姿で。

手に紫陽花の大輪のむらがるばかりなのを持つて、月に輝く瀧の中で、莞爾なさると、襟の處に、颯と扇子が見えました、密とお招きなさるやうに動いたんです。

眉が判然と成る、唇も見えます。

蠅をお拂ひなさいますのか、自分に來いと言はれるのか、其の辨別もなしに、頭も砕けよと瀧へ飛込むと、飛沫と泡で、目も口も、吹雪に捲かれて、あつと噎せながら、ずん／＼ずん／＼底も知れない穴の中へ落ちて行く、落ちて落ちて落ちて行きます。

唯、さかとんぼを打つて引掛つたのが、大な車です、あの屋根ほどな、水車です。身體が其に引搦んで、ぐる／＼ぐると廻つた時の苦しさを、お察し下さい。・・・・・

目が覺めますと身體中、浴びるばかりな汗でした。」

畫工は額の汗を拭ぎつゝ、

「其が、心の迷から、唯ひよんな了簡違ひをして、日和や風の嘘を吐きましたのなら、其の婦人が、神であらうと、魔であらうと、そんなに苦しみはしないのです。

今しがた、底倉から宮の下を通つて、此の堂ケ島

へ下りますのが、まるで罰で、生命を取られます思で、五段の上の、あの大水車の夢を其のまゝに見て、切立の崖を下ります時は、がく／＼震ふ膝を、木の根、岩角に縋つて、摺下りたほどでした。

其の星の扇子は、ーー懺悔をします　ーー　實は私が描きました。」

俯向いた畫工の瞳も、博士夫婦の四つの瞳も、一つ足りない星の數ほど、齊しく羅の膝に注がれた。

夕日の中を風が吹く。常夏は靜に、芒が靡く。・・・・・流は颯と飛沫して、夕暮の幕は、浅黄を投げた。

「ーー　私は伊勢の津の出生ですが　ーー　小兒のうち蠅に集られますと、あとが疱瘡のやうに成つたのは事實です　ーー　それを可哀相だ、と云つて、ーー　隣家に、母娘ぐらしで扇を折つた美い娘が、紺青に星の光る扇をくれましたのは、決して虚構ではありません。

扇は事實、可厭な蟲を除けました。

が、二十年も以前の事で、今思ひますほど幼少の折には其の扇を價値の有るものとは思ひません。秋は等閑に、冬は忘れなどしますうちに、家が流轉し、私が放浪します間に、何處にか、しまひ忘れて見えないやうに成りました。

年に、月に、可懷しい思が增します、母娘居ました。其の娘は　ー　綺麗な　ー　それは美しい人でした・・・・・」

稚き日、故郷の家の隣家に棲んだ若い扇折の話をして、其美しさを言つた時、畫工の目は、扇を載せた夫人の羅の膝に注いだが、其の瞳は此黄昏の谿間に蒼空の星を望むが如き現なの色を湛へた。

靜な餘り、谿川の迅き瀨に誘はれて、夫人の裳も、博士の肩も、丸木橋も、山ながら、岩ながら、さら〳〵と揺れつゝ戰ぐ。

「處女では無からう、年の少い、誰かの未亡人か、極秘密な、人の妾でゝもあらうと云つた女で。・・・・・抜けるはど色の白いのが、淺黄の半襟を深く合せて、櫛卷に結つて、月に照らされるやうに、小座敷の薄暗い裏裡で、箔を移して居たのを覺えて居ます。

春も夏も極つて同じ風俗をして居たとは決して思ひません、が、今も然うした姿が一番目に殘つて居るのです。何處のうまれなんだか、其の頃、私ども町内でも誰も知らなかつたやうで。美しい人自身は、其のうまれた家が、或年の秋、土地の洪水のために滅びたので、流れ／＼て來たのだと云つて居ました。

草双紙が大すきで。・・・・・私の母親の記念のを貸しますと、夜の間にそれを讀んぢや、翌日遊びに行くと、靜に竹の篦で金箔をあしらひながら、繪解をしてくれたものです。優しい、輕い息で、ふツと吹いて、帳の面へうつすのが、すツと黄金の波が打つやうで、それが一ツづゝ　譚の句讀に成る。

一冊、其の人が、自分で持つて居る繪本がありました。私は内のより、夫を珍らしいものに思つて、時々繰返して見ましたが、皺が寄つて、そして煤けて、ちり／＼に成つて、表紙なんか半分取れて居たやうです。洪水の時水浸しに成つたのが、それ一冊、形だけ殘つたのだと言つて居ました。小兒心にも、此の水は潮が交つた・・・・・家は何處か海に近い大川の末に有つたのではなからうかと思つたんです。小雨でも降るか、天が曇つた部屋の陰氣な時は、しつとり濡れて、手に觸りましたのですが。・・・・・

何の本だか、どんな繪が描いてあつたか、うろ覺の鞠唄の前後が消えたと同一で、有るやうで無いやうや、一向取留めては記憶して居ません。が、唯一枚、幾度も／＼其處を見る、又開けると屹度其處が開く。尤も處々、濕けたなりで附着いたまゝの枚數であつたのでせう　ーー　大な水、浪を打つ流で、兩面見透しに洋々と天を浸す・・・・・渦を卷いた處々は、物凄いくらゐだつたんです。繪であるだけに、見て居て可恐しいとは思ひません。湧いて盡きない、清水の、さら／＼と音もしさうで、涼く可懷

い心持もしますし、計り知られぬ水の力と、其の勢をも思はせたんです。

其の渺茫とした流の、遠い遙な向う岸、殆ど一筋の地平線の果かとも見える岸に、下髪で、緋の袴を穿いた上臈と云つた姿のが、唯一人立つて、荒浪の立つ川の面を、却つて仰ぐやうに熟と視ながら一方の岸を招くらしい、袿の袖に扇を翳して居ましたのです。」

ーー　夫人の細い指は、わなゝくが如く膝の其の七星の扇子に掛つた。巖に摺つても落ちさうに、―

話《はなし》を聞惚れて居たのであつたに　ーーー

「上臈の手の其の扇子には七座の星がありました。ですが、然し夫は一種の錯覺、幻影に相違ありません。上臈が翳した其の扇子の面に、星があつたと思ふのは私の氣の迷ひでせう。ーー　日にも、月にも、第一、恁うして年紀をとりましてから然う信ずるやうに成りましたんですから。でも自分だけでは

確に疑つては居ないのです。

處で、大川を隔てた向う岸に、一人緋の袴した女の立つた繪の譯は、何故か、双紙の繪解、話の上手だつた扇折の婦が語つて聞かしてくれません・・・・・知らない、と言ひます。氣味が惡いからとも言ひました。洪水に浸つたんだから皺に成つて、字が亂れて假名が讀めないんだとも言ひました。

後で考へると、緋の袴の意味は今以て解りません。けれども、其の空を浸した流の樣子が、何うも洪水を描いたものらしい。それだと同じ災害で家が滅びたと云ふ人に取つては繪解も苦痛だつたでせう。が、それを濁流だとも泥水だとも思ひません。なんとなく、繪本を穿ち、紙を透して、清い流が溢れるやうで、今でも其の繪を思出しますと、渇かない咽喉にも、其の谿河へ倒に口をつけたいほど飲みたく成ります。否、それには限りません。私は臆病で、臆病よりは卑怯で、生水は飲得ません、くだらない癖がありますが、川に限らず、清水に限らず、甚しいのは、沼、湖、あの海でさへ、繪に描いた水でさへあ

れば、見さへすれば、堪難いまで飲みたいのです。ー　續いて、月に、雪に、一本の草の花に、それが實物であるよりは、繪であるものに、却つて、あこがれもし、見惚れもするのです。

それほどまでに、深く、其の大川の繪が心に刻まれましたのも、不斷然うして幼い目に彫けられたばかりではありません。・・・・・扇折の婦が、私に、先刻からもお話申しました、星の扇をくれます時に、（・・・・・いゝものを上げませう。）　然う云つて、例の繪本の、鏡臺の上に置いてあつたのを取れ、と言ひます。

私が擴げた時に、あの流が颯と出て、其處に平骨のが挾んでありました。關くのを見ながら、其の人は、折つた扇の地紙の骨を刺す綴目に、朝顔の蕾を吹くやうに、輕く通はせて居た呼吸を留めて、俯向いて熟と視ました。

濡々〳〵とある瞳の慈愛が、草に溢れて輝くやうに、紺泥の地に煌々〳〵と星が走つて、そして、箔を扱ふの

を見馴れた目に、其の扇の富士をうつむけに、朱い唇に含んだ地紙は、蒼味を帶びて、金色に輝いて見えたのです。

ー　實は其の扇子です。」

前原は、それとなく丸木橋に彳んだまゝなる博士を見た、瞳を夫人に見返して、

「夫人、昨夜、貴女に、・・・・・欺いて差上げましたのは。

其の實の扇子でありますから、確に不浄を除けました。蟲を拂ひました。掌を打つて蠅が落ちたのです。

雖然、いま、其處に、貴女の膝にお置きに成るのは、天の寶と、押入のがらくたほど違ひます。眞赤な贋ものです。申上げました通り、當時を想餘る可懷さに、私が自分で認めました。然も裏に描いた紫陽花は、一昨日、底倉に參つてから、旅籠屋の庭のを視て寫したんです。

何とも申譯がありません、罰は自分で處置しませう。私をお憎しみに成りますまでも、罪はお返し下さいまし。・・・・・」

夫人の膝に、扇子は其時裏が翻つて、紫陽花が青く咲いた。

博士が橋を渡返した。下りると橋板が幽かに鳴つた。

會釋と一所に、其の引緊つた唇を解いて、

「まことに面白うございました・・・・・お伽話ですな。」　と、頤を暗く唇に微笑を含む、夏帽の廂の陰に痩せた凜しい面影である。

此の徽笑を、違つた意味に取つたらう、前原は颯と色を變へた。・・・・・言語に意氣組んだのと、事柄に激したのと、未見の婦人に對した世馴れない男の羞恥とで、血の上つて居た瞼の汐が衝と退いた。ーー　お伽話　ーー　噫、流の絡ふ、水の飛ぶ、谿川の大巖小巖は、一ツづゝ聞いて點頭くであらう、

と信じたのに　ーー

「家内は、然う云ふ事が大すきなんです。いや、難有う。」

一揖するのに、思はず禮を返しながら、畫工は俯向いたばかりで拳を握つた。彼は恥ぢ、且つ慣つたのであつた。

「お前さん、それをお返し申さないか。」

夫人に言つて、靴をずらして、

「貴下、扇子は此處で今しがた拾うたのですよ。」

「えゝ。」

膝の扇子をきり／／と緊める、と其の音もして、描ける星がちら／／と、水の流が颯と響く。

夫人が手にして、すらりと立つた。

「お詫は私どもで申さなければ成りません。ーー人様のものをお斷りもいたさないで、餘り綺麗だ

ものですから、つい拾つて持ちました。・・・・・・御免なさいまし、此はお返し申します。・・・・・・其のかはり同じ繪を別の扇子にお認めなすつて、それを私に下さいまし・・・・・・おだましなさいましたお報いです。」

いづれを其とも辨へず・・・・・前原は手を差伸した時、恰も流を隔てた向う岸の、一人不可思議な姫の手から、あらためて、こゝに授けらるゝ心地して、わかものながら、及腰に、半ば跪く状して受けた。

ーー　清川一家、夫妻の人たちと、前原との間は、恁うして此の時結ばつたのである。

ーー　夫人の低聲で云ふのを聞きつゝ、博士は、何か快く頷いたが、あらためて前原に言つた。

「御伴侶は多勢でおいでなさいますか。」

「否、私一人です。」

「御徒然でせう。お遊びにおいで下さい。家内も

是非お迎へ申したいと言ひます。」

「奈良屋に居ます。・・・・・すぐお立寄り下さいませんか。」

それから更めて知己に成つた。あとで、前原は故郷の其の扇折には一人の年老いた母親のあつた事ー　其の媼は七十の上らしかつたが、矍鑠として壮健で、好んで山遊びをした。・・・・・近い山、遠い峰、五里や三里は日の内に往還りして、冬籠こそするけれど、秋は固より、夏も、春も、種々な茸の類を、籠に充て、苞に提げて歸る・・・・・

茸を選み、名を分けて、いつも界隈へ配つて、それを娯樂にして居たが、斑猫と砒石と丶もに世にも可恐いものに數へる、紅い菌、紫の茸、いづれ素性の知れないのも、一度其の姥の手に掛つたものは、未だ嘗て怪我にも人を過たなかつたので、名のない菌は總じて姥茸と云つた事。・・・・・

其の茸狩の山求獵に、谷を深く岩を分けると、森が包んで、草の綺麗な、緑に澄んだ大沼の岸で、甲

の紅い蟹と、山姫、山神の狗子と稱へる鼻の黄色な獣と、追ひつ追はれつ、眼を聳て、鋏を擧げ、脚を敲き、背を返して、兩個の間に爭つた、・・・・・其處に落ちて居た扇子である。姥が捨つて歸つた、と扇折の語つた事　ーー　まだ、其の媼が卜筮を見、禁厭をし、施の藥を煉つたので、近隣では由緒ある巫女であらうと云つた事。自分も一度、其の手段は忘れたけれども、惱みに堪へないむし齒の疼痛を、扇折の膝に居て、媼が呪つて、そして立處に驗のあつた事。

却説、其の家は、自火とも云へば、或色狂人の放火だとも傳へる、濃い陽炎に包まれた朧の中に、一軒燒して、山も燃えつゝ春の半、霞のやうに雨に消えて、それから行方の知れない事・・・・・

前原は自分の家から、居ながらにして、能く其の隣家の居間の見えた二階の窓の、小縁先、そこには幼遊びに取散らかした繪具皿の中に頬杖をついて、茫乎燒あとを見ると、其處に茅花が咲いてからも、小暗い窓の細い廂の裏に、青い襟して、白い顔に、颯と黄金の箔が映つたり、地紙を口に合んだりする

幻が消えないで、小兒は瞰下すのでありながら、却つて空高く天守の物見に、奇き嬪蛾を打仰ぐが如く思つた・・・・・

（これを奈良屋で話した。尤も機會を得て、工學博士の夫人にのみ物語つたのであるのは言ふまでもない。）

博士か聞かばお伽話。前原には事實であつた。

畫工は、星の扇の幼い記憶を、御伽話と言はるゝにのみ、不快を感じたが、學識と、人格と、風采と、工學博士に敬意を拂つた。

特に落ちて居たのを拾つた、と云つて、虚偽の罪を許した雅撞に服した。

尤も夫人も、扇子は拾つた事にして、恥を知つた畫工の懸念を消した。當座はしかし、日を經ては、前原も其のいづれかに且つ惑ひ且つ疑るやうに成つたのである。

箱根で、強ひて夫人に同じ扇を、新しく調ぜしめられたのは、前原が謝儀を得た自家勞作の最初のものであつたと言つても可からう　ー　然も格外な紅白の水引で。

御贔屓は引續いた　ー　玉章は花の雲、月の中空を、いつも遙に、しかし繁く通つて居た。

が、爰に此の編を見給ふ方々〳〵　ー　前原も亦思つても見たが可い。恁うして結びつけられた夫人との間を、博士は知らず。其の周圍、一家、親類縁邊は何と見よう？　五彩につなぐ繪の具の絲も、世間の目には、怪しき蜘蛛の巣でなければ成らない。

さればこそ、夫人のためには恰も世に處して舅の如き夫の先輩たる老醫學博士松澤の玄關先、煉瓦塀の宵闇に、不用意ながらも額を破らるゝやうな事が起つたのである。ー

清川博士が京都の某大學を辭して、今度九州の大

なる炭礦を司配する事に成つたゝめに、諸般の用事と支度を兼ねて上京した。が、其の着京の日と時は、豫め夫人から前原に音信して通知があつた。着京乘第、其の日に訪ねようと言添へた上、あらためて汽車にのる時電報して、それには道も順なれば、前へ老博士の許に寄る、出迎も多し、内で待つやう、と注意をして來た。

三年越に相見るのである。前原は貴夫人に對する禮と、美しさに向ふ憧憬と、星を望む可懷さとを以て、席を拂つて褥を直して待つた。

時は來て、時は過ぎた。日が暮れて、程經つて、夫人の到着は遲過ぎる・・・・・・

赤坂新町の借家の門に立つて、町の燈を夢のやうに視めて待つた前原は、其のまゝ帽子も被らないで、腕組をしたなり通りへ出たが、あれから溜池の橋を渡つて、紀尾井坂の櫻を縫ふ・・・・・・夜ながら、暗ながら蝶の翼は輕かつたのである。

其處に松澤博士の邸がある。霞をかけた窓明を、高樓の青白い硝子窓に望んだ時、前原は地紙を含んだ星の扇のおくりぬしを、目前想起したに相違あるまい。

夫人はこゝに道寄した・・・・・陰に待つものゝ果敢なさは、さてさもあるべき事ではないのに、雲にかけた通路、浮橋を渡る人は、魔の塔の如き此の館に抑留されて、一室に閉籠められでもして居るやうに、心も現で、うか／＼と石の門を入つて、植込の暗い處を律徊つた。

「汝、盗賊！」　と喚くや否や、見上ぐるやうな玄關番が、突然前原の胸倉をぐいと取つて、手許へ一つ引いて、ドンと突いた。

「何。」　と振向き立直らうとした。が、思返して、蹌踉けながら退く途端、足が浮いて、も門柱に額を打つた。

夢から覺めたやうに家に歸つて、魂が血だらけに

成(な)つたらう、と思(おも)ふ前原(まへばら)は、唯(たゞ)其(そ)の額(ひたひ)に疵(きず)ついたばかりであつた。

其(そ)の三日目(かめ)の夜(よ)なのである。

五十稲荷(いなり)の御手洗(みたらし)の音(おと)。・・・・・

## 六

五十稲荷の御手洗の音。

「ーー　忘れもしません、箱根ではじめて、貴方にお目にかゝりました、あの夏ーー

・・・・・知つて在らつしやる通り、一夏＞東京で暑中休暇をしたでせう。主人は黒澤尻の老母の許へ歸省をしたんですが、私は御免を蒙つて、紀尾井町に居ましたわね。箱根から歸つてから、貴方とは餘計御懇意にして頂いたけれど、何しろ、あの松澤さんの家に居るんですから、然うく我儘ばかりは出來ませんかつたのね。

九月のはじめでしたつけか、主人も歸つて、最う京都へ引揚げようと云ふおなごりに、松澤さんの催で、川開きの見物がありました。

爾時が柳光亭です。曇つた日でしてね。陽氣はづれに薄寒かつたわ。・・・・・車で九段を下りる時なんか、村雨のやうなのが颯とかゝつて、母衣を下

して小さく成つたの。

でも花火は賑よ。お茶屋全體、まるで演劇の賣切てツた混雜なんです。私たちは小人數だし、奥庭の張出しに居たんです。

仕掛も狼煙も澤山見ました。

何ですかね、あの大川の向う岸に繋いだ、からくりの大きな船が一面に花火に成つて、牡丹も藤も一齊に咲いて燃えると、其の美しい火の中で、眞白な振袖を着た女が扇を開いて踊りました。ーー　眞暗な晩なんですよ。灯で晝間のやうでしたが。

可ござんすか。

何心なく背後を見ますとね、總二階から廻り縁、下座敷、張出を掛けて、唯處々、漸と緋の毛氈のちら／＼見えるほどの人なんでせう、・・・・・それこそ美しい人たちで、牡丹、芍藥、百合も、菊も、一面に咲いた小山を其處へ築いたやうです。

其のね、二階と下座數と重り合つて、廂へも張出を拵へたか、と思ふ人の波汲の、眞中頃へ、ぶくりと浮出した人魚のやうな、白髪の婆さんが一人。

それがね、いま花火が燃盛る向うの船を恁う、少し伸上つて、仰向加減に熟と視て居るやうてしたつけ、・・・・・咽喉の下、襟の處へ兩掌を合せて、あの、三日月様を拝むやうな手つきをして、トン／＼と合せると、上下前後、右と左とに犇々と詰合つた。何千とも知れない人が、殘らず、同じ形に手を合せました。白い鳥が群がつたやうでした。

仕掛花火に、喝采をしたのでせうけれど、それが不思議に綿を敲くやうで、一つも音が聞えませんでした。・・・・・

哄と云ふ聲に紛れたんでせうか知ら。

まだ變なのは、續いて、直ぐに其の婆さんが、首を心持右にすると、衆が揃つて顔を右に傾ける。左にすると、矢張揃つて左に傾ける、ニヤリとすると、

波を打つやうに不殘一時に莞爾したの　ーー　變でせう。

そしてね、誰一人、其の婆さんの顔も形も氣を付けて見たものはないのです。

私一人、振向いて見て居たのを、向うで心付いて、ニヤリと其の笑つた顔・・・・・熟と私を瞰下しました。

私は悚然―総毛立＞そうけだ≫つたの。そして何を着て、何をしめて居たんですか、單衣が肩から蒼く成つて、丸帶が眞黒に成つて、椅子を離れて卓子に片手を支いて立つたなりで、白足袋の爪尖まで、じろりと視られたやうな氣がしたんです。

手で縋らうと思ふ主人も、紀尾井町も、其奥さんも、皆、見物の人と寸分違はない同じ形をして居ます。

・・・・・然う思つた時、花火は消えました。埒に

飾つた提灯も、一つ川風にふつと消えたんです。

其つ切、何處へ紛れたか、大勢の陰に成つて、其の婆さんは、影も形も見えなく成つて了ひましたんですがね。

當座ばかり。別に氣にも留めないで居たものですから、誰にも、ーー　前原さん、貴方にも今夜此處でお話しするのがはじめてゞすわね。

それよ、それなのよ！」

「えゝ。」

「まさかと思ふんですけれど、先刻、電車の中で私の髪を引掴んだ老婆ですがね、考へれば考へるほど其の時の婆さんに肖似なんです。もうね。」

夫人は背を扱いて、散る花辨に肩を揺つた。

「居ても立つても居られない、髪が粘りでもするやうで我慢が出來ませんから思切つて洗ひますわ。」

前原は匕首を抜いたやうに、手を堅くしつゝ、止むことを得ず柄杓を取つた。

「ですが、貴女・・・・・」

颯と捌いて、

「まるで絲です、操りの。此の髪の毛の數ぐらゐ方々で勝手につかまへて引いたり廻したりするんだもの。可厭ね、面倒くさい。泳がうと思へば泳いだつて可さゝうなものを、氣味が惡いからつて髪を洗ふのさへまゝに成らないぢやありませんか。

操られないぢや身動きも出來ない、人形も同一ことね。」

と言ふ、・・・・・衣紋を抜いた頸が白い。

「此の首が、すぼんと抜けたら何うでせう。」

「奥さん。」

「手水鉢の中で仰何けに成つて、もう一度、・・・・・前原さん、貴方の顔を見るか知ら。」

「奥さん。」

「それとも、俯向けに落ちたツ切で、主人の前に恐入つて了ふのでせうか。」

「そんなことを、貴方、串戯にも云ふもんぢやありません。」

「否、恁うした處を柄杓で打つて御覽なさい、覺悟をして居るから、さあ。」

と横顔に髪を分けて、眉うつくしく額をあげたが、花明に匂こぼるゝ。

「お待ちなさいよ、然うする前に、奥庭の、其の櫻の樹に結へられて、一折檻される處ね。不義は・・・・・何とか云つて、お腰元が。

さしづめ、今夜の此の樣子だと、私が責殺される役なんです。

をかしいねえ・・・・・殿樣や御家老の彈正は、一端女を成敗して、泣かせ、悶えさせ、苦ませたつもりで居たものなんでせうけれど、櫻に結へられたお部屋樣や、島田の方は、突付けられた白刃の尺で、

御前の鼻の下の寸法を計つて、斬られる胸に、くす／＼と嘸笑つたでせう。

だつて可笑しいんですもの。お殿様の心根が、馬鹿々々しいんですもの、可哀なくらゐですもの。此にお附添申して、割竹を持つた御老女なんぞは、ぼうふら同然ね。不義したお腰元や、御寵愛に較べると　ーー

でも、世間ぢや、演劇を見ても、殺す殿様に噴飲さないで、殺されるお腰元に泣くんですもの。女は弱いものにされるから口惜いわね。」

思ひも掛けず調子が曇つた。

此の易からぬ言の裡には、兜の下のきり／＼すで、途中で黒髪を洗つて行く、宴席に於ける夫人の胸の尋常ならぬ苦痛か籠つて聞えた。

あはれ、それとても、為べき方なき黒髪の亂である。

前原は胸をせめて歎息した。

「あゝ、實際、或時は、貴女を人間とは思ひませんでした。否、人間以上だと思つたのです。ーー扇子を返して頂いた時は、事實　私は貴女の前に跪きました。其の貴女を、雲の上から、少くとも箱根から下界へ引下して了ひました。こゝに水があります。・・・・・見るにつけても、神々〳〵しくつておいでなすつた、早川の青い流に紫の花の影が思はれて成りません。私ゆゑです。照樹さん、尤も、御手洗の水は清い。或は汚を拭ふのには谷川に増るかも知れませんが、御婦人が衣紋を亂して、髪を洗ふべき場所ではありません。

御身分として、貴女は高樓の瑪瑙の盥に、勝手に温泉を引いて、入浴をなさる事もお出來に成るんですのに・・・・・もしか、私の血でよいものなら、腕を裂いて、髪を濯いで差上げたい。」

「まあ、嬉しい、貴方の血だと思つて可いの？」

「・・・・・」

「勿體ない、せめておときなすつた繪具の紅だと思ひませう。それで十分。さあ、思切つて浴びせて

下さい　ーー　おゝ涼しい。あゝ冷い。骨も冷えます、斬られるやうです　ーー　前原さん。お腰元は本望よ。」

すらりと扱いて、振仰いだ、小袖に雫させまじとて、前原は逸はやく亂れかゝる髪を肩に隔てゝ、衝と身で庇つて、絣の其の羽織の袖を、夫人の肩に敷いたのである。

二人は、それから裏町を縫つて錦町の通へ出て、青年會館を斜違に見るあたりで、通掛りの車を呼んだ。帳場のではなかつたけれども、夫人が熱を病んだあとのやうに太く痩勞れて、手を放して一人にしたら、街樹の柳の靡くのにも堪へさうには見えなかつたからである。

車は、楫を揃へて來たのではなかつた。

「最う一臺。」

「おう、兩國だ。」

車夫は向側をちら／＼行く夥間の提灯に合圖して引寄せた。

「松岸だ、知つてるだらうか。」
と、前原が先を云つたのを引取つて、
「松岸だぜ。」
「へい。・・・・・お召しなすつて。」
「一所だがね、揃つて先方へ着けるんぢやないよ。御婦人のだけ玄關へずつとお着け。私の方は半町ばかり手前で下ろして貰ひたいんだ。可いかい。・・・・・・二臺分拂つた。些とだが祝儀も一所だ。さあ、照樹さん　ーー」

前原の背後に隱れる狀して行んだのが、乘る時、蹌踉めいたやうに泥除に密と手を縋つた。

濡れて雫するやうな櫛卷の艶を、兩方から車夫はじろりと見た。

「行んねえ。」
「あいよ。」
御藏橋の際だつた。前原が乘つて先へ立つたのが、がたりと留まつて、
「待つとくんねえ、旦那・・・・・・濟みません。」

フト提灯の灯が消えたのである。

一所に留まつた背後の車を振返つて、十日も逢はなかつたやうに可懷く夫人を見ると、透母衣の裡に高く浮いて・何故か小袖青く、帶が黒く、藤紫の襟も淺黄に、顔が幻のやうに白い。

それが名殘に成つた歟。

照樹が其の裝で大廣間に立顯れた、其處には老博士夫妻夫妻と、他の二三の知己と、緣邊と、奥州黒澤尻の産にして、白髪の切髪、小紋の紋服、被布の裏が赤いとある、姑が控へた宴席の光景は、讀者の想像にまかせよう。

手取早く言へば、其の場から、夫人の行方が知れなく成つた。

前原は、尤も松岸の　ーー　それは路地の中にあつた　ーー　角に立つて・・・・・思切つた姿で、

衝と横手の玄關へ入つた夫人の後姿を見たのである。が、立去りあへず・・・・・春の夜の大川端をふら〳〵と、

「あゝ彼處だ。」

と思ふ、何故か、夫人が怪い媼に見られたと云ふ、果敢なく消えさうな、青い衣、黒い帶、卓子に片手を支いて、十萬人の中に一人際立つた姿を、歴々と目に浮べた。

熟と大川の水を見て・・・・・都鳥の羽が煽ぐやうな流を傳ふ船の灯に對して、引人れられさうに彳むと、フト我知らず、をかしく掌を合せた。

「何處かに、婆が居る　・・・・・」

ぎよツとした。が、松岸の甍は黒い。何にも無い。

「座敷には姑が居る・・・・・」

手を拂はうとして心付く、と指にすら〳〵とかゝつた美い色がある。淺黄、紫、紅も交つて　ーー細い、薄い、何の鳥か綺麗な羽毛、と見えたのは、優しい夫人が、先刻車を雇つた時、前原の世帶を察

して、背負上げの中を抜いて渡した其の紙入に植わつて居たらう、留楠木の香もして・・・・・人肌の懷しさ、幼きすさみを今もする、五色の眞綿の霞であつた。

潮は朧にさして一來《く>る。

ーー　其の夜から夫人は行方が知れなく成つた。ーー

## 七

「入らつしやい。」

七草を左右に植ゑた、冠木門の門口、左右へ二人、膝へ組手で、腰を屈めて出迎へる。

「入らつしやいまし。」

隅田へ淡く、土手へ一刷、颯と小雨が掛つて居た。

此家の桔梗の薄紫と、女郎花の濃い黄を濡らして、苧緒を亂した雨の絲は、花に濯ぐとゝもに色を染めて、雫は元の露と散る。羅の友染の襲衣に似た、ーー茶屋、伊豆千の萩薄。

其處へ引着けて轅を留めた、俥の蔽を車夫が外すと、透母衣から、清しい目で、立迎へた女中たちをひらりと見たのは藝者でない。

が、婀娜な下町の娘風俗。薄紺と淺いお納戸の、縞お召に、朱鷺色絽縮緬の長襦袢、緋の肌着の襟を

絲より細く、薄藤色に小菊の半襟。群青の地に友絲でいちまつを織つたのと、銀と淺葱に紅入にて、歌と景色を須磨明石、七夕染とも言ひさうな色紙短冊、袱紗帶を、お太鼓にきりゝとして、起居に姿の舞ふやうな、薄手の乳の下すつきりと、緋鹿子の背負上は闇暗にも燃えて目に艶な、白魚の簪の如き、少い女の血潮の影・・・・・

瞼も颯と照映えて、墨を流した雨空ながら、晴々〳〵とした薄化粧、生際のいゝ細面で、眦の切れた、凜々しい眉。一寸うけ口の口許に、年紀ごろなれば得も言はれず、十八九の愛々〳〵しいのが、前髪の幅を取らず、髱長に鬢を詰めて、大輪の膨りとした銀杏返で、なよやかな姿の靡く、腰にも堪へじ、と重げに見えたは、さくりと揃へた、根掛の眞珠。月草の露に白金を鏤めた花簪を左插に深くさした。

襟脚をくつきりと、やゝ屈む胸に、俥の上から

ーー　一度覗くやうに女中を見て　ーー　見上げる顔と、上と下、眉を重ねるやうにしたが、薄色の涼傘の柄に、迷子札に彩色をしたやうな初々〳〵しい信

玄袋を、紐短に持添へたまゝ、雲を捌いて、辷つた風情、鮮麗に、すつと出る。

唯、薄絹一重煙るが如き、雨の刈萱を兩方へ、女中たちは袂を分けつゝ、

「此方へ。」

「此方へ、何うぞ。」

一人、身を挺いて先に立つて、

「お連様は？」

「無いの。」

「お一人。」

「一人よ。」

「はあ。」

一寸立淀む、廂續きに敷石の水の上。

「萩の室へ御案内。」　と、母屋の入口、供待の傍なる帳場に控へた、小さな圓髷、赭ら顔の女房が、見透かして首を振つて、而して恭々しく頭を下げる。

「さ、何うぞ、貴女。」
カタ／＼カタと導いた、女中の庭下駄の音さへ、砧を打つかと床しいまで、娘が運、ぶ褄先は、夕顔の白さを露に宿す。

これに對して、迎ふる如く、取開かれた窓の色は、緑を透す芙蓉の花。

離座敷へ案内する。
女中が先へ、麻の葉絞の蒲團を直して、支膝で慇懃に、
「貴女、何うぞ。」

娘は濡色の美しい沓脱に細い裳。唯、女中を見て、莞爾しながら肩の撓ふ兩手を涼傘の象牙の柄に掛けて、指で彈いて掌で丁と壓すと、はずみに廻つて獨樂の如く、雪をまいて、くる／＼くる。
「巧いでせう。ほゝゝ。」
女中が、
「まあ！」
女房が帳場から、

「あゝ、お供さんかい。」
「へい。」
「御苦労様。」

初秋の薄が戰ぐ、桔梗の露は涼しいが、まだ九月のはじめである。娘を曳いて來た車夫は、一汗入れた兩の肩、ばさ／＼、と半被の襟を合せながら、絞つた手拭を鷲掴みで、

「へい。」　と云つて、首を伸して頤をしやくる、渾名を、張子の猪とでも言ひさうな風體ながら、半被の紋の桔梗を染めてあるかと見える、折からの萩の雨。

此の伊豆千の女房は、世辭ものにて、

「まあ、まあ、よくねえお前さん、お供をして下すつたよ。土手は曳幸いでせう、些とでもおしめりがあると道が臺なしに成りますからねえ。」

「へい、何、未だそんなでもございませんよ。」

「と、云ふうちにもね、何だとさ。」

居合せた一人の女中を、言の綾に裏打で、

「此のね、お前、下町兒の若衆には、大橋が御難だとさ。吾妻橋には限らないがね。あれだけの長町場に成ると、その山の手ぢや九段さね、小石川の何とか云つたつけ、傳通院の前の坂ね、それを上るよりか骨が折れるんだとさ。」

「然やうでございますかねえ。」

と中腰で、其の女中は、氣のない相槌。

「然やうでございますかつてお前、御主人が御主人でおいでなさるから、第一若衆の氣骨の折れること。此が又一通りの事ぢやないやね。そりや最う乘せ申しちや、花を一枝、眞綿を一把、それよりお輕いだらうけれど・・・・・其の代り風はおろか、うつかりした露にもおあて申すまいだから、大體の苦勞ぢやないやね、ねえ、お前さん。」　と笑つて見せる、上唇が顔より赤い。

車夫は、變徹も無い空笑ひ。

「えツへゝゝゝ、えゝ、まあ、然う云つたやうな勘足で・・・・・えツへゝゝゝ。」

314

「しかしお仕合せだ。御奉公をなさるなり、又お出入をなさるなり、あんな御容色よしの御供をして。まあ何と云ふ御容子だらう。あの、七草の雨を簾に掛けた透母衣の間から、お美しいのが、ちらりと見えて、外した雨蔽を鬱陶しさうに、一寸屈んでお覗きなすつた横顔に、お髪の艶のよさつたら・・・・・土手の花道を七三あたりで、駕籠から田之助が出たやうだよ。あゝ。」

と女中を見返りながら、

「お前の年紀ぢや知るまいがね。大した太夫だつたよ、ね。お顔だちが肖て居なさる。すつきりとして、意氣で、婀娜つぼくて　ーー　そして御人柄な處を御覽な。藝妓衆と違つて又、下町の堅氣の大店のお孃さんは、何とも言へないねえ。丁ど其の田之助のお七ッた風だよ、八百屋はそんな大店と云ふんぢやないけれどもさ　ーー　此の若い衆さんは、さしづめ吉三と云ふ役廻だ。蓑を着て忍んで來るかは

りに、黒鴨でお供つてんだ。又威勢が可いねえ。粋ぢやないか、先の音羽屋ツて處なんだもの。」

「お上さん。」

と鼻の下を擦つたが、四十を越した髯むじやら、誂へたやうな〓鼠。但しぎろツとした目のきよとつく工合は、一癖ありさうに見える奴、擽つたさうな顔色で、・・・・・其手でぼんのくぼを、ぐい、壓へて、

「お上さん　ーー　」

「あいよ。」

「串ーー　串戯ぢやありませんや、串戯ぢや・・・・・」

盆を片手に中腰で控へた其の女中、思はず袖を口へ、笑を忍ぶ、と音羽屋の吉三はぎよろりと視て可厭な面。

女房、世辭は世辭で、家業は大切なり、書きかけた勘定を帳面に合せて、瞳の働き蟲の如く、

「金目だねえ。絽も繻子入とかつて當世な、お召から御帶、お頭のもの、然う云つちや失禮だが、ど

んなに内端にお見上げ申しても、雑と四五百兩。ほんの銘仙に前垂がけで、横町の縁日へお出掛けなすつたと云ふ、無雑作に、惜氣のない、些とも物欲しさうでない處が身上さ、餘程、歴乎とした御内證だよ。道理こそお供までが。ーー　あゝ、樂な御奉公だと見えて、骨組が尋常で、力業をしなさるやうにやお見えでない。日にも燒けずさ、色が白いやね。」

と、算盤をばち／＼ばち。車夫は目玉をばち／＼。

何を隱さう、此の車夫、名さへ鐵五郎、と云ふ房州和田の船頭上り、銅にふすべを掛けたペンキ塗、荒繩で半鐘を縛つた如き風體怪怪しげにして巖乘な漢であるから、世辭も此に於てか奇拔を極め、法螺の貝を見て義經と云ふに齊しい。

剩へ左の瞼に痣がある。痣鐵、苦切つた面色で。

「色の白いなあ、お上さん、世間の鹽が利いてゐるんで、細骨な處は目刺さね、此方あ樂な御奉公に違えありませんが、巣ぢやあ嚊あが腹を干して、口を開いて、小兒や泡を噴いてのめつてまさ・・・・・・へい。もし、お上さん、御會計の次手に唯今のおと

もを頂きたうございますがね、・・・・・お取次を願ひてえんで、へい。」

「おともツて、お代ですか。」　と女中が代つて口を出した。

肝心の〆高、上様とやる處、此の時女房無言なり。

「えゝ、それともお歸りを待ちますんで？」

「おや！」

と言ふ、片手で勘定書を盆へ飜然、一つ、指の尖で丁と壓すのが、迷子に成らない禁呪。お次手で、と云ふんだよ、可いかいで女中を立たせて、其の口で、

「若衆さん、お前さん、お帳場の・・・・・何かい、お嬢様のお内からぢやないのかい。」

痣鐵はむづ痒さうに、膝へ手拭を横撫でして、

「否、何、彼方あ、拾乘をなすつたんで。私は途中からお供をしたばかりなんでさ。」

女房は落すが如く算盤をカタリ、帳場に立掛けた。

が、凡そ怪しからないと云つた、叱言のやうな口吻で、

「おや拾乗を　ーー　まあ、へい　ーー　そして何處からなんだい。」

「仲店の前からでしてね。彼方様ぢや、仁王門の方から出て來なすつて、前途は百花園と云ふんでしたつけ。」

「あゝ、丁度見頃だからねえ。」

「大橋を越しますとね、間もなく降出して一寸―は留みさうもなく成つたもんですから、休みながら何處か支度をする處をツて、へい、・・・・・別に其の、御當家とおつしやつた譯ぢやねえんですが、豫て、えゝ、其の御評判なお家なんで、私が了簡でね、へい、實は、其お供をしたんで、却て御迷惑かも知れません。・・・・・娘ツ子のお客一人ぢやあ、ねえ、何しろ、對手が骨細の色白で、吉三と云ふ車夫だから納りませんや。」

女房敢て答へず、こぼ／＼と續けて咳をする・・・・・風邪氣と見えて咽喉に手巾で濕布をして居た。

萩の室から、カタ／＼と先刻の女中が、庭下駄で帳場へ來て、

「あゝ若衆さん。」

「今日ア。」

「お支度が出ます。そして、一杯飲つてお待ちなさいつて、お嬢さんが。」

「や！」　と鉛の溶けた顔、何うだ痣鐵、大當り。

「お上さん、萩の室は？・・・・・」

帳場へ來て、訊ねたのは別の廣間を廊下づたひに、膳が出た後と見える、茶道具と、汗拭の絞手拭を下げて　ーー　歸つて來た、此の場面には新顔ながら、お繼と云つて女中頭。

「萩の室は・・・・・」

と、女房は鸚鵡返しで、

「・・・・・大したもんぢやないかねえ。」

「誰ですえ。」

「だれ、誰だなんて失禮な。蔭でもお前、そんな口を利くもんぢやありません、誰方とお云ひな。・・・・・誰方様と。」

「あら。　（と一寸手を上げつゝ）　お客様の事ぢやないんですよ、行つて居ますのはさ。」

「そりや、お仲さね。」

「あゝ、お仲さん、驚いて居たでせう、今通りがかりに私、向廊下から庭越しに見たんですが。お一人切ね。何うしてお一人でなんぞ來らしつたんでせう、・・・・・驚いたでせう。・・・・・嘸ぞ。」

「お仲はね、お前。あの、お孃さんは、涼傘を掌で支いて、恁う、柄をくる／＼とお廻しなさる、それがお上手だつて、お前、わざ／＼其處の雨落の許へ一本持出して、忙しい中で、くるり／＼と廻すんだよ。こんなぢやない、もツとお上手だ、それは巧い、何うして私に出來ないんだらうつて、赤く成つて息精強つてさ、それには些とばかし私の方が驚いたがね。別に何だよ、其他に、何もお前吃驚するやうな事も無いぢやないか、ーー　あゝ、見えて、潮時に成つて又、お連が見えないとも限らずさ。いく

ら、お美しいツたツてお服装が可いたつて、そりや憚りながら伊豆千だよ、殿様方、旦那なり、隨分歴乎とした藝妓衆なり。へむ、餘り馬鹿にして貰ひますまいよ。」

と軒の雨脚は眞直なのに、女房は大につむじを曲げる。

「あれ・聞違へてお上さん、そんな次第ぢやありません。そして、御酒が出て居るやうぢやありませんか。お仲さんの酌いでる手つきが、サイダやシトロンではないやうでした。」

「あゝ、御酒は出たのさ、御酒が出たつて、そりやお客だもの、新姐だつて飲まないとは・・・・・」

「あら、あんな暢氣なことを云つて、お上さん、其處どころぢやありません。」

「え。」

「珍事重要てツた次第なんですよ。はてなあ、お仲さん知らなかつたつけか知ら。」　と半ば獨言で考へる。

女房は乗出す・・・・・
「ぢや、お前は知つて居るのかい。」
「えゝ、ですから吃驚したんです。」
「吃驚？・・・・・はあ、道理で私も妙だとは思つたよ。」
聲を潜めて、
「ぢや、何かい、ふたなりかい。」
「・・・・・」　默然で目を〓る。

「辨天小僧。」
「・・・・・・・・・・・」
「萬引かい。
それとも、何かい、あの、近頭流行る不良少女とやら云ふのかい？」
「あゝ、分りました。」　と取つても付かず、唐突にお継が云つた。

「だつて知つてるものなら、はじめから分つて居さうなもんだがねえ。・・・・・私かつて目は利くよ、何しろ商賣人ぢや決してないがね。」

「お上さん、些とお風邪氣でお加減が違ってますね。分つたツて云ふのは、然うぢやないんです。ーー
お仲さんが知つて居さうなものだと思つたのが分りました。此の春、新富座へ遣つて頂いて、一所だつたのはお冬さんでした　ーー　病氣で宿へ歸つて居ます　ーー　道理こそお仲さんは知つちや居ません、・・・・・私は劇場で見たんですよ。」

女房は又咳をして、

「だから、其の時の辨天小僧。」

「否、飛んでもない！　話しますと、お上さんも御存じかも知れません。萩の室のお美のは、彼の方は、淺草の茅町邊の大津屋と云ふ大地主様の御秘藏娘なんですわ。」

「ぢや、紙問屋の大津屋さん。」　と女房驚いた顔をする。

世にも知られた豪家なのである。

「東の三を取つて見物をなすつて在らつしつたんですがね、五十がらみの、はき／＼した、大所には些と鐵火過ぎるくらゐな大御新姐、それが母様んで

すツて。小體らしい小僧がついて・・・・・

何しろ、お年紀がらと云ひ、御容子と云ひ、見事にお目立ちなさいますもんですから、総見の連中なんぞ、舞臺より其の方を騒ぐんでせう。

此の土地の若い妓なんざ、およしなさい、と云ふのに、お召もの丶噂やら、柄ゆきの評判やら。

お茶屋で聞いて分りました。

一番末娘でおあんなさるんですツて。男のお子は一人もない。娘さんばかりお四人、総領に御養子で、あとは皆分家をなすつた。お宅には萩の室のあの方お一人、確お名はお親さんと聞きました。

親坊、親坊、時々〳〵親坊主なんて其の大御新姐がお呼びなさるのを、小僧さんの事かと思ひましたつけ。・・・・・亂暴な口をお利きなさるくらゐ、噛んで了ひたいほどお可愛いんですとさ。

御総領のお姉さんが、また、あのお娘を第一御贔

屓、大仲よし、御自分の事、物よりか、あの、お親さんの事と云へば、先へお騒ぎなさるんださうですから、御養子かツて、一通りのお扱ひぢやありますまい。

あの日は、忘れもしません。入のまばらなのが心細いくらゐ、酷いお寒さで、朝からちら／＼催して居ましたのが、序幕が濟んで、二幕目の開きます頃から、大雪に成りました。

毛布にお蒲團、湯たんぽと云ふ桟敷のお支度。それでもお冷えなすつたと見えます　ー　尤も身體がお弱くつて御病氣勝ださうで、直に風邪をめすんですつて　ー　替りめ替りめに、江戸中の演劇を一巡りお廻んなさると、お疲勞が出て其處で御病氣。かはり目の初日があくと、其の日お床上げで、あくる日が髪結日で、三日目にお湯へお入んなすつて、四日目頃から木挽町を振出しに、トン／＼双六の目が出ます。

勿論、およつてる間でも、有樂座に不時なみせも

の丶面白いのがあつたり、義理の温習でもあると云やあ、其の時から御本復。」

「へい　ーーー」　と呼吸を引いて、さすがの女房も唾を飲んで、

「何でも藝事がお好きなんだらうねえ。」

「父上の大旦那が、評判のつかひてでおいでなさるさうですから、お親坊、衣ものが、派手だぜ、髱が出過ぎた、帶が厚い、白粉が濃い、なんのツておつしやるんださうですから、ーー　成程其のお仕込みで御酒を飲るかも知れません・・・・・・踊に音曲、お手習、お遊び半分でせうけれど、お裁縫のお稽古、花、茶の湯、それで、ぺろ／／が出來ますとさ。」

「え、・・・・・お舐めなさる、ふう。」

と呻つて、

「其のくらゐな御難はあらうよ。」

「串戲ぢやありませんわ、お上さん、何處かの學校もおでなすつて、ぺろ／／つて、あの、外國の言語ですよ。」

「あゝ、然うかい。・・・・・私は何うかして居るんだね。ぺろ／＼と聞いて冷りとしたよ、ーー些と落着いて、」

と一服吸つて、

「ふう、成程・・・・・」

「それで居て、活きたお人形さんか何ぞのやうに、些とも、ものを知つた御様子がなくつて、それこそ、振袖で暖簾を分けて、ちらりと久松を、と云つた處が身上でありますのさ。」

女房は、田之助に其の顔立が肖たと言つた、お繼と云ふ此の伊豆千の女中頭は、知らず、當代の誰ぞ、贔屓の役者に其の面影の通へりや、鼻息の暴さ一通りでない。

「眞個にいゝ月日の下にお生れなすつたと云ふのはあの方ですわ。

芝居の時だつて何でしたよ。然うやつて大雪に一成な》りますとね、お上さん、先刻も申しましたけれども、お親さんはお寒かつたか、それとも御贔屓

俳優に入の薄いのがお口惜かつたもんですかね、ーー

しつかり今日はお見違へ申すやうです　ーー　其の緋無地の半襟に黒襦子の襟の掛りました異八丈のお衣で、鬘見たいな結綿でしたね、白粉がもつと濃ござんした。其のまんま花道へお立たせ申したいやうでしたよ。二幕目を見て居なさるうちに、大層お顔の色が蒼く成つて、頭を壓へて俯向いてお了ひなさると、大御新姐が、どつかりと、棧へ凭かゝつて居なすつた膝へ抱込むやうになすつて、肩を抱いて、頬摺をするやうにして、何かお言ひなすつたのは、容體をお聞きだつだんでせう。

通の板戸から、右の小僧どのがスツポンへ消えるやうに、ひよいと出て行きますとね。お茶屋から女中が一人、男衆が二人、ばた／＼で參りましてね。其の人數に包まれて、大新姐がお附添ひで、緋の紋縮緬の長襦袢の一寸端、褄先も見えないで、結綿の襟脚雪のやうに白いのばかり、宙に浮いて引揚げておいでなさいました。

お茶屋へ參つた時、聞きますと、奥二階へ炬燵が

入つて、金屏風でおやすみなすつた處　ーー　寒氣がするのに、途中の雪に當つては、で茅町の御本宅から、おかゝりつけのお醫師に、義理の兄さん若旦那、乳母と三人、自動車で、大夜具、掻卷、羽蒲團、枕まで積んで駈附けておいでなすつて、枕許には、でん／＼太鼓、犬張子。」

「まあ、可い加減におしよ。」

「否、其のくらゐな騒ぎなんです。そして御本人はお襦袢を召したなり、氷嚢を枕で、うん／＼呻つて在らつしやると云ふんですもの。

餘り御果報で、それにお美しいから、何か憑ものでもしたんぢやないかなんて、皆で風説をして居たんですがね、何うでせう。

二番目が丁と開くと、お髪が綺麗に、お化粧が直つて、上下そつくりお召換で、濟して、桟敷へお歸んなすつた。

そしてね、居まはりへ極りが惡さうに莞爾なすつ

た時の御様子ツたら。大御新姐が、其の様子に、ほた／＼としたお顔色で、

（親坊、弱蟲で不可いの、些と運動に、氣に入つた俳優でも買はないか。）　つて。

萩の室の、あの方の、此を聞いて、ぱつと赤くおなんなすツたまた、其の御様子ツたら、お上さん。

大御新姐は、舞臺よりか、娘さんの其の顔を御覽なすつて、やうかんを撮んであぐりと一口。」

「何だねえ、手眞似なんか。」

お繼は我が頤を、手の甲で、すらりと掏つて、

「私は涎が垂れさうですもの、お話をしても取亂す・・・・・連中の若い妓たちはチユウ／＼遣つて、しみ／＼羨しがりました。お酌さんなんざ、お袖に觸つて、あやかるんだと云つて、幕間には棧敷裏に立つて待つて居たほどなんですもの、お上さん。」

「大津屋さんなら無理もなからう、何しろ大したこッたねえ。ーー　おや、車夫・・・・・」

と目を返す。ぬいと立つたは痣鐵で、此奴が人を食つた事には、供待に有合はす伊豆千の番傘を眞直にさし翳し、半被を脱いだ薄汚い襯衣ばかり、とツちりものに代つて、ぶらりと、一銚子提げて居る。

「何うしたの。」

と、お繼が驚く。

「丁どおかはり目なんで、へい、お使立て申しちや勿體ねえ、此方あ歩行くのが商賣で、何うせ　次手ですからね、へい。」

## 八

「お上さん、大丈夫でせうか知ら。」
と、間を置いてお繼が言つた。
「人相の惡い車夫ぢやありませんか。」

「さあ、今お仲が來たら、悉しく樣子も聞かうけれど、・・・・・何しろ支度をさして待たして置けツて、お言ひなさるんださうだからね。ーー　其の父さんの大旦那は、大層なお遊好きだツて言ふから、ひよつとかしたら何ぞ御趣向があつて、我家をおかつぎなさるんぢやないかとも思ふが。

まさか、御秘藏のお娘さんを、そんな女形にお使ひなさりはしまいしさ、變だと思ふよ。

ねえ、お繼、第一お前が持つて居る鶴の間のお四人さんも、些とも私には會得が出來ない。・・・・・妙な日だと思ふよ、今日は、・・・・・狐が嫁入てツた雨ぢやあるしさ。・・・・・何う云ふ方だらうねえ。又あのお連は　ーー　氣むづかしさうだけれ

ど、立派な、旦那様が在らつしやるかと思へば、御後室様と云つた切髪の御隱居ね。然うかと思ふと恐可く當世なハイカラの方が一人、それから、あの、判じものゝやうな廂髪の妙な御婦人。」

「お上さん。」

とお繼は忍笑の口を壓へて、

「判じものだツて、お上さん、あれは看護婦かなんかですわ。」

「看護婦とは？」

「お座敷へ出てますうち、そちこち様子が分りました。・・・・・あの、年寄のお介添かた／＼お伴をして來たんです。旦那は御隱居の御子さんなんです。そして、同國の人か何かで、學賓を頂いて修業をしてゞも居るらしいんですよ。ハイカラの方は、旦那の事を先生々々／＼と云つたり、清川さんと云つたりしておいてゞす。何しろ豪い先生なんですね。」

「そりや先生は分つたがね。何うも、私にや、あのお四人の一組と此方の茅町のお娘さんと、其の中

に何だか綾がありさうに思はれてならないがねえ。」

「綾ツて、お上さん。」

「見合ひとか何とか云ふ。」

「まさか！」　と打棄つたやうに云ふ。

女房は番煙管を柄長に扱いて、

「でもさ。」

「串戯ぢやありません。あんなのは下町娘に向きませんわ。一ツの首なんざ、美顔術ぢやありませんか。・・・・・ねえ、お仲さん。」

お仲が來た。ーー

「あゝ、お前、様子は知れたかい。」　と、女房は、むく／／と膝を動かす。

「様子ツて？」

「萩の室の方のさあ。」

「否。」　と、けろりとした顔色。

「だつて、お附き申して居て、何とか其處

は。・・・・・淺草が賑だとか、觀音様のお茶湯日だとか。」

「否、お酌を一ツしましたッ切、もう可いとおつしやいますもんですから。」

「おや、何處に居たのさ、それぢやあ？」

「芙蓉の室へ助けに出て居ましてね、藝妓衆やなんかと、あの・・・・・姉さんの・・・・・」

「あゝ。」

「鶴の室の妙な廂髪がね、一口何か頬張つちや、縁側へ出ると、足をぶら下げて、身體を橋に反返つて、あの赤い鼻緒の日和下駄へ、どく／＼した大きな白足袋の足を乗つけてね、脊が低いもんだから途中に釣下るやうにして、ら、ら、ら、らッて、變な鳥のやうな聲を出して、唄か知ら、まるで、體操の掛聲ね。ぐるりとお臀を心棒にして縁へ手を支いて刎返つて、また橋に反つて、ら、ら、ら、らッて唄ふの　ーー　」

あゝ、尋常でない！　聞いたゞけでも人間離れが

して居る。雲雀の如き女性であらう、凡慮の及ぶべき處でない。

「・・・・・それをね、皆で覗いて居ましたわ。」

「くだらないぢやないか。その位なら、供待へ行つて、あの車夫のお酌でもしておいで。」

上さんの中腹。お繼は笑ふ、お仲はむくれる、電燈が點く。しらせの札がカチリと返る。それ、鶴の室でお呼びなさる。

「へい　ーー」　と云ふ女中の返事甲高なり。

其の、ら、らと唄ふ女性であらう。廂髪の高いこと、切立ての崕のやう、下にめめ、、をふ―はきを《やど》す・・・・・さて、桔梗鼠と云ふ染色を御存じと心得る。あの派手な紋羽二重の單衣に、白襟をけば／＼しく二枚見せて、同色唐縮緬の襦袢の袖を突張つた、怒肩の猪首に、袋の如く皺を背負つた、つんつるてんの裾短。締めた帶の擬友染。雲をぼかして、眞青な杉の樹立、朱の鳥居、天狗の面を眞赤につけ

た、當年の新柄を、ごツんと一ツ根太を上げて猫背の太鼓、兩手を、ぬいと眞直に首を突張り、腰を据ゑて、件の緋天鵝絨の緒の日和下駄で、歩道の敷石こツこツと蹈んで出ると、萩の室の眞正面、何と思つたか、沓脱の上へぬいと立つた。

肩を動かし、訛つた音で、

「あ、伺ひます。」

大津屋の娘お親は、ほんのりとした顔をして、おくれ毛を二條ばかり。手酌の銚子の華奢なのを膳に置いて、斜に猪口を取つた處であつた。

女護の島の番卒に、ドンと刺又を突かれたやうに、はつと怯えた容子をして、凜とした眉を半ば、片袖で猪口を蔽ふ。

「あ、一寸伺ひますです、あ、一寸。」　と膝へ兩手を突出す、押立尻の桔梗染・・・・・

こゝで御相談が少しみる。此の娘が、毒婦で、如

夜叉(やしや)で、我儘(わがまゝ)で不品行(ふひんかう)で、お侠(きやん)の、蓮葉(はすは)で　ーー
お轉婆(てんば)で　ーー　其(そ)の、らゝの女性(によしやう)が、賢女(けんぢよ)で、烈(れつ)
婦(ぶ)で、貞淑(ていしゆく)で、恭謙(きやうけん)で、温良(をんりやう)で、勤勉(きんべん)だつたら、諸(しよ)
君(くん)は國(くに)のために何(ど)うしやうと思(おも)ふんですか。

## 九

「伺ひますですが。あ、」

蝉が鍍金をしたやうな桔梗染の其の女性は、怒肩のしやつきり、

「あ、失禮ですけれども、貴女は何と言はるゝ方ですか、一寸お尋ね申しますです。」

威儀正しくと言へば言はれる、が、不作法と見れば見らるゝ、棒立に姿勢を正す。

娘は肩で、一寸會釋の嬌態をしたばかり、横に背いて曲つた胸に、千鳥掛や頸へ袖、田舎源氏の紫が、兄様に拗ねた形で、何にも言はず。

女性は目と頬を一所に膨らし、もぢ／／ぱち／／とお親を視た。

「可いです、はい、貴女が御返答なさいませんなら、私からお話をするです。此方は恁う云ふものです。はい。」

萌黄の帶へ膏藥を切張するやう、先刻から握つて持つた、一枚大形の名刺を、縁の敷居越に突出したを、唯見ると、肩書を別にして、工學博士清川扶道と鮮明である。即是、兩國の松岸から行方知れずに成つた照樹の主人・・・・・とすると、あの年寄と云ふ客は、奥州黒澤尻の産物たる姑に相違ない。

で、名刺を据ゑると、女性は立直つてそして恭々しく最う一度禮をしたが、蓋し對手のお親よりは、名刺に對した敬意なのである。

「あ、突然ですが、私お使ひに參つたんです。貴女、一寸貴女にお目に掛りたいとおつしやるんです。ですが、直接にお逢ひ申しますのは先生ではございませんです、此の先生の御母堂でおいでなさいます、お年寄です。如何ですか。」　と言ふ。恁う記すと、聊か應接の手間が取れたやうであるが、ぬッと來て、言を掛けて、名刺を突出して返答を促したまで、實は殆ど一氣。

出された名刺に、下伏せながら、瞳を返した。横

顔に當てたまゝの羅に指をも透さず、しなやかに搦んだ長襦袢の、さらりと漏るゝ朱鷺色が、微醉の瞼に映えて、一筋凜々しく眦に紅をさしたやうに見ゆるのみ、娘は失張ものを言はぬ。

帳場からは立身上りで、及腰に此の様子を女中が覗く。

氣がさしたか、其の方へ向をかへて、女性が頬邊を赤く一息入れる・・・・・此は、見る目にも暑くるしいが、縁の隔ての沓脱は秋草の雨とゝもに打水も濡れつゝ涼しい。

「何うでんすの。」

耳まで裂けたかと思ふ、大な口へ窪〓襞をまた入れて、恁う云つて、小慧しくも鋭い目で、額の皺越に、ぐツと見越して、向うの高縁へ、山姥が獲物を狙つて顯れたのは、白髪の切髪、黒澤尻、清川の刀自にておはす。

「ふアふア、せゝこましう、もの欲しさうなが、

些と可え庭なす。」

此より前、庭下駄で、此の刀自、其處らの秋草を見歩行いて、廂づたびに雨を避けて歸つて來たつけ・・・・・のさ／＼と通掛りに、じろりと芙蓉の室を睨むだ。ーー　其時、お親は、美しい眉を開いて澄まして手酌で傾けて居たのであつた。

「や、危いですよ。」

と聲を掛けて　ーー　下駄を脱棄てに高縁へ上るーー　其の刀自の腰を背後から白癡な養子が家つきの産婦を抱くやうな手つきで、背廣の押立尻で、謹んで押上げ奉つたのは、眉目尋常、髭の綺麗な新學士と云つた風采の若い紳士で。婆の腰をよいとこらさのやつとこなと云ふ樣子で押すと、刀自は憚氣もなく、ぐいと跨ぐ、と黄なる褌を、あふりと飜した、女の黄なる褌は變だ、案ずるに是なむ蕎麥切色にして、恐らく洗濯をしないのである。

女中が所謂、若い紳士は美顔術の男なのである。美顔術は猶恕すべし。いゝ若いものゝ癖に、先輩の婆の腰を抱くに到つては國家の體面許すべからず。長幼序ありか、君子の禮か、紳士の作法か知らず、

近頃は劇場の棧歔、音樂會の廊下などで、恁うした流行をよく見掛ける。が、願くは止めさしたい。それ道徳を以て虚飾とするのは緋縮緬よりも罪意である。

「御隠居様、お氣を付けなさいまして。」

それ／＼、美顔氏又出て、縁を今また下りようとする刀自の腰を、上に居て、一歩退いて、而して抱へる手振。

「否、大事ないんですばい。」

と、刀自は飜す黄褌、汚點ある澁脛、巾着の口を絞った煙草入の附紐を、ト籐網の筒へ一扱、鎖鎌の如く被布の腰に小手捌きで、板敷をツン／＼と蹈んで渡る。

それと見ると、此方の沓脱を右手に開いて、猪首の滅入込むまで一窘みに手を垂れた桔梗染が直立の姿勢たるや、禮法の正しき事、丹波山笹山の教會にて、結婚式を擧ぐるが如し。

刀自は額越の横目なり。

「挨拶は何うでんした。」

「は。」　とばかり唯肩を揺る。

「紹介は濟んだかなす。」

「單にです。其の實はです。要領を得ませんです。恥入つてばかり居らるゝのでありまして、は。」

刀自は繪姿のやうなお親を見た。色香は合勸の花に似て、たゞ、ほんのりと恥らへる、然もこそと黄なる笑、丈夫さうな齒を豁に、

「あの阿娘や、はい、御免され。」

で、腰を捻つて、小座敷へぬツと通る、と一輪插に水引を投げた違棚を背にしたお親に、無手と肩を並べて、床の間を背負て御着席。

唯、居直つて先づじろりと一遍座中を〓し、

（赤蜻蛉に掛稻。）　と云ふ、小意氣で實入の可さゝうな、お帳場好みの茶掛の一幅を首を撓めつゝ一つ視た。・・・・・瞳を返して、其處に置いた放しの

工學博士云々とある件の大形なのに瞠目するや、忽ち口の端を、ふツか／＼と動かしたのは、無言の指揮で。桔梗染が猶豫ふ處を、煙管筒の鐺を返して、トンと指す。

「は。」　と慌しく、はらんばひに成らないばかり、龜の子泳ぎに手を伸して、はつと掌にのせて取る。

美顔氏は、と見ると、向う廻縁の角の柱を小楯に、スツ／＼、舞踏の足取。庭の石燈籠を頤杖の寸法で、鼻の下を伸しながら、此の小座敷を流眄したり、彼方の廣間を覗いたり。其處は葭戸越、簾を隔てに、藝妓の影が、萩、桔梗。田圃の雨も青薄、まだ灯點さぬ雪洞が白く穂に出て濡れて居る。

「今なツす。」

煙草入を引着けた膝を正して、刀自はお親に居向つて、桔梗染を頤で指して、

「彼女から申入れたんですがなツす。私はなす、工學博士清川扶道の母ですばい、はツい。」

と背屈みに其の頤でしやくつて、會釋を行つたが、お親の然うした姿には、風ほどにも當らぬか、一枚朱鷺色の袖口を青い花の簪に掛けたまゝ、露を庇ふ風情であつた。

「此は、はじめてゞすばい、先づ、なす。貴女は何と云ふ人ですかい。些くり、面談のなす、是非ともにはい、貴女に話したい事があるで、推參をしたでなす。先づ、名告りんされ、や、あの、娘や。」

折から、雨の一陣、刈萱の靡くより、優しき袖を目角で撓め、

「博士がなす、自分に出向いたではないでなす、そないに恥かしがる事は要らんぞなす。私は婦人ぢや、聲は男子のやうぢやがなす、一寸、顔を見せんされ。」

と刀自が無遠慮に握つて、ぐつと引く袂の端を、はツとお親が引き返して、頸の雪の音するばかり、肩にひつたり面を隠す。

「あツはあ。　（と笑ひ、）　那樣せいでも可い

もんなす、あツはあ。」

と離して、手持なく、煙管筒を取直す、と娘の手酌の座敷ながら、爰に無いものが一つあつた。

「あ、お煙草盆。」　と桔梗染が、あたふた云ふ。

「・・・・・はあ、お煙草盆。」

聞きつけて、引取るより、言ふより早く、身を飜して、其處が博士の座敷から、煙草盆を押取つて、忽ち桔梗染に手渡しをしたのは美顔、やゝこしいから姓を言はう、古澤と云つて今年出の醫學士である。惟るに、科學の神聖、醫家の權威に對しても、恁う云ふことを記すのは非禮に當る、が、やむを得ぬ。若い學士が自分勝手に馬鹿な眞似をするから不可ない。

刀自は、大に辨ぜんずる、ぺら／／舐ずつた舌とともに、すつぱと吸ひ、

「や、これい、先づ顔を出され。名告らさらぬかなす・・・・・禮儀一通りはやの、武士町人の差別は無いで、他が云うたら、早う名告るもんですばい。」

目で射て、顋で頷き、

「あツはあ、（と笑ひ、）他で若いものが見て居るて、うゝ、はい、其處もあるなす。これはい、谷、林子、彼方へなす、古澤さんも、やあ。」

「は、失禮しました。」

と、縁越に、ハツと成つて靴足袋、太郎冠者の足取。古澤が座敷へ消える。

續いて、桔梗染　ー　名は谷林子　ー　の退出た工合は、此は、煩はしいが後學のために記す。

向うの縁のふちへ、仰向けに先づ反ると、胴切にしたあとで太脛だけ取つて着けたやうな其のづんぐり女史、らら、と低唱が此目魚がへりに、ひらりと飜つて、ぽんと反つて、らら、と低唱。くるりと飜つて、廻縁を下駄で傳つて、ららと低唱。そして行く。・・・・・心すべはどろ／＼足袋に鼻緒の汚點、此の赤いのも青いのも、翡翠より頬紅より、婦人に取つては大事である。

「さ、誰も見んでなす、あの娘や、これ、貴女の前さ、博士清川の老母ほか居らんでなす。顔見せられ、名のらされ。若い娘ぢやとばかり言うて、唯黙つて顔をかくいて居たでは濟むものではない。恥かしがる云うて程が過ぎると、無禮に成るで。なッす！」

と一喝を高く入れると、怯えたらしく肩を縮めて、お親ばつたりと疊に突伏す。消えるが如く衣紋を落ちて、眞珠の根掛が浮くばかり。

刀自は、突掛けた膝を引いて、フンと吐く鼻の煙ともろともに、納まつた顔色で、

「矢張尋常の小女郎だあなす。あッはあ、（と笑ひ、）　や、これ、顔も得う上げず、口も利かれんほど恥かしいかなす、や、あの娘。私方で名刺を突出したども、和女挨拶をなさらんで、禮儀を知らんなら教へよう思うたどもなす、若い娘が恥かしがるに無理はねやあで、更めて名告らいでも可いですばい。

大津屋と言ふ商人の娘、お親と云ふ事、此の料理

店の下女を呼んで既に聞いた上だでなす。それがですばい。」

灰吹をコツンと敲き、

「私が今の前時通りがかりに、主が顔を見れば様子も見て、此の行状を見たでなす。八幡太郎殿前九年、後三年の合戰な、天保年度の飢饉にも、磐梯山の破裂にも、はい、釜石の大津浪な、旱にも長濕氣にも、びくともしたことのない私ぢやがなす。主の此の大それた行為には興覺めたものですばい。それでなす、娼妓、淫賣か、藝妓、舞妓など言ふ醜業婦なンば、見るも汚れぢや、棄てゝ置け、筍もぢやなす。」

と煙管を落し、兩手をしやつきんと膝に支いて、刀自はぐつと乘出して、

「人間の皮を被つた世間の娘の一人なンば、此方の兩親、父御、母御、兄弟、甥姪、縁者、一類、お師匠様たち、なす、學校もあらう、友達衆、否さなす、世のため、人のためにも棄置かれん思うて、念

のために、下女ども呼出して尋ねたンば、あらう事かい、商人の娘だげなが、歴乎とした　ーー・・・・私は魂消たぞ、呆れたぞ、なす。や、これ、あの娘。

若い娘が、七か、八か、まだ二十とは成るまいに。」

空蝉のやうに疊に縋つて、身動きもしないで居る、大津屋の娘、帶腰から、襟のかゝり、前髪結つた元結の尖まで、顎で尺を取つてじりゝ／＼。

「一人ではい、茶屋入をして、勝手に食事をするさへ不貞くされの棄りものぢやに、小座敷で酒を買うてぬく／＼と爛をして、手酌で花見をすると云ふ行状が、これが世間にある事かなす！

親兄弟が泣きのほども思はれるで。

小にしては家のため、大にしては國のため、聞棄てにも、見免しに黙つて居られる事ではないばい。

國家擁護團、婦人教育會の會員とあつて、郡の有

志ぞ、理事相談の會上ではなす、有功賞牌着用の資格には三席と退らうと思はん私ぢやすけえ、見ず知らずの主ぢやが、立入つて意見をする。

要らん世話ぢやなぞと思うたんば、國のため家のための賊ぢやでなす、煙管の此の苔打つても、撓直さには置かれんでい。

や、何故と言へなす！　主がやうな行為をするものが一人あんば、家が滅びる、三人あれば町が滅びる勘定ぢや。我身ばかりの事と思ふな。人間と云ふものは、汝が身勝手をして其で濟むべいものではないなす。仕たい三昧の事をするのを黙つて置くと思ふまいぞや、これい。」

言論、乃一度（煙管の苔）と云ふに及んで、取直いた羅宇を鰌掴みに、雁首をひたりと一つ、お親の脊筋に押當てた、が、緋鹿子の背負揚を逆に狙つて、づい、と引くと、勝誇つた餘裕の、綽々たる體を示して、

「なす、あの娘。これ、目に餘る惡業を働くで、

小女郎が小娘でも我儘、蓮葉、お轉婆なす、一筋繩では行くことでないと覺悟した。時んば、孟子の母は知らぬ、悴扶道をば百姓の童から、今ンば世に知られた大博士にまで仕立上げた私が、此の充滿の腕の器量でなす、見事、説得、折伏して誰方様も御覽ざれい、誰どのも見てござれ。一度鳴出いたら鎮守様の陣太鼓ぢや言はるゝんすばい、黒澤尻のお婆が、此の娘の買うた酒徳利を打挫ぎ、盞を叩破つても、道理の至極詮ずる處、指一本指さすまい。都育ちの、伯父伯母御、兄、姉たちに、あツと口開かせう思うたんすども、あツはア　（と笑ふ、）　撥を打當てるほどでもない、理屈は鞘へ納つたんばい、あツはあ。」　と笑つて、煙管をすぽりと筒指しの突出し腹。

張合のない雛兒だあなす。や、これ！　向後とも恁うした不品行不了簡の起る時ンば、お天道様の有る處にや、雨が降つても、黒澤尻に些とんべい口喧しいお袋様があると思へ！　守本尊と思へなす。何時までも今日を忘れずと、私が教へた事守り居るなら、立身も出世も出來る。容色も、滿更でなし、年

も若し、早い話が、あツはア　（と笑ひ、）　今は獨身でござるで、悴扶道の嫁にも可えくらゐ、たとへですばい、あツはア　（と笑ふ。）　博士の奥様と言はれたゞけに、主あ何ないな顔をする・・・・・もう私は去ぬで、や、これ、一寸見せされ。」

と猫背に屈んで額で掬つた。

途端である。

婆の横顔を拂くが如く、敷いた袖の長いのを襷掛けに颯と肩にかつぐと、八ツ口から手を出した、大津屋のお親は、雪を欺く冷艶なる肱の下から、下谷一番伊達者の顔を出して、

「ばあ　ーー　」

「ふえゝ！」

と呼吸を引いた黒澤尻の大刀自は、怯乎として、黄褌の割股、べつたりと腰を落す。

此は驚いたに違ひない。氣の弱い娘の身で、餘りに恥ぢ餘りに恐れて、為に、氣が違つたと思つたら

う。
唯しやんと居直つたお親の姿は、野分のあとを月の露、女郎花の水際立つて、
「其方へお寄り、其方へお寄り。」
「やあ。」
「口が臭いよ、お婆さん。身體も臭ふの。御教訓だか御説教だか知らないけれど、惡臭くつて堪らないわ。鬱陶しいぢやありませんか。」
と片褄スツと鳶足、くの字に成ると、弦を切つたやうな、左手を投げて、疊に落し、凜々しい目で屹と視て、
「一寸、途惑ひをした救世軍ちやん、教へて遣らうが呆れるわ。眞に大きなお世話でござんす。ーー何え？・・・・・國のため、家のために、若い女が一人で酒を飲んぢや不可い？・・・・・一人で惡けりや相手を呼んでお相酌にしませうか。私がポンと手を敲きや、鯡鯉でも金魚でも芭蕉實形に浮いて出てよ　ーー　おや、色男は麩を喰べて泳いでるやうだ、御免なさいよ、ほゝゝゝ。」
と耳許を白う俯向きながら、快さゝうに又笑つた。

「ねえ、お婆さん、私の親はね、俳優を買つて遊べつて言つておくんなさいます、が、いゝ香よ、白い蓮の花の薫だわ。酒もお飲み、お錢もお遣ひ、祝儀もお遣り、麩もお投げ、手をお敲き、あいゝてつた寸法なの、沈香伽羅より結構なの。お婆さん、貴方の様な悪臭いんぢやないんだよ。」

と瞳で笑つて、そして眦をきりゝと為す。

「煙草は喫むですども。」

と大刀自は、思はず其の口を壓へながら、餘りの事に顛倒して、驚破や火事だと聞いて、燒くのに芋を掘るやうなことを云つた。

「汚らはしい！、酒の臭氣とは違うですばい。」

「もし・・・・・と言ひませうか知ら、私等下町の娘の口はね、くさやを噛んでも、青紫蘇を銜へても、お蕎麥を喰べても白梅さ、果報にお生れ遊ばした、育が違ふんですもの。此の上どぶろくを煽つたつて、お小姓を抱いたつて、罰も當らなけりや、食傷もするんぢやない、下手な曖もしやしませんから

御心配にや及はないわ。ねえ、一寸、天裡教、一れつ濟ましたらお歸んな、真個にさ、おせゝとやらの蒲燒だよ。」

「鰻かなす。鰌の串燒を、あれさ、私等の國ぢや東京燒と云ふンばい、蒲燒の事だなす、やあ。」

と婆さん、呆氣に取られ、天人の前で噴嚏をするやうな事を言ひ、化された顔をして居たが、忽然として正氣に戻る、とぶる／＼と五體を震はし、目の色變つて黄色に光ると、白髪がざわ／＼と凄く成つた。ーー　「黙りませう。」

成程、黒澤尻のあたりなら、梢の猿も、穴の猪も、一縮みに成りさうな、取つて置きの矢聲で怒鳴る。

唯、帳場の方で思はず、團扇を、ぐい、と握つて、ずつと立つたのはお繼である。

「水鐵砲は無いこと。あのピンとした白髪の取手へ。」

「鼬花火が可いわ。」

「それよか飛行機で爆裂輝。」
大廣間の簾越に姿婆氣な藝妓、雛妓が騒ぐ。

## 十

「東京の女郎妻が、おのれは／＼。口が縦に裂けたンばか、吐すなす、吐すなす！」

と、身體の皺を一齊に搖ること、千斛透を籾殼の泳ぐが如く、樺色の呼吸を噴いて、

「沙汰の限りな罰當り、太陽様のござる下で、能くも、おのれ、俺に向うて。・・・・・鬼め、夜叉め、惡魔、外道。」

娘は袖を捲いて膝に投げた掌を、右手の指で、トン／＼と二上りの絃の當調子。

「難有いことね、お婆さん。でも、夜叉だの、惡魔だの、そんなに大したものぢやないの。唯ね、商人の娘なの、大津屋の親坊てツて少々お轉婆な、聊か我儘な、大分だらしのない、もしかすると、餘程浮氣な。」

「逆賊。」

と喚いて、兩耳の白髪を捌く。

娘は莞爾微笑した。

いや笑事ではなからう。七十有餘歳の媼の、眼が白く、顔に朱を灌いだから容易では無いのである。

「地體先づ。」

肩で呼吸して、

「おのれは、己を何、何、何だと思うてはなす！」

「猫化と思つてよ。」

「わあッ。」

「岡崎女郎衆は、よい女郎衆。」　と清しい、可愛い聲をして、お手玉を、ボン／／空に投げる眞似。

黒澤尻は、逆氣が天井へ上づツて、我が體に中腰に釣し上り、

「天地が逆に成つたんばい、電燈の光が眞暗ぢや。これい、本山檀那寺の和尚にも婆呼はりされた覺えのない、禪機も悟つた己だなんす。少い時から後家を通し、操を立切り、清川家三畝の田地を自分で耘

ひ、自分で耕し、中將姫ほど機を織り、二宮先生ほど儉約して、小學校へ通はす頃から、己が女の手一ツで、日本國の大博士扶道を育上げた、奥州五十四郡の礎とも、婦人の鑑とも云はれた己を・・・・・」

「あゝ、そんなに骨を折つて、たツたお婆さんに成つ了つたの、詰らないもんだわね。後家さんを立通して、小兒に修業をさせる閑にお湯へでも入つたら何う？　一寸、其方が他人の私には結構よ。第一人に口を利く前に、楊枝を使はなくつちや困るわね。」

「や、おのれ、己は扨て己にもせい、扶の學識に對しても・・・・・我が子ながら大博士ともあらうものが、手を支いて敬ふ己ばい。」

「そんな、猫の化けたやうなお姿さんに、手を支くやうなら、博士に成りたくありませんね、まあ、・・・・・てお一斷《ことわりです。」

「成らう云うて成れるか、女郎妻。悴ほどのもの

でもなす、それまでに成るには、はい、何ないな苦勞をしたと思ふ。夙に起き、夜半に寝ね、螢雪の苦學と云うて、やこれ。」

「あい、聞えてよ、騒々しいねえ。然う、お姿さんの息子さんはそんなに骨を折つて博士に成つたの。私は此の世へ生れると、すぐに大津屋の娘なの、果報なものね、大方前世ぢや蓮の絲でおまんだらでも織つた報でせう。何よりか幸福なのは、お婆さんの様な親を持たない、姑を持たない、親類も縁者も持たない、まるで他人ですもの。でも一寸だつてそんな口中を嗅がされたのは・・・・・・あゝ分つた！・・・・・蓮の絲を織りながら、おみき徳利から喇叭を極めたんだよ、屹と然うだ。」

と獨りでをかしがつて、花やかに、「ほゝゝほゝ。」

「あれ、御隠居が突立つた、お繼や　ーー　若衆ーー　お供さん、大丈夫だらうかね。」

と、帳場の女房が氣を揉んで、供待へ聲を掛ける。

痣鐵だいじんと成りにけりで、此の時しも、上げ胡坐。面の眞中へ指一本。

「えツへ、御覽じろ、人相が惡い、此の鼻へ酒を飼つて、夜道の土手を待たしとくお孃さんだ。びくりともするんぢやねえ。紀の國屋あ。」

「紀の國屋ーー　」　と廣間の方でも女の聲。

「いよ、難有えと申しやす、紀の國屋　ーー」

「私だよ、串戲でせう。」

「こりや女中さん。」

、お仲が出て居る。

「あのね、お前さんに、一寸おいでなさいツてさ。」

「私に？」

「お孃さんが。」

「へい、縁側へ廻れとおつしやる。」

「何だかね、別にお肴もご註文なすつたのよ。」

「や、下郎とさしでお酒宴。お姫様お酌と來ら、堪らねえ。向島は地代が上りますぜ、此の秋は私の

思でも洪水は出ねえや。」

「どうぞ、ねえ、まあ、秋口に掛るとね、こんな雨でもはら／＼しますよ。」

「當年は請合だ、言ふ事が違つたら、私あ、棹立、鯱立、でんぐり返しでも何でもすら、早い話が脚の指を折曲げて狸のやうに甲羅で歩行くだ。一寸お目に掛けても可うがさ。最う恁うなりや討死でも何でもしてえ。」

「まあ、彼方でお待遊ばすんですから。」

「お待兼ね・・・・・とおいでなすつたかい。女中さん、後生だから一ツ此處で遣らしてくんねえ、鯱立を。」　と眞顔で吐す。

鐵さん何うかして居るぜ。

「まあさ、そんな事より、そしてね、お前さん、來る時に、あの何だかね、先刻のお扇子を持つておいでなさいつて、然うおつしやつて在らしつたんだよ。」

「え！　扇を。」
「然うよ。」
「そりやこそな。」
と額を叩て、立掛た腰を、縁臺に、ぐにやりと支く。

「何うしたのさ。」
「些と話がうま過ぎる。それとも彼方にやお雛様の御命日、で施行でもなさる氣かと思つたがね、南無三寶、的切、此奴あ簪の手裏劍ものだ。」

「氣取つてないでさ、焦つたい。」
「此方や、氣取る處の沙汰ぢやねえ。」
「さつさとおいでよ、其の扇とかを忘れないで。」
「其の扇なんですがね・・・・・」
「何うしたんだよ。」

「否ね、先刻仲見世前で、あのお孃さんが車に召す時、一寸帶の端にお觸んなすつて、　（あ、扇を落したよ。）　ーー　恁うなんだ。それから私が豫て其の些とばかしの仔細があつて臺箱の中に藏つと

くのを、お使ひなさいまし、で出したんでさ。
其なんだ、・・・・・いや、此なんだ。」
と、母衣の中から捻くツて持つて來て、
「此だかね。大岡様お忍びと云ふ筋ぢやねえか、刺繍奉行ぢやねえのかね、はてな。・・・・・可うがす、構はねえ、おさしと云ふので頂いて、あの目で一度視られりや、地獄の道の一足飛ーー」

「餘興は彼方でなさいなね、さあ。」
ざツとかゝる、女中の傘へ、痣鐵ひよこりと土足で入つて、
「勿體ねえ、女中さん、私あ這つて行く。」
「御勝手。」
「えへ、へい、唯今はお騒がしう、へい。」
お親は端近に褥を移して、座を直して端然として居た。
「まあ、火事のやうだわね。ほゝ・・・・・唯今お銚子＞を　ーー」
で、女中スイと行く。
お親に默つて顔を見られて、痣鐵、柄にもなくも

ぢついて、
「へい、おめしだと云ふにつきまして、へい、むさくろしい奴が、へい、姫、えゝ、姫様の一の前とも憚らねえで、雲助同然な・・・・・・」
「一寸！　姫様なんのつて・・・・・・」
「えゝ、餘り御勿體ねえんで、何とも申しやうが、へい、えゝ、矢張りお嬢さん。」
「お嬢さんなんて云ふと、母様に笑はれますよ。」
痣鐵面くらひ、
「はツ、御免なすつて、若旦那。」
「馬鹿だね、ほゝは。可いから、お前さん、此方へお上り。」
「飛、飛んでもねえ、泥脛なんで。」
では、まあ氣楽にお掛けなさいな。・・・・・そして、あの、今ね、姉さんに託けました、あの先刻の、お星様の晃々と描いてある、お扇子を持つて來ておくれかい。」
「へい。」
「まあ、お前さん、お猪口を持つてたの。氣の附

かない事をしたわね。さあ、お酌をしませうね。」
とお親は銚子を取つて、襟を明るく、帯を綺麗に斜に向いた、が、何かの間違ひで、無理にお父さんのお給仕をさせられた時の外覺えはあるまい、膠もなしに、つんとした拗ねたやうな姿に成る。

鐵は頬げたの痣を捻つて、痛み入つて、
「御勿體もねえ、おとゝゝ、へい／／へいございやす。突如、手酌で頂戴しますも無躾でございますし、然うかつて恁う成つて見ますと云ふと、其の、へい、貴女様のお酌を待つて居りましたやうで、飛んでもねえ、罰の當つた奴で。」
と、抓つた痣から手を離すと、額を叩いて、ごつくと一口。

「あゝ、何とも言へませんや、地獄極樂一齊だ。」
と頭を掉る。

お親は袂を敷いて膝に載せた、あの扇子を疊んだなりで俯目に見たが、眦を返して莞爾して、
「何よ、地獄極樂一齊だつて・・・・・大した事

に成つたわね。」

「鐵五郎、痣と一所に生れて以來、此が生死の境なんでさ。」

「ほゝゝ、どつちか極めてお了ひ。まあ、お重ねな。」　と、軸を捌いて押へて酌ぐ。

「斃死りました。」

と、ぐたりと手を支き、

「お孃さんと云や叱られる、お姫様で不可えしと・・・・・困つたな、辨天様でも、龍宮でも構はねえ、貴女様、私に其の扇子の經緯を白状しろと仰有るんだ。」

「まあね。」

「後でお手討。」

「何うだか。」

と、華奢な拇指で要を捻つて、片手を添へると、するりと開く。・・・・・雨音幽に、空も晴れたか、地紙の雲の月一輪、お親の袖に、繪を染めて、紺青の色の冴えたのが、鬢に颯と照る、・・・・・袋戸

棚も銀地の襖。軒端の萩に輝く露は、描いたる七つの星の面影である。

座敷さへ青く澄む。

此の靈ある光景は、夜の隅田川の岸を隔てゝ、五つ衣に緋の袴した上臈の、遙かに雲上に彳んで、おなじ扇子を鏡の如く、影を合せてさしまねいたものと見て美女ではないであらう。

それは畫工の前原辰馬が、幼き時故郷の伊勢の町家の隣の小家で、唯一册洪水に流れも失せず殘つたと言ひ／＼、扇折の美女が見せた双紙の中の、一枚繪姿。

上臈の其の手から抜取るやうに、双紙に挾んだなり授けたのが、月日とともに移變つて二十年あまりも過ぎて後、ありしむかしをおもひで草、箱根で辰馬の手に寫されたのが、一度、月下に幻の女の紫の翼に載つて、夜霧にかくれて、瀧を潛つて、濡色の露の常夏の花の根に縋つて、やがて清川博士の夫人、照樹子の袖に拾はれた・・・・・

夢かと思ふ、お伽話を可懷んで、此の七星の扇を肌身に添へた、其の夫人は、仔細あつて、去年の春、花の霞の朧夜に、此の大川とおなじ流れの兩國の松岸から行方知れずに成つたまゝである事を、希くば讀む人の記憶されむことを望む。

月の裏は誰も知らぬ、扇子のおもては七星である。それだけを・・・・・忘れぬまゝに辰馬が寫した。もし其ならば裏を返すと紫陽花が描いてあらう。神の扇か、人の繪か、知らず、お親の膝には七つの星が、白銀の大なる露の如く、紫の萩の面影立つ。

## 十一

「こんれ、林子！　電話、電話。」
と刀自が息忙いたしやがれ聲。
「は、電話、承知いたしましたです。」
「うむ、古澤さん、電話、電話、電話、電話ばい。」
「承知しました、電話、電話、電話、電話ですとも、勿論ですとも。」

前に桔梗染、後に美顔氏、黒澤尻の大刀自を、眞中に、手車めかして廊下に揉出す。

黄なる顔色、眞黒に怒つた婆様の、これが中庭を飛んで見よ。猫が黒雲を捲くのであらう、が、介添が二人で抱へた工合は、戸惑ひをした田舎道者を、花道から引摺下ろす形である。

・・・・・此の以前に、お親のために鼻柱を挫がれて赫と成つて、突立ち上り、あはや掴掛りもし兼ねぬ途端に、二人が座敷から駈着けて手を取り、腰を

押して、引去つた時も、今と略おなじやうな様子であつた。

「扶道なつす！　無念なばい。」

刀自は、身悶をして血聲を紋つて、

「口惜いばい。悴え。」

博士は二つ並べた食卓の眞中に、默つて額を壓へて居た。

「や、これ、御身は何のための博士ぢや、親の恥辱は悴の恥辱ぞ。」

博士も此には弱つたらう。自分に出向いて、あの小女郎取つて壓へよ、國のため、家のために、と云ふのであるから。

「主は婦女に甘いんすの、やの、其の氣ぢやから、嫁奴の照樹も不埒を働いたんすなす。」

と血迷つて疊を叩いたが、聞く、三人は、おもひ〳〵に面を背けたばかりであつた。

たとひ天地が顚倒して、博士が下女に這うても、此の談判には出向かれぬ。

「道理ぢや、むゝ、至極ぢや、此が先生の名譽にかゝはると思うたんば、主出向かされ、主が代人に行かされ、やあ、古澤しやん！」　と切齒の音、炭の刎ねるが如く、ばら／＼古澤に飛火がする。

「は、しかし、それは何ですよ。」

「やれ、此の決着を見ないんば、なす、此處は決して、動かぬぞなす！」

しかし、然したるお茶代も出ないものゝ、恁う成つた上の長座と來ては、お茶屋の迷惑は夥多しい。

美顏氏古澤は色氣があるだけ、前後に氣を兼ね、むずつく事一方ならずで、

「先生、如何でございますか、もう、徐々。」

「さあ、歸らうかね。」

や、此を聞くと、拳を握つて、默然で立上るのを、

林子と古澤が一角力ひ、角力つて留める。

と、今度は煤色の涙を流して、

「なつす！　悴え、私は生れて以來・・・・・」

で、刻苦、辛勞、操立から婦人の鑑、清川家三畝の田地から、源義家、前九年、後三年は馬鈴薯、二宮尊徳、家のため、國のため、悴のためを並べたてゝ、月日の數ほど身體中に皺を刻んだはなつす！

何のためぢや。

手酌で酒をのむ小女郎に罵られようためではない。口が臭い、と言つたと喚き、化猫だ、と言つたと吠え、それだけの苦勞をして、たかゞ婆に成つたのか、と根こそぎ言つたと口惜がり、博士になんぞ成りたくない、と鼻で笑つたと煙管で叩く。

如何に、大刀自、相濟まない事ながら、此の時ばかりは扶道氏をはじめ古澤美顔美顔、恐らく桔梗染に至るまで、世に親を捨つる藪がなく、文字に孝行〳〵と云ふ語のある以上は、清川にも、扶道にも、勿論

博士にも成りたくないと思つたに相違あるまい。

大津屋のお親のために、博士は學者でも杭でも無かつた。

お仲が移す褥に移つて、膳を引かせて、新規の註文、痣鐵を呼ばしたのである。猫の唸るやうな刀白の聾を、向う越に聞きながら、眉も顰めないで澄ましたもの。

「お孃樣。」

お仲が痣鐵を呼びに立つと、入違ひに、女中頭のお継が來て、端近なお親に差寄つて會釋した。

「相濟みません、何とも。」

「否。」

「對手は田舍の人ですから、御勘辨下さいまし・・・・・何しろ、あの通り泣饒舌をして居なさる騷ぎで、困るんでございます。否、手前どもでは些も構はいたしません。あとの御連中なら適い取組みですから打棄つて置きますけど、御一方、旦那樣がお氣の毒で成りません。何とかして、あの婆さん

を宥めて歸さうと思ふんでございますがね、主婦とも相談しますが、外に好い智慧がないのでございます。就きましては、何とも貴女には申譯がございませんが、あの、申兼ねました、貴女が、あの、貴女を氣を違つて入らつしやる方だ、と申して、それで、あの逆立つた白髪頭を萎して見ませうと思ひますんで　ーー　默然で、先方へ然う申せば申すまでの事でございますが、それぢや餘り勿體なうございますから、一生懸命でお耳に入れます。御恩に着ますからお孃樣。」　と世馴れた口も、半ば聲が消えて頻に手を揉む。

お親は晴々とした面色で、

「あゝ、あの私を狂人だつて云ふの。」

「まあ！　否、然うと申す譯ぢや・・・・・」

「可いけど所作は出來ないわ。可厭だ。」

と微笑むが仇氣なし。

「飛んでもない、貴女、唯申しますだけ。」

「結構よ、ほゝゝ、時々言はれるわ、もう馴れつこ。」

「まあ、では、お聞濟。」
「えゝ、澤山。」
「助かります。」　と言ひながら、惚々と視てお繼が立つた。

此の土砂は大に利いた。
「狂人かなす、然うぢやろてや、ふん。」

とに角、一面目立つたので、敲立てた煙管を倒したが、我慢強く、執念深く、執拗く、理屈ぽいのは、朝湯を知らない人種の癖、苟くもぢやなす、二宮尊徳、郡女團、賞牌受領刀自ともあらうずる長者に對して、熱罵冷嘲を恣にした小娘、狂人であらうがなす、然ある狂人を野放しにして天下を往來させると云ふ心得違ひがあるものかなす。電話で呼出せ、親どもに談じて、向後座敷牢へ打籠ませうばい、うゝんや肯かぬ。國家のためぢや、國のためには生命を棄てる、殺されても掛合ふばい。

其處で電話、電話、電話、電話。

「電話、電話、はあ、勿論ですとも電話です。」

美顔氏が腰を壓し、桔梗染が手を取つて、乃ち廊下へどた／＼と大揉みに揉んで出たのであつた。が、美顔氏が帽子を手にし、桔梗染が、洋傘（案ずるにこれは座敷の縁まで持つて入つて居たる也。）を握つた覺悟を見ると、其れなり摺抜けるつもりであらう。

「逆賊。」

「まあ、貴老。」

「御隱居樣。」

痣鐵と斜に並んだお親を見ると、掴んだなりの煙管を揮つて雄猛り立つのを、引抱へる二人の樣子は、蝦蟆が天上しやうとするのを、螻と蚯蚓の留めるが如し。

行掛けにもう一つ、刀自は鰻ぬめりに胴を揉んで伸上つて、

「狂人めが、ふゝん。」　と顋を震つて笑棄てる。

痣鐵が納まらない。
「何を。」
と立身上りにヌイ、と腰を切ると蹌踉とふらつく。
「お止しよ。」
お親が、膝を支いて、すつと姿を浮かしながら、刀自に向つて突立上つた痣鐵の肩先を、のび上るやうに、丁と扇子で叩いたので、どさりと音して、大きな漢は小縁へ尻持。
「御免よ、をぢさん。」
「お難有い事で・・・・・へい。」
チユウと舌打、蜆の椀を、下司にごくりと吸つて又頭を掉つた。
工學博士が其處へ　ーー　一足後れて　ーー　縁へ出て來た。
唯、面を背ける暇もない、顔を隠さうと思つたか、藤鹿の子の襟のはづれ、乳のあたりへ、うつかりと、兩褄を兩の手に指を反らして取つて、一面月の如き扇子を宙に釣るやうにした、膝のすらりとしたお親

と、思はずも目を見合ふ。

お親の此の科は優婉であつた。昔壇の浦の戰に平家が船に立てた扇の的より、一層意味のある風情に見えた。

が、此戰は博士の方が敗北である。

偉なる學者と雖も、本朝の屋の内を歩行くのに、泥靴のまゝでは成らない。其處でモオニング扮裝の博士は、ずぼんの下へ靴足袋である。其の體で扇を胸に、頭の細い、袖の長い、銀襖の前の婀娜な下町の娘に向つて、高い處に突立つて、これからのこ／＼と、歩行かねば成らない圖は、雛壇の前で、（雨の夜に日本近く）　を踊るに齊しい。

地位も、學識も、勲爵も、ーー　岡惚も何にもせず、嫁に成らうとも思はない娘の前には、瓦礫に齊しい。掛けた目金は見る目にも煩いのである。

ーー　「そんな思ひをして漸と博士に成つた

の、ーー　私は果報で、生れる、とすぐ大津屋の娘だよ。」　ーー

清川博士は憮然とした。

座に散つたのを、唯何となく拾つて出た、例の持あつかひ一件の大形の名刺を、思はずびりゝと裂きながら、

「失禮しました・・・・・」

不意に聲を掛けて一揖されて、はつと極り惡さうに其の手で蔽うた眉に扇、支膝したのを忘れたやうに、丁と坐るのが投褄で、袂を清しく疊に敷く。博士は星の影に目を射られた。

去年、松岸の大廣間へ、夫人の照樹が少なからず時後れて、一座が怪疑の雜言の中へ、思ひ掛けない濡れ／＼とした結髪の、悄乎とした姿を見せた。

花の盛の宴の席に、これは散りかゝる柳であつた。

晴がましさうに、なよ／＼として、姑のかげに、宛然斷たれた蔦の如く崩折れると、這哉大刀自、古猫の光る眼で、夫人の結髪をじろりと視めて、白い咽喉を、射窘めるばかり瞳下りに、帶まで、ぐいと睨下ろすと、細骨の其の扇をさした。

「ふア、こんれは、よかお躾みぢや事い。些と貸され。どだい、逆上る。」

で、力なげだつた夫人の手から、指を一本、へし折る如く邪險に扇を抜かせて取つて、みし／＼と開いたが、

「こんれは、はい、まだ酒も飲らぬに強か顔が赤いなす。和女も逆上せたか、うゝ／＼、熱いかいの、熱いかいの、途中を急いで來さつたで。うゝ、うゝ。」　と消入りさうな頤の下を、はた／＼と煽上げた。

其の座から姿を隱した、夫人と同じ星である。

熱と視る、博士の姿は暗く成つた。

もし、それ、式の如き舌猫に、親として事へなければ相濟まない世間なら、女は娘にも嫁にも成らずに、南洋へ飛んで女王と成るがよし、男は、博士も紳士もない、土方に變じて女護の島へ駈落をするに限る。

一時雨繁き、とばちりの飛石へ、刻々に毟り棄てた、粉の名刺を白く棄てゝ、清川はつゝと出た。

## 十二

「一寸」

お親は輕く扇子を疊んで、

「いまの婆さんを知つてるだらう。」

と低聲で言ふ。

「私がですかい！　えい。」

椀を覗いた目を擦つて、朦朧として、痣鐵は帳場を視遣つて、

「へい、然う言や何處かで見たやうでもございまさ。餘り類のねえ三途河でね、あれで薄化粧つてるんだから猫化でございますぜ。前脚で舐めて、塗る奴だ、可恐。」

「奥州出のあんな婆さんの中にや、お襦袢の裾へねえ、紅い切を附着けてるのがあるもんだとさ、そして踊なんか踊るつて。」

「へゝい、成程。」

と仔細らしく首を伸して、

「安達原孤家の婆だの、岡崎の猫なんか、其處を

仕組んで緋の袴を穿かせたもんでございませうね、狂言に嘘はねえんですつてね、へゝい、成程。踊はいづれ手拭を牙で銜へて、顋で投げてチヨンと被る、後脚でおつちよこちよいの、やあとこせえ・・・・・あれなんでございませうね。お嬢様、酷うがすよ。私はこんな、臀へ輪を押付けりや、すぐに大地に轉がります、がた車同様な人足でございますが、可哀相に・・・・・まだあんな猫又を知己にや持ちませんや。」

「否、何時か見たらうと言ふんだわね。あの、兩國の松岸で・・・・・」

「えゝ。」

「あゝ、まだ何にも話を聞ない先だつけ、性急だ。」

お親は一寸胸を叩いて、

「ぢやあ無くつて？・・・・・此のお扇子は其の時の。」

三日月に、細く開いて見せながら、

「言つて聞かしておくんな。何にも仔細はないんだから。唯私聞くだけなの。お前さん、何うして持つてるの。先にからかい、それとも！」

「殿様！」

忽然として痣鐵、胴を据ゑ、兩肱を突張つて、

「殿様と言ひまさ、お奉行様と申上げます、お檢べの濟むまでは、えゝ、殿様。・・・・・縁側へ廻れッて、お聲掛りのあつた時から、私は覺悟をしてるんで、はつ恐入りました。全く相違ござりません。松岸へお供をしました、餘所の奥様のもんなんで・・・・・何とも申譯のねえ事なんで、へい。ーー

ですが。殿様は何うして御存じでございませう。一向合點が參りません。」

「身どもは、其の時・・・・・可厭ね、お前殿様だなんて言つちや　ーー　お父さんに連れられて、御飯を喰べに、あのお茶屋へ行つて居たの。・・・・・來て居た藝妓衆の取次では分らない事があつて茅町の内へ電話を掛けに私が出たのよ。ーー　其の時見たんだわ、式臺にこんなに腰を掛込んでた、

お前さんの其痣を。」

「へ。」

と隱す。

「御免よ。ほゝゝ。」

と、仕方をした鳶ずわりの姿を崩した胸を反らして、花やかに笑ひながら、

「それから、今の婆さんね。其處へ行つた、あの若い方の洋服の人も居たわ。まだ居たでせう、頤鬚だの、八の字髭だの。

ねえ、其處へ、櫛卷に結つた、少し御氣分でも惡いのか知ら、と思ふ、品のいゝ、美しい、すつきりとした奥さんが階子段からお下りなすつたから、餘りお人品な美しさに、私は吃驚して電話の許から見惚れて居たのよ。

ね、そら、然うすると、珍らしいわ、婦の方には。此のお星様を描いた扇子を、恁うやつて、口許へ當てたなりで、皆、がや／＼する中を、式臺へ出なすつたぢやないか。あゝ、お迎が來て、一人だけお歸

んなさるんだらう、ーー　と電話を濟ますと、其處等大變な騷ぎだわ。

座敷へ歸つて、あとで聞いたら、お前さんが、其の奥さんをゆすつたんだつてねえ。」

「強請・・・・・弱りましたな。」

「ねえ、一寸。」

「弱つたな。」

「ほゝゝほゝ。」

「否、笑ひ事ぢやありませんや、眞個の話でございます、今更ら卑怯らしく思召しませうけれど、面こそこんなでも、私あ何も、根からの惡黨でも何でもねえんで、へい。あの時は、ほんの出來心てつた奴で。」

「でも、お前、御祝儀を大層おねだりだ、と云ふぢやないの。」

「五兩・・・・・へい、五圓だけで。何もゆすつたつて程の事も、ございませんやうな次第で、へい。」

「何處から伴をしたの、松岸へ。」

「おいでなすつた、巧いや、殿様、おしらべが。皆申上ツ了ひまさ、神田の錦町からでございますよ。」

「錦町から兩國まで、それで御祝儀が五圓かい、不屈な。ほゝゝゝ。」

と、蓮葉にくの字に成つて。

「あい、お酌。」

「じろりと見た時、おや變だと思ひましたつてものは、暗い處から二人連で、おまけに奥さんの方が、服装にも似合はねえ髪がづツぶり濡れてたんで、此奴あ、尋常事ぢやあるまい、と思ひました。けれども、まだ、そんな強請がましい了簡なんざなかつたんでさ。御藏橋の處で提灯の灯が消えました。其の間に、むら／＼と、こゝん處へ其の惡玉つて奴が、ウスドロで面を擡げましたのを、手軾で引拂いて、無事に松岸まで漕ぎ着けました、と云ふと御大層ですが、直き鼻の前てつた處なんで。

奥方、すつとお通んなすつた。

までは可うがす。お駄賃は先拂ひの、下さるもの

まで、疾に丼に入つてるんで。から車を曳いて歸りや、それで事濟でございましたが、何ですかね、餘り美しい方なんで、そのお伴をした奴が、はい、然やうならぢや、變に何うも、もの足りません。

私の車に、途中から天降んなすつたやうな別嬪の奥さんを、殿様の前ですがね。默つて、すつこ抜きにお茶屋の二階へ持つて行かれて了つたやうで、こんな事あ生れかはつても二度とはあるもんぢやねえ、と思ひますとね、棒杭に手を生した恰好で、其のまゝ楫棒にやつかまれませんや。

濟みませんが、お心附の處をツて、こだはり出したんで。其處あお會席だ。二歩と三貫、仕來りの分だけは、お客に默つてお帳場で心得てくれましたが、そんなこつて歸るんぢやねえ。

五兩、と打つけて、一本殘つた兩ぎりのバットを、仰向けに、片足あげて喫かしたんで、へい。

唯今の奥さんが、萬事御承知だ、お座敷へ通して、

然う云つておくんねえ、か何かで、松岸の玄關を動きますめえ。

女中も此奴あ計ひかねたか、二階へ上つて、蔭で耳打をしたらしうがす。・・・・・跋は惡かつたに違えません。」

（あゝ、丁どそれは、姑が夫人の顎を扇子で煽立てた時であつた。・・・・・）

「成程、あの猫股婆だ。黄色い褌を、殿様の前ですが、ふは／＼階子段を三毛尻尾が下つたやうでさ。お供して下りて來たのは、違えございません、唯今の高襟先生。ならび大名めら。めかづらを掛けたやうに種々〳〵の髯で出て來た。

車夫、と呼んでね。猫股め、不埒だなツす！　明治、大正の御代とあるに、此のゆすりめが、とおいでなすつた。

私あ、痣で、バツトの灰を拂いたね、殿様の前だ

けれども、ーー　駄賃と祝儀は蝦と綢ほど違うツてね、此から、揚胡坐に成つて五兩ぢや易いつて處を、其の　ーー　と云ひますのが、一所に川岸までついて來て、露地の角で内證で下りた男があります。言種が何うですえ。

（お連だけ松岸だ、此方の車は半町ほどさがつて下ろせよ、可いかい。）　てつた寸法でせう。

此がとつこで、私あ首根ツ子を壓へて居る氣だ、默り五兩易うがせう。・・・・・・

賽の目が婆ぞろと出たから、私あ、ぽかんとしましたがね。車夫で不埒がぐツと來た。五兩當前の理屈を、やけに饒舌つたれ、と思ふ處へ、それ、貴女が御覽なすつたと云ふお姿が、ツ、と虹のやうに顯れたんで。

（祝儀を上げよう、戸外へおいで。）

見せたうがしたね、今思ふと、奥さんは足袋跣足。」　ーー

「まあ」　と云ふ、此の阿孃は、何時の間にやら足袋を抜いで、褄に投げた爪尖が雪のやう。

「慌てたね、私あ、バット半分掌で揉んで消す、と、癖に成つた奴で耳へ挟んだ、と御覽じろ、火が殘つたからびんたが火事だ、あゝ熱々と壓へて、横飛びに駈出します。中にね、やあ、奥様、短氣だ、危い奥様と喚いて居ました。

もうね、奥さんは俥の上です。

（私は此からお花見なんです、御心配はありません。のんきなものよ。若い衆急いで　ーー）　ぐい、と取つて楫を上げましたが、露地の入口を見る、と相棒に雇つた俥が其處に、提灯を下に置いて、半被を振つて着直す處で、祝儀の一件、事面倒だと思ひましてね、入つた時と反對に裏から廣小路へ抜けましたつけ。

上ぢや小さな咳拂の聲もしません、　（母衣を下

ろすよ。）　と一度おつしやつた切でがせう。足袋跣足でも何でも、花見だつて言ひなさるから、上野へ行け、と其の見當で駈出しよしたが、驚きましたは、又御藏橋を通つた時で　ーー

柳原かけて淺草橋の、あの通り　ーー　で一寸お氣はつきますまい　ーー　何時歩行いても變に人足の途絶えます、寂寞した處が二ケ所あります。一つが、御藏橋の其の詰の處と、もう一つは、三角の小さな銀杏の樹の有る角の處でさ。

其のね、殿様、お嬢さん　ーー　御藏橋手前だと思ひますと、五六間さきへ立つて、ふら／＼と歩行いて行く婆々が一人あるんです。へい！」

と息をのんで、四邊を〓し、

「可厭に成りますぜ。思ひ出しても不氣味でね、おまけに何です、同じ晩のうちに二度見たんだから忘れません。

白髪を小さな祖母子に結つたね、脊の低い、よぼ

／＼らしい、其の癖で、ぶく／＼と水膨れしたやうなのが、鼠色の巻つけ帶で、ーー　ーー　肩のあたりが、判然と見えましたつけ　ーー　小紋の衣類で、へい、可なり嵩張つた鬱金木綿の風呂敷包を肩にまいて、蒼黒い頸首をぐんなり向う屈みの背形で、柳原の方へ向きましてね、へい。」

お親は猪口を丁と置いた。

「其奴が目に着くと一所でね。えゝ、餘計にぎよつとした、私の頰ぺたに、青い蝙蝠見たいに颯と飛んで、向うへ行く婆々の薄黄色な裾とも思ふ處へ、飜然と落ちたのが・・・・・其の扇。」

「此だね。」

「へい。奥さんが俥から、

（お待ち。）

いや、おつしやるまでもねえ。其處へ扇子が落ちたと見ると、婆が、ひよい、と振向いて見た奴でさ。顔が可厭だの、目が凄いの、何のより、其の振向い

たと云ひますのがね、まるで、人形の首をぐるりと背中へ捻まはしたやうで、肩越に眞正面！」

と痣鐵、むず／＼と首を動かし、

「私あ、足が窘みましたよ。

（提灯を見せておくれ。）

で、奥方は、其の時は藤色の褄をお取んなすつた。氣高うがしたぜ。足袋跣足で、提灯について、する／＼する・・・・・

婆は其切見えねえんで。

奥方も、何も其の事は仰有らねえ。はて見なさるものは、と思ふと、屈ませた私に、提灯を突附けさせて、開いたまゝで俥からお飛ばせなすつた其の扇子の落ちた面を、すつくと立つて、默つて上から覗くやうに見なさるんでね。

帶のあたりの此の頸へ、まだ濡れたまゝの髪の艶が、雫に成つてたまらない好い薫で、ひやり／＼と垂りさうで。拾ひますか、と半間な口も利かれませんや。

（御祝儀を上げる、もつと御代を上げようから、御覽、其の扇子の七つの星の、劍尖の向つて居る方へ、露地でも、町でも。・・・・・・

お前構はず遣つとくれ。）　で、大な紙幣。

唯、殿様、お嬢さん、劍尖の向いてるのが、花の上野ぢやありませんや。海だか、山だか、京、大阪だか、打つかる處は分りませんが、銀座、日此谷、麻布、芝、目黒の方を向いて居ました。

・・・・・郡代を抜けて、宗右衞門町、油町、あすこいらを、ぐる／＼廻りの中は、まだ覺えて居りますがね、足は車で、目が廻る・・・・・何處を何う歩行いたか、よく分つちや居ませんくらゐ。で、何でも貴女、一度は數寄屋橋を日比谷へ渡つて、大手前へかゝつた筈で。

其の、ゆきあたりばつたりに突掛つて、私の足が窘みます都度に、

（もし孰方へ。）　ツて聞くと、其の扇子が默つて頭越しに飜然でね。

（お星様は何方を向いてゐて？、）

へい・・・・・提灯で以て破軍の劍尖を照らすんですがね。二度が三度四五度からは、車の上の奥方は降りなさりもしねえで居て、私が例の天文臺。其の毎、劍尖の指す方へぐるり／＼ぶん廻して、ありやヨなんでございますから、魂が茫と成つて、中頃からは、聲も何も出るんぢやありませんや。

因果車が廻り繞つて、それ、宵の口、供をしました錦町へ出た時は、肝にがつくり胸に應へた。生きるも死ぬるも、此處でこそ　ーー　何か前世の約束事の　ーー　業が滅しるんだと思ひましてね、いや早や我身ながら打てた聲で、　（奥さま。）　と申しますとね、返事よりか前へ翼の青い蝙蝠が、銀色の目を光らして。」

痣鐵は、醉つた目を瞬いて、うつかり聞恍れるお親の花やかな顔に、一重霞でも掛つたらしく見詰め

て饒舌る・・・・・・

「何處のか大な煉瓦塀の下へ落ちて、ふた／＼と二つばかり夜風に煽つた時は、宛然扇子に魂が入つたやうで。

其時の星のさし加減で、これが上野の山ン中へ入ることに成つたんでございます。が、花眞盛りの陽氣だのに、黒門前から寂寞して、夜露の落ちるのが、ぼた／＼と聞えます、人ツ子も居やしません。彼是一時かと思ふ見當でございましたよ。

一寸車を留めさせて、奥方は清水の御堂へ上んなすつた・・・・・成程お花見だ、と思ふ中に、勿體ねえ申分でございますが、はゝあ夜遊びをなすつた辨天様が、お鄰家づから、留守を頼んでお置きなさる此の觀音様へ、（唯今）てツた工合かも知れねえとね、長屋並な事を其の　ー　其の癖。ぱら／＼と散る花が、雪のやうで悚然とする。

考へて見ます處、何、其切り車を曳いて遁出した

つて可かつたんで。お客を置きざりにして駈出した處で、乗逃げと云ふ間違ひはつひぞ交番に無え事でございますが、花明りで、恁う櫻の枝が雪洞を霞ませた中へ、袖だの、裾だの、帶腰だの欄干越に、すら／＼と・・・・・時々恍惚と仰向いて、御覽なさいます、紅でぼかしたやうな、眉毛も見えさうな氣持がすると、先祖代々からの御主の御供で居るやうでね、臭い煙草をふかす氣にも成れませんや。

　些と手間が取れました、今度は最う廻廊で見當をお付けなすつたらしい。・・・・・

（兎に角、山を向うへ出ませう。左の方へ。）

と・・・・・乗りながらの御指揮だ。串戲ぢやありません。清水町へ出て、それから根津へ入りましたぜ。眞夜半のね、お孃さん。」

　鐵は冷えた猪口で一呼吸した。

「・・・根津ですぜ・・・・・谷中から迷つて出た幽靈が、露店を出さうツて言ふ處だ。難場にも何にも。谷だか、峠だか、野原だか、心細いツたらありやしません。廣い通りは霧の中の大川を渡る氣持がするんで。

餘り便りねえもんですから、成りたけ娑婆に近さうな細い道を選つて、門だの、塀だの、兩方へ、はあ／＼息を吹いて曳きましたつけ。

卵塔やら、まばら垣やら、大な溝やら、水溜やら、道端の地藏堂やら、ばら／＼烏見たやうな黒い影に成つて、面へ打付かるんで、目がくらんだと思ふと、例の青い翼の蝙蝠が、飜然でさ。また扇子なんでございます、へい。

唯、今度は例の足袋跣足で、奥方、念入りに車からお下りなさると、清涼劑のやうに、颯と奇楠木ツて奴は可うがす、其の途端だ。

兩方生垣の横町の暗い中から、今其の扇子の落ちた處へ、杖を取つて手許へ掻込むやうにして、急足で、ぶら／＼と泳いで出たものを、まあ、何だとお思ひなさいますえ。

今だからこそ、酒の舌で、平氣でお話をしますものゝね、其の時の心持ツて云ふのをお察しが願ひて

えくらゐな事で、と云つた譯が他ぢや無えんで、先刻・・・・・御藏橋の處へ顯れたのと、おなじ色の婆々です。」

「はあ。」

とお親が前へ出た。

「へい。」

と痣鐵は息を内へ引いて、

「茫乎と鼠の裙で、薄汚れた鬱金の風呂敷包を頸へわがねた正體、同じ晩に二度視たと申したのは、此なんでね。

水を浴びましだやうに悚然として、氣が遠く成ると感じるうち、下りて來なすつた奥方と、軌方の裙だか一所にふら／＼と白く成つて、提灯の灯先をスツ、汐の退くやうに消えましたぜ。

いや、消えたぢや濟まねえ、お孃樣の前でございますがね。何處へ行きなすつたか奥方は其切で。扇子だけ落ちたまんま殘つてたんで、慌てゝ拾ひますと、面くらつて、最うそれ、星のさした方角が分り

ません。

空は眞暗、びよう／＼と犬が鳴く。

車を下ろして踞んだ處が、と云ふと、一方寺院で丁ど其の門を通越した・・・・・塀で隱れて居ますけれども、場末だけに未だ改葬に成らねえ墓場で、尚ほ惡い。一方は、大な溝を前にした長屋が二軒、其の二軒目が枝路に成つて、右の・・・・・・　えゝ思出しても可厭な氣持だ。」

痣鐵は、胴を揉み／＼、

「・・・・・其の婆々が、杖を支いて出た口で、其の片側を區劃つて立つた、又高々／＼とした板塀が、これが角地面を廣々／＼と取つた大な邸で、暗闇の奈落へどしんと蓋をしたやうな大な棟が、宛然山でさ。呀、また場所もあらうに、此方側の寺に續いた森の中の一軒家、と云ふのがい一軒家の森なんで。其の渺々／＼としたことは、向う町から裏通りを掛けて、これも角地面が雜と五千坪、此方人等夥間中ぢや、たゞ根津の五千坪と言ふと分ります。松だの、杉だの、

檜だの充滿の森でございましてな。恁う見た處は眞中に五重之塔の突尖でも顯れさうに見えますが、思ひも寄らず、樹の葉の落ちた時や、風の吹廻し、何うかするとお天氣工合で、雪の積つた屋根が見えたり、花の咲いた窓が出たり、小鳥の留まつた欄干が顯れたり、なんぞします。廻縁の粹づくりな二階家でございますが、樹林の底に沈んで土塀も門も蜘蛛の巣と蔦で八重搦み、三味線草で嚔をしながら密と覗くと、築山の崩れた庭の古池が、のた／＼した草の中に大波を打つて、潰れた石燈籠の笠の上に、河童が鼻毛を抜いて居ると云ふ、豫て、物凄いのでございまして。

或其の美いお妾が住んだ家で、二十とかで若死をしました。いまはの時に、何代の後も他手に渡さず、こゝを墓だと思つて、其のまゝに置いて欲しい。旦那が、諾と、引受けたツて因縁で、十四五年以來立ぐされの空屋で居ます。廣さは廣し五千坪、空地で無しに、いはく附だけに、晝間通つても妙に寂しい可厭な處で、内々ぢや其のお妾の死骸が埋つてるかも知れないと言ひますがね。

お向うの邸が、これが夫れ、同じく空屋同然、と言つて何うして、仲働も、腰元も、振袖、詰袖、竪矢の字で、づらりと齊眉いて居ようと云ふ、現に姫様が一方おいでなんでございます・・・・・高い聲ぢや申されませんが、此が尋常事でございませんぜ。十七の時お持ちなすつたお婿様が、お盞の當時、もの丶一月と經たないうちから、今以つて行方知れずと云ふ手輕くねえんでございましてねえ。

伯爵とか侯爵とか云ふ、大した御方で・・・・・丁稚の抜參りや、羅宇屋の爺さんが神隠しに逢つだのとは事が違ひます・・・・・今の世に、幾人とか指を折つて數へようと云ふ若殿が、日本中は愚か世界まで捜して行方が分らず。靴も帽子も、記念一品ない、不思議とも何とも　ーー　それがために、高髷のお裲襠からすぐに後家に成つて一人でお邸においでなさる。これが又目も潰れさうにお美しいんだと云ふんですが、御身分柄なり、お身の上なり、門へ戸端出もなさらねえで、出入の者も、つひぞ御本尊を拝んだ事は無えさうでございまして、・・・・・何しろ、魔が魅したに違えねえ。高い棟だから、此

處を根津のお天守、お天守と云ひましてね、氣の弱い野郎は、お辭儀をして通ります。

これがお妾の墓の五千坪と向合つて、凄いの、陰氣の、美しいの氣に成るのツて、眞晝間だつて、冷い水のやうなものが、花だか橘だか怪い薫で、暗い森の中、寂しい屋の棟を流れて居ます。

こゝ二軒ならまだしもでさ。お天守について廻つて、前町の質屋と云ふのが又いつかの吉原燒の時、縁續きの女郎屋が遊女を連れて遁げ込んだものですがね。其の遊女が一人、夜中に水が飲みたく成つて、張出しの墓所へ出て水瓶の蓋を開けると、水の中へ眞白な女の顔、島田の縺れたのが歴々〳〵と映る。が、先づは仔細なし、自分の影、で心が濟んで、寢床へ歸つてから、フト氣がついた。ーー

いづれ伊勢屋の事なんで、燈なしの眞暗な處で、水であらうが、かゞみであらうが、何うして影が映つたらうと思ふと、遊女がさあ氣に成る。

氣味が惡くて堪らないので、抱合つて一所に寢て居た、仲よしの妹女郎を擦つて、きゝなんしとか、見なましとか云ふと、何うです・・・・此方も眠つちや居なかつた。姉さん、お前さんが起きて水を飲みに行きなすつた、廊下づたひの歸りがけの姿がこゝへ映つてよく見える。私は寢返もしないで今まで熟と視て居ました。それ其處に、と云ふ枕許の壁に、立姿、島田のもつれた女の顔。此の部屋が又眞暗なんで、兩人ぶる／＼と絲に成つてしがみついて、其ツ切煩ひついて、姉は亡くなる、妹は氣抜けのやうに成つて了ふ。これがために女郎屋は分散、それから、けちがついて質屋も退轉、居抜きで空屋に成りました。

お孃さんの前でございますがね。

然うかと思ふと、お妾五千坪の地尻の方にや、一寸小綺麗な雜貨店の、婀娜な評判の嫁さんが、姑にいびり出されて、實家へ歸るとそれから氣が違つて、毎日のやうに、其の雜貨店へ通つて來て・・・・・内へ上りやしねえんで・・・・・店頭へたゞ腰を掛けて居て、商賣ものゝ卷莨を箱から抜いちや、一

本々々火を點けて表を通りかゝる者に、ボンと投げては、派手な長襦袢で、莞爾々々と笑ふ。」

「まあ。」

「此奴を、それ聞傳へて、見物に行き／＼するんで、私も自然と、根津の其の邊の地理に明るいわけで・・・・・何もあの近所が私の長屋つて譯ぢやございませんのでね。へい。店番をして居る亭主どのが、無くなるとは、一つ／＼、煙草の箱を出して渡します。何でも、それさへさせて置けば優柔い、でねえと可哀相に手足の折れるほど狂うてえんで、入費は實家持だと言ひますぜ。

佳い婦で、第一抜けるほど色が白い、だらしなく袖口の緋縮緬で火を點けてボキでせう。拾ひましたぜ。こいつの火が消えねえで、其のまゝ吸へると、縁結びに成るんだつて、娘つ子まで騒ぎます。拾ひましたぜ私も、へい。處が、見惚れて居て、つい消しました。お孃様の前でございますが。」

お親は手酌で。

「馬鹿だねえ。」

「然うかと思ひますとね、件の雜貸店の軒並びに、醫師の家が有るんですがね、其處で出戻りの娘が居ります。此は小兒が一人あるのに女の方から追出たんで、些と見當が違ひますけれども、其の先の亭主だと云ふ、眦の下つた、髯のシヨボンと生えたハイカラで、豪い學者だと云ふんですが、學校へ教へに出た歸途には、大廻りに其の醫師の門まで出向いて來て、洋服の片手に杖、片手に折革鞄を抱へたなりで、一度のそ／＼と通つて、二度めに大跨に足蹈して、三度めにギクりと、杭を廻したやうに、もと來た駒込の方へ引返すのがお極りだと言ふのがあります。やがて二年も續いて。ーー

離れては居ても、變な其の地面の土にかぶれたと見えるんでね、・・・・・かぶれたと言へば、別に怪いと言ふわけぢやありませんけれども、其處の寺院の墓地と背合せに、干場の廣いのを持つた紺屋がありますがね、二十三を頭に十六まで、まるで年子かと思ふ粒選りの娘が五人の姉妹。尤りも母親と

云ふのが名代の容色、皆が別嬪で、それが一人もまだ縁附きません。牡丹、芍薬、百合、菖蒲だ。脊の立つたのは海棠ですかい。衣類も帶も順に揃つて、おんなじ紅絹の糠袋で、ずらりと湯に出掛ける様子なんざ、これ尋常事と思はれますかい。日髪日風呂で、いや、艶麗なの何のぢやねえ。

評判な内福で、父親どのが、又何の道樂もない、たゞ此の娘たちを夕飯の膳のまはりへぐるりと並べて、一杯飲酒。根津中の羨まれものなんです。が、友染切のおくみ先を張つたやうに、脊たけが順に揃つたゞけでも唯綺麗だでは濟みますまい、天上からか、海からか、生れかはつたとしか思はれませんや。

いや、話は枝だ。

樹林が目の前に、御天守と五千坪、世間離れた二ケ國だ・・・・・扇子の星の劍尖とは言ひながら、こりや飛んだ處へ曳込んだ、と思ひますと、車を下ろして居ます卵塔前の、此の、其の寺と云ふのが、

又容易なわけのもんぢやねえんで。・・・・・澤山以前でもある事か、つい去年夏、賽錢をごまかして此の寺を追出された納所坊主の若い奴が、其を怨恨に、叔母に當る和尚の妾と和尚を殺して、小塚の女郎屋でつかまつて、すぐに御年貢を納めましたが、納所が殺しに入る時、枝を傳つて寝込を窺つたと云ひます土塀の百日紅の樹に怨念が殘つて、蛇が三疋。」

「蛇が三疋。」
「大小三條。」
「まあ、可厭だ。」

「どれが和尚だか、納所だか、交る／／枝から首を出して塀越しに、何のためか知りませんが、逆怨に外の方を視て居るつて評判の・・・・・其奴が頸筋の上でがせう。

枝の白いのが提灯の茫とした火の影で、畝つた奴の腹に見えて、幾筋のたつてるか分りません。わツと云ふと、車を打棄つて、私あ、投飛ばされたやう

に宙を舞つて遁げました。

眞個夢中でさ。

藍染川の溝泥に、血を流したやうで居る茶飯の行燈へ飛び込んで、引かけても、飲つても、からツきし水のやう、胴震ひが留りません。

五合とたてつけて、漸と口が利けた處で、毛布にくるまつて、とろけた達磨のやうに成つてます、橋詰の夜なし車に仕事を頼むと、五千坪と聞いた以上、一人ぢやあ可厭だと云ふ。仕方がありません、車夫を二人頼んで抛放しの空車を引戻しに遣つたんで。

宵に錦町を曳出してから、漸とまあ、落着いて、醤油樽にげんなりと腰を掛込んで、ほつと呼吸をつくと、何と、氣に成ります、茶飯屋の顔色が、一件の婆々の顔で、黄色い風呂敷に見えるのは、花の彌生と云ふのに、親仁め、紋羽の襟巻をして居やあがる。・・・・・・

川縁のお極りの柳からは、惡くじと／＼と夜露が垂りまさ・・・・・夜も更けました・・・・・其奴

が、ねば／／として泥の雨でも降りさうなんで、行燈までが薄汚れて黄色うがす。

でも僥倖と、親仁の雁首がぐるりと背後むきに成つて、ニヤリもしねえで助かり。

漸と底を入れる人心地が着いて、茶飯を誂へる段に成ると、さて人間は慾張つたものでございます、先刻頂戴の大な紙幣だが、木の葉に成りやしねえか知らと、四邊へ氣を配りながら、丼へ手を突込むと、角が切れてヒヤリと來た・・・・・麝香とも香水とも、たとへやうのねえのが芬として、勿體ねえが、あの、端麗な奥方の扱帶の端へでも觸りましたやうな心持でございましてね。へい。

お孃様の前でございますが。

其時に、氣が付きますと、扇を拾つて突込んで居りましたんで、暗夜へ月が出だやうな、何だか、尊い、難有い、嬉い氣がして開けました。

柳が綺麗に、藍染川の流も、さら／／と澄んで流

れる音がして、星の影が光りましてね・・・・・」

ーー　あゝ、前原に、辰馬にこれを聞かせたい。渠は去年隅田川に朧夜の汐のさす時、照樹夫人を失つて以來、生くるともなく死すともなく、晝は現、夜は夢の、心も幻の世に流轉ひつゝあるのであるから。ーー

「星あかりとも思ふ明るい扇の面＞に、恁う、其の五色の、何とも云へない美しい、細い絲のやうな物が、ちら／＼とついて居ましてね。」

ーー　おなじ眞綿の纖毫は、夫人に分れた大川端の畫工の手にも認められた。ーー

「中でも紫の色が、めしてた奥方が乘うつツて居なさるやうに見えましたんで、恁う、視めて居ますうちに、其處等、ほんのりとして、柳も霞んで、何處かで鶯でも鳴きさうな氣に成りましたつけ。・・・・・

いや、何うして、さき様は足袋跣足だ。

冥加ねえわけですが、こんな人間の鋸屑見たいな野郎にや、張合が無くて罰も當るめえと氣休めに、まあ然う思つてね、醉は出るし、鷄は唄ふし、獨で春めいて來ましたぜ。

處へ、カラ／＼と饒舌りながら、空車を曳いて、奴どもは戻つて來ました。

から、何やら彼やらで、足腰も利かねえんで、何うです、其の若い衆の一人に曳かせて、手前車で高い處を宙乘りするやうな氣で、淺草まで歸りましたが、夜が明けますと、矢張り何うも、天道様が可恐え。

五兩ゆすつたばつかりに、飛んだことに成つたと思ひましてね。何處かでお目に掛つたら、其の時勝負に扇を返して、お詫をしやうと、まあ其の了簡で、こんな人間でございますが、稼ぎに出ます毎にや忘れずに持つて歩行いて居りますんで。

ーー　まあね、然う云つた次第なんでございますがね。

其の附いてました綺麗な絲は、段々に、何時となく見えませんでございますよ。しかし氣の所為か知れませんが、五色の中でも藤色の紫の細い微なのは、其の奥方のめしものが幽に脈を打つやうに・・・・・もしまだ、心持殘つて居るかも分りません。ーーお孃様・・・・・殿様えはゝゝはゝ、もしお奉行様。」

と乘出して、緑からぐいと首を伸ばして　ーー右手にうけて熟と視て我を忘れたやうで居る、お親の扇に、横顔の痣をさし寄せながら、ふと其の左手にうけて唇に當てつゝあつた、滿月の蝕したるが如き、大杯に一驚を吃して叫んだ。

「呀、椀の蓋で、途方もねえ。」

唯瞳も返さず、輕く投げるが如く膳に落した、蒔繪の實の南天の紅は、意氣に煙つて紫に燃えた。

其の手は、雪を欺きつゝ、扇の紺青にも射返されず、瞼は颯と紅を潮した。

「あゝ、北斗の劍が、丁ど今、彼處に向ふ。・・・・・」

眉をあげると園生の薄月。

「私も、此の星の指す處へ行かう。」

と、すらりと立つと、袖は輕く、褄はしつとり、芙蓉の醉。

雨の霽間の薄霧に、更紗のやうな花を重ねて、秋草の影こそ靡け。

「あら、あの向うの垣根の外に、婆さんが一人覗いて居るわ。」

「わッ。」　と云ふと、縁の端をずるりと、辷つて、痣鐵はべたりと早腰。

「自動車が參りました。」

「お嬢様、お宅様からお迎でございます。」

お繼が引添ひ、今度は更めて女房が、頸の手拭を

はづして出た。

「何うして？」

「否、先刻の御隠居の何ぢやございません。お連れ遊ばしたお供はこんなに醉つて居りますし、夜分には成ります。かた／＼一寸電話をお掛け申したのでございます。」

と、女房が揉手で云ふ。

其處へ眉を剃つた小さな圓髷の年配なのが、整然とした形で出たのは乳母で、

「此は皆様お世話様でございます。おや、お親様、御機嫌で。」　と莞爾やかに顔を見る。

「御機嫌ぢやないわ。何だつて迎になんぞ・・・・・迎ひと云ふのば人間の催促だわ。和女に借金が有るやうだわ。」

「まあ、聞いて下さいまし、誰方も、あんな憎らしい事をおつしやるんでございますよ。ほゝゝ、・

・・・・お迎ひではございません、乳母もお相伴に参つたのでございます。」

「何しろ、お上りなさいましな。」　と、お繼が言ふのだが、お親は縁に立つて此の寄手を一人で遮るやうに屹として居るのである。

「何、最う私歸るんだよ。」

「では直ぐお供をいたしますから。」

「一人かい、乳母。」

「長松どんが參つて居ります。」

「丁どいゝわ。あの兒は、そんな事はうまいからね、然う云つて手傳はせてね、向うの庭の生垣を、私の身體の出られるだけ、一小間竹を抜かせて頂戴。」

「えゝ。」　と云つたが、傍の者ほど、乳母はさして驚かなかつた。

「あとでね、此のうちへお詫をして。それから車夫さんに澤山お金を上げておくれ。此のお扇子を私

が譲つて貰つたから。」

「代、お代どころぢやありません、私は荷が抜けますんで。」　と言ひながら痣鐵は目ばかり、きよろつく。

「お親様、貴女はそして・・・・・」

「あゝ田圃でも、畦でも、川が有れば船に乗るし、船が無ければ筏を組むし、ねえお前、思ふ人に添へないんだもの、此のくらゐの我儘をしなくつちや・・・・・」

「何でございます！」

と、乳母は一寸左右を視つゝ、

「お身體を何うなさいます。」

「私のやうな、身體も心も清い處女は、惜いから、怪我なんかおさせなさりやしない、氏神様がお守りだもの。」

と袖をかへして扇を胸へ。星清の飛火、來つて、七首の如く阿孃の腕に刺青して、燦爛として輝く時、

秋(あき)の草(くさ)は離々(りゝ)として、夜(よる)の虹(にじ)を敷(し)いたのである。

## 十三

星の輝く夜であつた。

「此の殘暑の激しさは何と云ふ事でせう。」

「聊か天變の部に屬しますかな。」

宵には小兒が焚いたらう、南京花火の煙硝の臭の籠る、小溝を境に、軒並び、向う同士が、納涼臺で三四人、やゝ更けたから大人ばかり。

椅子を持出して居るのもあれば、踏臺を計略して、張物板を渡したのもある。

「朝虹が立つても天變だと、老人は騒ぐと言ひます、況やですよ。」　と一名、郵便局員が、椅子をばた／＼と藪蚊を煽ぐ、

「旦那、しかし、其の光りものと言ふのは實際見えるんでございますか。」　と、浴衣の糊の突張つた、角刈の男は仕立屋で、地に踞んで腕組をして云つた。

仰向けに天を仰いで、瞑々として居た生命保險取次の事務員は、頭を抱へた兩手を解くと、居直すはずみに凸凹地面、ぐらりと揺れる椅子の腰を、ぎしりと直して、

「確です、生命保險だ。いや、醉つて串戯を云ふんぢやありませんな。はじまりは一昨晩、見た人が確だ。名も金剛さん、其家の謠の先生だ。・・・・・遲うごすなお歸りが。今夜は早く歸つて、一所に見ようつて約束だつけ。」

「然やうさ。」

と局員が髯を捻る。

「御指南番が居なさらないぢや見當が付かなくはありませんか。」　と仕立屋が四角に立つて、銀河をづツと見渡す。

「大丈夫、其處が光りものです。昨夜なんざ稲妻がさしたやうに、こゝ等が―〓＞ばつ≫と明く成つたと言ふくらゐですからな。こりや金剛さんの御新

造が見なすつだんだし、・・・・・大崎さん、貴方の奥さんも御覽なすつた。」

「然やう。」

「ね、私の家内も舍弟も見ました。皆ね、金剛さんが見なすつたと言ふ、初晩で氣を持つた昨夜なんでね、角の煙草屋のお婆さんが横町の湯屋で話をしたつてんで、女湯から、ぞろ／＼ついて、出て來たんだつてね。私は留守にして惜しかつた。」

「其奴は堪らねえ。」

「可厭なお人だ。地震ぢやあるまいし、湯屋からだつて皆衣ものを着て居ます。」

「はゝゝゝ、喜太郎さん、其奴は嘘ですよ。しかし實際家内は見ました。」

「難有い、ぢやあ確だ。」

「確實は分ツてるぢやありませんか。しかもね、大崎さんの奥さんは昨夜はじめてぢやない、先から御存じなんださうですよ。此の土地ぢやないけれどね、お國では飛星と言ふんだつてね。」

局員が煙草を投出し、未點。

「格外に暑氣の激しい年に限つたものださうでしてな。極陽の氣が夜陰に燃えるとでも言ふのでせう・・・・・」

「お點けなさいまし。（まツちを摺つて出しながら）見たいなあ、どんな形のものでせう。」

「薄の根に、おもひ草と言ふのが生えませう、まあ、あれの大いんですね。」

と、事務員の細君が框に出て、格子を覗いた。

「奥さん、おもひ草は嬉しうがすな、星が思ひに燃えるんでせう。」

「ね、可いでせう、おもひ草。」

「引込んでおいで、お前なんか思ひ草と言つた柄ぢやない、わらびか、ぜんまいで澤山だ。」

と事務員は嘲笑つて、

「否ね、其の光り物を舎弟の奴見立てが可いんで・・・・・銀煙管の轆轤首は何うですえ・・・・・

ずつと出て、ふら／／と光る工合かね。」

「仕立屋さん、そりや氣味の惡いもんですよ。尾を曳いて、いびつ形の圓い頭で、音も何にもしないで、眞白に光つてね、あツと思ふと尾花が散るやうに消えるんですがね、流れ星とは反對に、何處に根があるつて事もなしに、すツと天へ昇るんですもの。白い大な蛇が突立つたやうにも見えますわ・・・・・昨夜は丁ど九段の上と思ふ處から、然うね、安藤坂の方れました。」　と、細君が云ふ。

「處で、其の飛星とか云ふ、光り物につきまして、御町内は何う云ふ事に成りますんで。」　と仕立屋が云つた。

「妙だね、お祭禮ぢやあるまいし、町内が何も附合と云ふわけも。」

と事務員が云ふのに被せて、

「ですが、恁うして光るのを待つて居れば、言はゞ附合ふと云つた勘定に成りますな。」

「天變に交際ですかい。」

「可厭ですね、氣味の惡い。」　と口に淺黄の團扇を當てつゝ、折から戸口に立つた白地がある。

「や、金剛さんの御新造、お歸りをお待兼で、立待の御寸法。」　と事務員が手を擧げた。

「待つのは涼しい風ばかり、醉つて歸られちや、尚ほ暑うござんす。」

「御意・・・・・で、今晩の方角は。」

「さあ、昨夜は九段の方でしたがね、一昨夜、主人が見ました時は電車通りへ突當りの町家の屋根裏へ立ちましたつて、見當は、あの丁ど清水谷かと思ふあたり。ですから公園の納涼に花火を揚げたのが出來損なつたのか知ら、と思ひましたさうですよ。青くも赤くも開かないで、それなり消えましたものですからね。」

「否、一手前〈てまへ〉伺ひますのは、御主人のお出先で？」

「えゝ、近所です、紀尾井町の松澤さんと云ふお醫師樣。」

ーー　それは清川の縁家なる博士である。ーー

「御新造さん、何か涼いお土産でも頂きたいものですわね・・・・・何とか恁う、あのくらゐな名高いお醫者なら、人間の暑くないお藥でも發明をして下さると可いと思ひますよ、染々今年は驚きました。」

と事務員の細君も格子戸を開けて出た。

「ねえ、奥さん、御覽なさい、最う十一時近いのに、あの銀杏の葉がそよりともしないんですもの。」

近く其處に、番町名代の大銀杏が、一團雲の峰の黒きが如く、星を貫いて聳えで見える。

「でも、何となく、恁う、ぐわうと云ふやうな音がしますね、樹も此の位なのに成ると、呼吸をするものと見えます。」

と局員は又蚊を拂ふ。

仕立屋がとぼけた聲で、

「鼾です。」
「え。」　と誰かゞ訊いた聲。
「蟒でも天狗様でもありません、あの何千羽とも數の知れません椋鳥　ーー　近來鑑定は極りましたよ　ーー　連中が泊まり込んで居ますからな。」
「はゝあ、椋鳥は鼾を掻くもんですかな。」
「大崎さん、眞面目に聞いては不可ませんぜ。」

「否、鼾と云ふと法螺・・・・・はゝゝ、何だか山伏が獨言を云ふやうですがな。あの夥多しい數が寝てゐるんですから、おのづから恁う寝息が籠るんだらうつて考へなんで。何しろ、御存じの通り、晩方、一伸しに伸して來る時なんざ、忽ち夕立かと思ひますぜ。不意に針を持つた手許が見えなくなるつて騒ぎだ、町の空は羽撃きの黒雲で。」

「眞個ですね。」　と女たち齊しく云ふ。

「一度にどつとだ、早い話が、枝につかまります時と云ふと、さしもの大木が、ぐツらぐらとな。」

仕立屋さんは團子を取つて捏返すやうな手振なり。

「何て事でせう、まあ、手前も御近所にや十年の上も御厄介に成りますが、つひぞ今年ぐらゐ鳥の集つた事つて覺えませんよ。」

「仕立屋さん。」

と寄居蟲の如く、事務員は椅子を腰にしたまゝ乘つて出て、

「で、此の事につきましては、お互に御町内、何う云ふ事に成りますんで？」

「え・・・・・（と考へ）　不可え、旦那。」

一同は聲を合せて笑つた。

「一體、何處を、あの鳥の大群は往來をして居ませうな。」　と大崎が問うて言ふ。

「牛込の、出羽様の中の大榎へも集るさうです。飛んで、小石川大塚の火藥庫裏の銀杏樹、上野の森にも群がるツてことですよ。」

「上野へ出りや大海でさ。ーー　狭い町内だから。」
「何う云ふ事に成りますんで？」
一同は又笑つた。
事務員が改めて、
「星だ、鳥だと、恁う數へると、煙草屋の奥を借りて居る、あの畫工とか云ふ、」
「前原さん。」　ーー　仕立屋が知つて居た。
「矢張り七不思議に數へなけりやなりませんな。」

## 十四

「先達て伺ひました、あの晩の事なんです。」

金剛倫之助　ー　能の師匠が、或日、紀尾井坂の邸に松澤博士を訪ねたのである。

博士は老來、謠曲を嗜んで、斯の名家に就いて熱心に學ぶ處、今日は毎月の定めの稽古日ではなく、夜に入つてから倫之助が殊更に刺を通じたのであつた。が、恁した客なれば、豫て設けの應接室ではなしに、書齋を兼ねた博士の居間で。

「あの晩は御存じの通り、御當家で頂戴して大分醉つて居りました。壮い身そらで、眞に不體裁ではありますが、歸途の電車の中で、うと／＼して、下りる筈の停留場を念入りに三帳場ばかり乗越したものですから、又乗直しますのも面倒で、それからぷら／＼、夜露で冷しながら、快い心持で、歩行くのか練るのか分らないで歸りましたものですから、例刻より大分遅れて、町内へ入りました頃は、彼これ一時近くだつたらうと思ひます。

が、暑い時節で、寂しいとも思ひません。尤も邸町で、近所は勤人ばかりですから、此の陽氣で寝られないと云つた處で、十時を過ぎれば皆靜まつて了ひます。寂とした町の中に、いつも、其の上ばかりは雲が掛りさうに思はれます、森のやうな銀杏の大木があるんです。」

「有名な大銀杏。」

と、博士は虎の髯を空ざまに、嘯くが如く片手を擧げた。

「射るやうに、星は晃々としましても、樹の下は暗いのです。が、雨を凌ぐと云ふ次第ではなしに、何となく此が町内一統の屋根とも垣根とも思ふ頼もしい氣がします。葉の枯れた時も、紫の霞を被ぎ、緑の霧を籠めて、美しい帳に見えます。分けて下やみほどに繁つた折から、眠つた町の柔い衾、涼しい冷い爽かな天然の蚊帳です、城とも砦とも思ふ、此の名樹に對して、お辭儀もをかしいものですから、何時も下を通る時は、立留まつて、仰いで見て、一寸敬意を表します。」

「はゝあ。」

「不斷、どんな夜更でも、如何なる場合にも、然うした覺えは嘗てありませんでしたのに、其の晩に限つて、一息、樹の下へ立つたと思ふと、総毛立つて悚然としました。

見ますと、貴方、また其の暗い處が黒塀に成つて居るんです。・・・・・其の塀の上に、一體緋の袴・・・・・」

博士は聞きつゝ、輕く腕を拱いた。

「それも黒ずんで、星明りに笹色に底光りがすると想ふのを穿いて・・・・・袿をした、下髪の、顔の色が玉のやうに艶々〳〵と、細眉の氣高い、眦のきりゝ切れた、細面の、やがて小造りな人だけぐらゐはあらうと云ふ人形が一體載つて居ました。」

「人形ですか。」

倫之助は僅に微笑を洩らしながら、

「人形でなかつた日には大變です。少くとも貴方に、お話は出來ません、お恥かしくつて。」

「いや、然う云ふこともないですよ。はあ、それで。」

「肩の下と胸へ、恁う白い手を受けた處が、長柄の銚子か、それとも管絃の太鼓の撥か、でなければ扇でも持つて居たのか、とれたか落ちたか、と思ふ、餘程年數の經ちましたもので、又それだけに、宛然、活きたものゝやうです。あの、富士の人穴の奥を極めて、大きな流の向うに彳んだと云ふ姿、月山の琴彈谷、千枚岩の裏に經机に凭れて眠つて居た、と云ふのを髣髴で、私は、貴方、頭から、冷く成つたまんま、暫時夢を見るやうに立つて視めました。

銀杏の梢の、さら／＼と鳴るのが、大川の水の夜陰に流るゝ音にも紛へば、曠野を吹く風、深山の谷へ落込む瀧の音にも聞えましてね、・・・・・魂は其の人形より高い處、銀杏の樹へふら／＼と釣り上げられたやうでした。

唯、人形と見てさへ然うです。此が何かの間違ひ

で、慌てゝ、ものゝ姿の幻影とでも思つたんぢや、私なんざ紋着に袴を着けた恰好で、八九軒前の自分の家まで、もんどりを打つて投出されなけりや成らなかつたんですよ。」

倫之助は苦笑の片頬を、淺く掌で壓へつゝ、

「一目見て、すぐに人形だと氣が付きましたには、一寸然るべき所説があります。私は家業がら、隨分あちこちへ參りますが、今年の春、左やう昨年の暮頃からでせうか、邸の門内、町家の露地などへ入つて來て。

ーー　お人形さんの壞れましたの　ーー

ーー　壞れた人形を買はう　ーー

ーー　と云ふ。・・・・・それが、貴方、風呂敷包を背負つた婆さんもあれば、籠を提げた美しい娘もあると言ひます。讓ると成れば、金錢に絲目は付けない、いくらにでも買つて行く。尤も、壞れた人形にさした價値もありますまいが。又望みとあれば、繕ひもし、脩復もしやうと云ふ・・・・・其の料金は些とも取らない。かはりには、受取りと云ふものを決して書かない。從つて、預つて行くのに町所を

明しません。詰り、何處に其の仕事をする細工場があるか分らない、と、云ふ次第なんです。

此が事實ならば眞個結構、それも雛、人形には限らない。犬でも猫でも、いきものゝ形をしたものなら、玩具の類凡て引受けようと云ふのださうです。

手や足の折れたの、耳鼻の缺けたの、腹からぼろ〳〵と蟲の粉の溢れるのやら、中でも激しいは、土細工の姉さまの、結綿に緋手柄と云ふ首が、つけもとから、ころりと落ちて、落ちたとも言はないで、白粉に、口紅、で、莞爾して、手足が白々と、身體の別に成つたのなんぞがよく有るものです。

燒くのも氣に成る、流しても消えず、泥のなんぞは、沈めても水の底に、眉も目もそのまんまで、何十年も居さうでならない、と云つた向には、然うした企圖は、實際、救世主と云つても可いわけだ・・・・・と・・・・・

それが、念頭に有りましたものでせう、咄嗟に緋

の袴を見て、あゝ人形だ、と思ひました・・・・・中に繋る縁はなし、ぢや、何のために銀杏の下の黒坪の上に載せてあつた、と言はれると成ると、其の筋道は分りません。が、何を思ふ隙もなしに前申しました人形と云ふだけは分つたのです。

處が、あとで分りますと、別に不思議は無いのでした。

と云ふものは、此の緋の袴の人形と云ふのは、銀杏の樹邸のものなんです。・・・・・古くから家に傳つて居たのでは無いのださうです。或人が、伊勢へ參つて、桑名の細い町の古道具の店で見出したのが餘り出來がいゝので、ふと値を聞くと案外易い。雖然、身輕な旅だつたから汽車の中でも荷に成ると思つて、其のまゝにして、しかし道具屋の名は覺えて歸つたのを、豫て懇意な、私の町内の、右のですね・・・・・銀杏の樹邸の、宮内省へ勤めます主人に話をすると、然う言つた古物を大好事で集めて居るので、早速伊勢の方へ紹介して、手もなく取寄せたのが、其の緋の袴なんですが。

凄いと言ふのです・・・・・家中。

床の間に据ゑても、書棚に載せても、其處だけ陰が出來て、薄暗い中に、緋の袴の姿が浮く。

薄ら青い面影で・・・・・

不思議な事には、座敷に飼つてある狆が、うゝ、と吠掛らうとしては、耳を臥せて後退りで窘むんださうです。

些と大袈裟かと思ひますけれども、まあ、話がね。こゝに・・・・・」

倫之助は、使つた扇子を疊んで、

「其の邸に、九官鳥が一羽居ますんです。」

「はゝあ。」

と博士は膝を進める。

「眞晝間の寂寞とした時なんぞ、うつかり通りかゝりに、鼻にかゝつた甘ツたるい聲で、唐突に　ーー（今日は。）　ーー　なんて遣られますと、樹の上に天狗でも居さうに思はれます。

尤も、（お竹さん）や、鶯のほうほけきよは、近所でも聞馴れて居るんですが、幾通りか、其の九官鳥の藝當の有ります中に、時々獨言のやうに、口の裡で小さな聲で、

（煩いよ。）と云ふのと、それから、優しい、柔かな、しかし、何となく底の有る聲で、

（ほゝほゝ。）と思出したやうに、ひとり笑ひをする・・・・其の聲と云ふのが、天井からともなく、縁の下からともなく、物置の隅からともなく、妙に響いて、をかしく不氣味だ、と其の何です、飼つて居ます銀杏邸の人たちも、然う言ひ／＼して。又其家ぢや、女中だけ町の湯へ行くんださうです。處が、湯の中で、巫山戯た女中が、其の九官鳥の笑ひ聲の眞似をすると、蛇でも鳴くやうに女湯ぢや裸體で騒いで、眞白いのが、片隅へかさなり會ふツて云ふ評判だつたんです。

貴方・・・・・一時其の緋の袴に、邸の内君の手が觸つたのを機會に、

（煩いよ。）

如何です。」

「成程。・・・・・」

「それからの騒動で、長持の中へ、密と納めて、内君が電燈を紐ぐるみ差付けて、主人が蓋をしやうとする途端に、

（ほゝほゝ。）　と遣りました・・・・・」

「遣つた、成程。」

「それなり、蓋も出來ないで、其の晩は客蒲團の新しいのを敷いて長持の上へ安置と成ると、さあ、夜が明けてからも狆どころか、女中連が寄附きますまい。」

倫之助は眉のあたりへ手を翳して、

「雑と見た處此のくらゐ。随分、人が坐つたほど大きいんですから、佛壇とも行かず、神棚とも參りません、置場所にも始末にも困つた處へ、然も此あるがために、天から生れて、待つて居たと云ふやうに、九官鳥が、ほゝ、と笑ふ。

鼠が天井で騒いでも、頭の上だと、
（煩いよ。）　が、青い唇から光つて出ます。眉の柳の優しいのが、ツゝと細い目を釣上げて、・・・・・

さあ、愈々氣味が惡いと成つた、夜が更けると、一晩も我慢が出來ない。で其の銀杏の樹の眞下の塀の上は、樹の靈がいつも何となく清浄で、北へさして廂へ届いた下枝の處は、猫も傳はらず、限つて其處には鳥のふんも無い處から、外へ出して黒塀に乘せておいた・・・・・縁あるもの、と云ふのも妙ですけれども、通りがかりの誰かゞあつて、ふと出來心で抱いて行きでもしてくれたら、其のまゝ遠ざけ奉らう、何の事はない、人形の捨兒ですな。」

倫之助は語氣をかへて、
「むかしなら姫君をお一方、楫なし船で行方も知れない荒海へ流したと云つた體です。怪しからんと言へば云ふんですが、實際、邸ぢや弱つたらしい。其處へ行合はせたのが、當夜の倫之助、私なんで

す。」

「これは、奇怪ぢや、はゝあ。」

と言ふ。

「處で、話は話ですが、これから肝心の事件です。貴方にお話しに參りましたは・・・・・

時に、人形だと思ひながら、大銀杏の樹の下に、緋の袴を視て、梢の風を、流か、瀧か、と聞きながら、宙に吊されたやうに成つて悚然として立ちますと、間もありません。

四邊が眞晝間のやうに、赫と青白く成つて、はつと思ふと、ーー　あの晩もお話しました、・・・・・・飛星とか云ふ人魂のやうな光りものがすら／＼と舞上りました。・・・・・丁ど銀杏の上まで・・・・・・梢を覗いたかと思ふと、音もなく沙汰もなしに、吻と息を吐いたやうに消えたんです。が、それが宛然、人形の古色を帶びた衣類の襟の合せめからすらりと尾を曳いて、心と云ふ字を、ほたりと白い面に取つ

て、凄く輝きながら抜出したものゝやうでした。
光りに驚いたものと見えます。ばたりと足許へ、星が缺けて黒く落ちたやうなのは、鳩よりも小さな鳥で。此は夏の半ばから凡そ幾千と云ふ數で銀杏に集つて居るのでした。が、落ちた。やあ、落ちたと思ふと、其奴を引掴んだのを機掛けに、私が、かた／＼駈出したものですから、内から、からりと格子を開けます。

空も黒し、雲が掛つて、銀杏の梢が大波を揺つて揺れる、と今更可恐く成つて、崖から家に轉がり込んだ氣がします。

（何うしたんです。）
（大變だよ。）
（えゝ。）
（鳥が目を眩して居るんだ。）
とつい云ひました。兩手で掴んでる椋鳥が目を眩して居ます。それが、何だか、私自分でゞもあるやうで變な心持でしたよ。

家内は、貴方、唯、鳥のことばかりしか氣が付きません。目白押の壓くら饅頭で、揉合つて、銀杏の樹に止つて居るから、一羽突出されて落ちたんだらう。それとも宵まどひをして寝ぼけたのか知ら、中には嬰兒も居るでせうから、可哀相にツて、さ、自分が薄ら眠さうな顔をしながら、それでも清涼劑、と云つた處で、椋鳥の氣絶したのには、何がきくか分りやしません。如何にも、むく／＼としたのがむく／＼と云ふやうに、堅い嘴を默々して居る。

とに角冷水で、湯谷と成ると、女のでも大き過ぎます、茶棚の抽斗から猪口、と云ふのが、鳥によると、鹽氣を嗅がしても斃死ませう・・・・・況や酒をや。慌てるから、（おい麥酒は何うだい。）ツて、家内に睨まれましてね。

此の時、家内が一生に出來した事は、紅猪口で・・・・・鏡臺の底から明いたのを取つて、ざつと濯いで、紅は藥だから。ーー　此も鳥には何うですか。

でも、薄りと桃の露ほど流れますのを　ーー　片手に抱いて・・・・・嘴へ注込んで、何しろ、苦しからう、暑さが酷いから。で、淺黄色の深草團扇で、ーー　餘計な事ですが、色は覺えて居ます、鳥が蘇生ると此の淺黄の上へ、それは／＼美いものが見えました　ーー　唯、家内の奴が、そよ／＼煽ぐ。

一品通はせるやうだね、なんぞ、と手酌で、貴方、私の方も清涼劑が欲しい・・・・・一息つくつもりで、麥酒の口を抜きながら見て居ますと、風をうける羽と一所に、今まで固まつてた黒い目の球が、きよろ／＼と動くんです。成程、椋鳥だから氣が付きました。家内の手から紅猪口の水ぢや、鶯だと蘇生りはしますまい。」

「まあ、可いですが。はゝゝ。」

と、氣の無い笑ひはしながらも、博士は耳を傾けた。

「やがて、身震ひをするやうに、はら／＼と羽を捌くと、家内が煽いだ手を留めて、はつと、うける

やうに鳥の胸へ團扇を當てます。

其の淺黄色の上へ、羽が亂れて、ひら／＼と散つてこぼれますのが、紫だの・・・・・紅だの・・・・・」

「紫だの・・・・・紅だの・・・・・・」

「はあ、萌黄も緑も、虹を削つたやうに見えます。五色です、五色の羽です、・・・・・そんな椋鳥はありますまい。」

博士は乗つて出でて頷いた。

「如何にも。」

「家内が、密と、夜中に朝顔の咲いたやうな圃扇の上で、指の尖で觸りながら、（絲屑のやうです、綿か。）と言ひます。

いや、羽だ、眞綿のやうな毛なんだ。・・・・・銀杏に集つた此の鳥の大群を、椋鳥だ椋鳥だ、と云ふけれども、それは町内の評定だけで、誰も手に取つて見たものは無いのだから、これは何とか云つて、

こんな綺麗な五色の羽のある別の鳥かも知れないよ、と云つてると、・・・・・窓の外の上に、向う側の塀について、立つて聽いて居たものがあつて、（御免。）　と云つて入つて來ました。ーー

さ、此です、貴方。

貴方は前原辰馬と云ふ繪師の方を御存じと思ひますが・・・・・」

博士のもの言ふに先んじて、其處は寢た氣勢のーー　次の室で、猫が嚏＞をしたやうな、乾びた咳をしたものがあつた。

倫之助は語續けた。

「つい近所の、煙草屋の、一人ものゝ婆さんの奥の室を、此の春ごろから借りて居るんださうで。

おとなしい、陰氣な人なんです。

些少の部屋代と食料だけ有れば可い、と言つたやうに、團扇の繪だの、頼まれた寫しものなどをして、一月を過ごすだけ稼いだ、と思ふと、あとは、ぶら〳〵寢たり起きたり。

宵がら夜具を被つて寝ることもあれば、夜中起きて居ることもあります。握飯を焼いて貰つて、竹の皮づつみにして、羽織の下へ、風呂敷の腰兵糧＞で、朝から腕組をして、てく／＼出掛けて、夜分遅く歸ることも毎度だと言ひます。

一晩も内をあけた事の無いのが確で、友達が一人訪ねるでもなければ、手紙が來るでも無し・・・・・・様子は變でも、人品な男ですから、又お姿さんもの ん氣で、別に怪しみもしないのですツて。

御存じの通り、私は、勤めに毎度旅を掛けます。家に居ましても所々出勝ですから、まことに見知越と云ふまでゞすが、家内は、狭い裏庭で、垣根越に顔を合せます處から、偶には煮豆の一品も、お惣菜を皿で運んで、一寸知己に成つて居ました。

煙草屋の婆さんを通じての話ですが、此の頃其の畫師が又輪を掛けて様子がをかしい。（仕事が可厭だ。が、何かしないと暮せない、打つのでも可し、うつすのでも構はない。箔の内職はないか、探して

見てくれ。）　と云ふんださうでしてね。京阪地の人と見えます・・・・・彼地は本場でせうけれども、東京には餘り箔打の商賣と云ふのがありますまい。が、婆さんも眞面目に氣に掛けて、家内にも聞いたさうで。其の節、私に話をするから、・・・・・箔の内職、選りに擇つて妙な註文何かの謎ぢやないか、と云つてますうちに、又謎のやうな事がありました。

それは、未だ宵の口だつたさうです・・・・・山の手の居周圍にはつひぞ見掛けない、年紀ごろ十八九かと思ふ、・・・・・艶々〳〵した高島田に結つた、品の可い、それで居て下町風の婀娜な處のあるのが、雪駄穿か何かで、褄を輕く、花道を歩行く形に町をすつと・・・・・唯一人、胡蝶〳〵を左右とあしらひさうに扇を使ひながら、煙草屋の店へ來て、澄まして立つと、婆さんが眼鏡越に、じろりと額で見上げたのを氣にも掛けず、暑いから聞放しに成つて居た奥の間を熟と見込んで、それから五歩ばかり、横あるきに、振返りながら、私どもの向うの塀際へ行つだのが、くるりと向返つて、もう一度店を覗く、と角の生垣について横露地へ廻つて、夕顔の花越しに庭

を覗いたのが、畫伯の居室なんです、ーー　居ない。・・・・・留守だつたさうで　ーー　其の娘の態度と云ふのが、・・・・・貴方。

やゝとばかりで近所の門納涼の連中が、遠卷に卷いたのに目も掛けず、澄まして覗いて、失張扇子を使ひながら、あとじさりに、一度溝際へ下つて、伸び上るやうにして、畫伯が居ないと見定めたか、其のまゝ舊來た隣町の大通りの方へ、襟脚のいゝ後姿で、すつと戻つて見えなく成つた・・・・・と言ひます。

同じく此の謎も、箔の内職と一所に、解けずに居ました・・・・・

ーー　其の畫伯です、・・・・・貴方がお聞及び、御存じの前原さん。ーー

それが唐突に入つて見えて、私が掴まへて、家内が袖に包んで居た、其の椋鳥の美い五色の羽と云ふのを、見たいと言ひます。

お易い事で、それ、お手に取つて、と云ふのを遠慮して、團扇に乗つたのを、手を支いて熟と視て居るうちに、顔の色が颯とかはりました。・・・・・

（毛ではありません、絹絲の縺れたのでもありません、五色に染めた眞綿の羽です。）　ーー

ーー　と、貴方、貴方の前ですが、恰もメスを持つて解剖をしたやうに説明をしましたよ。」

（襖の外にごそりと云ふ音。）

「處で、・・・・・（唯今、其の仔細は申されませんが、失禮ながら伺ひたいのは、此の椋鳥はお飼ひなさいます思召しでせうか。）　と恁う、畫伯が訊くんです。

飼ふにも飼はないにも、一晩介抱をするとして、入ものと云ふのが、差當り、鼠捕の金網しか心當りがない始末。銀杏邸の緋の袴ではありませんけれども、笑ふのを承知だつて長持へも入れられません、さしづめ外へ持つて出て塀の上へおきますか、羽があれば飛びます、飛べば遁げるので、之は直ぐに放

すつもりで居ます、と云ふと、畫伯が、それぢや、夜中とも申さず、初對面を顧ず、お騷がせをいたした罪に、御當家の下男と思召して、其の放生會のお役を自分に御申付けを願ふ、と云ふ、堅い口上。

いづれ。で、見送ると門へ出ました。・・・・・樹から落ちた其椋鳥と云つた足取りで、ふら／＼と、銀杏の許へ畫伯の行くのを、家内が格子戸から見送つて居ましたつけ。稲妻か、電光か。

ぴつしやり戸を閉てゝ、雨戸を締めて、私どもは臥りました。が、驚いた事は畫伯、其の時から行方知れず・・・・・」

「前原が、行方知れず？・・・・・」

と博士は顎の鬚を、ざわり、と扱く。

「其の晩切、歸つて來ません？

つひしか家を空けだ事の無いのに、不思議だ、何うしたらう、と云ふので一夜二夜は過ぎました。が、此が三晩四晩と成つて、煙草屋の婆さんが、老

年に似合はない甲高な聲で喚き出すと、町内お附合も騒ぎはじめる。何處へ知らせようにも誰に相談をしやうにも、戸籍も在所も分らなければ、親類一人友達の手がかりも無いのですもの。人品を信用したればといつて、お婆さんも暢氣過ぎる。雲を踏外した仙人のやうなものを、今時の時節に、奥へ飼つて置く法があるもんぢやない、と叱言を云ふやら、寄合ひを附けますやら。

で、念のために、町内が四五人連署で、其筋へ捜索願ひを出さうと云ふ、やがて半月、丁ど居なく成つてから日を數へて十四日の夜中頃茫乎として歸つて來ました・・・・・」

「前原が。」

「歸つてですね・・・・・」

倫之助は更めて、袴に整然と手を置いて、

「夜が明ける、と更めて、御迷惑を掛けた御近所へは、又お詫びに出ます。が、差當つて、ーーと云つて私どもへ、のそつと見えたのが彼是一一時＞じ≫頃です。

何處に怪我があるでもなし、衣服も鍵裂も見えなかつたんですが、實際、神隱しに逢つたとか、天狗に攫はれたとか云ふのは、恁うした風采かと思ふ、何とも形容の出來ません、・・・・・影が薄い、顏色憔悴しましてね。そして言ふことが變です。

（お蔭を以て、あの椋鳥に連れられまして。）

と椋鳥に連れられたは妙でせう。・・・・・

（で、樹から樹を傳はつて、或大なる森の、木隱れた高樓の欄干に、仰向けに頬杖しながら、五色の眞綿を練つて、紅梅の唇、白梅の齒で、美い霞を綾取る端麗な夫人に逢つて來ました。

蒼空の水のやうな白い雲の流れを隔てた、向うの高樓の窓にも、天女のやうな面影が覗いて、此方の欄干と微笑みを交はす。

牡丹の花のかへり咲した、園の池の汀には、高島田に結つた錦繪のやうなのが鯉を連れて遊んで居ます。ーー　まことに天上、極樂です　ーー

が、女の首の落ちたのもある、黒髪も散つて居ます、裳の亂れた白脛も横はり、虚空を掴んだ袖も飛ぶ・・・・・

廣庭を仕切つて、小屋を並べて、此を守るものは脱衣婆で、白衣の看護婦のやうなのが、或は抱き、或は繼ぎ、或は塗ります。此は地獄です、ーー　いづれ、冥土です。

其の五色の霞を綾取る、夫人との約束で、近日更めて其處へ行きます、冥土へ行くのです。冥土へ行くのは死ぬのです、近いうちに呼吸を斷ちます。

私は其が本望なのです。）

ーー　と其の畫伯が言ふんです　ーー）

時に、（其の夫人との約束に因つて、私が死ぬ、私が唯死ぬだけでは不可いのです。世界に此を、死んだ事を、確かに認めて貰はなければ成らない人が一人ある。其れ、清川、扶道氏と云ふ工學博士・・・・・・）

と恁う又前原さんが云ふのです。」

「えゝ、御免され。」

しやがれた聲して、襖を開けて、割股で出たのは、是なむ黒澤尻の刀自である。着と早や寝衣を替へて、紋の着いた被布でござる。

「や、これは其の清川の御老母です。金剛倫之助さん、お能の先生ぢや。」

「こんれは、先づ、はい。」

「はあ、はじめまして。・・・・・時に清川さんは、目下御洋行中で、此戰爭にも、いまだお歸りがないやうに承ります。これも畫工さんから其時に聞いたのです。」

「獨逸のべろりん、に。」　と刀自は、顎を上げて舌をべろり。

「目下は英京です。一昨年の冬から參つて・・・

・・滯在の間、御老母を預つて居るですよ。」　と博士が言つた。

「處で、畫工さんの云ふには、清川さんが留守であるから、自分の死んだことを確めて頂きたいのは、貴方、御親戚で在らつしやる貴方、別して醫學博士で在らつしやるから、いざ死んだと云ふ時に、御檢診が願ひたい。貴方に診て頂かなければ死んでも死ねない・・・・・いや・・・・・意味は違ひますが、浮ばれないと云ふんです。

此はお聞入れはあるまい、ために豫て私が御懇意である事を知つてるに就いて、一生の依頼、折入つて、見掛けて頼む、とつい引入れられたやうに成つて、私が承知するのを見て歸りました。

今まで驗のない、出先へ家内から電話が掛つて、先刻です、　ーー　大變な事が出來た、歸れ、と言ひます。　ーー　前原が息を引取りました・・・・・」

☆ ☆ ☆ ☆

5 5 5

9 8 7